山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

日本語の談話における初頭性及び末尾性に関する研究

平成 28 年 9 月

熊　磊

目次

1. はじめに……1

1.1. 研究動機と目的 ……1
1.2. 本論文の構成 ……2

2. 先行研究 ……3

2.1. 日本語の文について……3
2.2. モダリティ論について……4
2.3. 言語行動について……5
2.4. 本研究の位置づけ……6

3. 調査要領……8

3.1. データについて……8
3.2. 分析対象について……9

4. 文の初頭行動・末尾行動の記述……11

4.1. 初頭行動……11
4.1.1. 直前の発話あるいは話題に応答する言語行動……11
4.1.1.1. 疑問に対する返答……11
4.1.1.2. あいづち……15
4.1.1.3. 笑い……19

4.1.2. 直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動……20
4.1.2.1. 言いよどみ……20
4.1.2.2. 意外・驚き……23
4.1.2.3. 接続表現……26

4.1.3. 直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動……28

4.1.3.1.　指示表現……28
4.1.3.2.　同語重複……29

4.1.4.　後続命題に態度を表明する言語行動……31
4.1.4.1.　副詞修飾……31

4.1.5.　後続命題の一部を焦点化する言語行動……33
4.1.5.1.　「は」「って」などによる焦点化……33
4.1.5.2.　疑問詞の焦点化……36

4.2.　末尾行動……38

4.2.1.　既出命題に態度を表明する言語行動……38
4.2.1.1.　形式名詞述語……38
4.2.1.2.　話し手自身の感情・思考……40
4.2.1.3.　命題に対する推量・伝聞など……42
4.2.1.4.　肯定・否定の態度……44
4.2.1.5.　命題の遂行……46

4.2.2.　発話あるいは話題を完了する言語行動……47
4.2.2.1.　述語の終止形……47

4.2.3.　発話あるいは話題を継続する言語行動……49
4.2.3.1.　接続表現……49

4.2.4.　既出命題を焦点化する言語行動……51
4.2.4.1.　前述の事項を焦点化する表現……51
4.2.4.2.　前述の事項を例示として扱う表現……52

4.2.5.　発話あるいは話題を共有する言語行動……53
4.2.5.1.　終助詞及びイントネーションによる共有……53
4.2.5.2.　聞き手への何らかの行動の求め……55

4.3.　言語行動と言語形式のまとめ……57

5．文の初頭行動・末尾行動の関係……60

5.1.　言語行動の配列……60
5.1.1.　初頭行動の配列……60
5.1.2.　末尾行動の配列……64

5.2.初頭行動と末尾行動の鏡像関係……70

6．言語行動の統合関係……75

6.1.　話し手と聞き手と交替する場合……76

6.1.1.　I - a 類……76
6.1.2.　I - b 類……77
6.1.3.　I - c 類……78
6.1.4.　I - d 類……80
6.1.5.　I - e 類……81
6.1.6.　I - f 類……83
6.1.7.　I - g 類……84
6.1.8.　II - a 類……85
6.1.9.　III - a 類……87
6.1.10. III - b 類……88
6.1.11. III - c 類……90
6.1.12. III - d 類……91
6.1.13. III - e 類……93
6.1.14. III - f 類……94
6.1.15. III - g 類……95
6.1.16. III - h 類……97
6.1.17. III - i 類……98
6.1.18. III - j 類……99
6.1.19. III - k 類……101

6.1.20. III - l 類……102
6.1.21. III - m 類……103

6.2. 話し手と聞き手と交替しない場合……105

6.2.1. I - a 類……105
6.2.2. I - b 類……106
6.2.3. I - c 類……107
6.2.4. II - a 類……109
6.2.5. II - b 類……110
6.2.6. III - a 類……111
6.2.7. III - b 類……113
6.2.8. III - c 類……114
6.2.9. III - d 類……115
6.2.10. III - e 類……117
6.2.11. III - f 類……118

6.3. 後文の初頭行動と前文の末尾行動との関係……120

6.3.1. 各パターンのまとめ……120

6.3.2. 類似するパターンについて……126
6.3.2.1. I 類と III 類との比較……126
6.3.2.2. II 類と III 類との比較……129

7. まとめ……133

7.1. ２つの鏡像関係……133
7.1.1. 文内部レベル……133
7.1.2. 文を超えたレベル……135

7.2. ２つの鏡像関係が意味すること……136

8．問題点と今後の課題……138

9．おわりに……142

参考文献……143
謝辞……150
【付録】談話調査のデータ……151

1. はじめに

1.1. 研究動機と目的

文は、話し手が外在的･内在的な要因に基づいて作り出した事柄的な内容と、その事柄をめぐる話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれる、と考えられる。日本語の場合、膠着的な言語であるため、後者は文の末尾に位置していると考えられてきた。しかし、文の初頭にも感動詞類などが来ることから、心情・態度が現れることが観察される。このことから、文の初頭及び末尾には、同じような性質を持った要素が現れる可能性があることが予測される。

従来、文をどのように捉えるかということと緊密に関わっている研究に、モダリティ論がある。モダリティ論の観点によって、「文頭」のモダリティ要素は「文末」のモダリティ要素と呼応する性格を持つと指摘されている。具体的には、次の例を見られたい[1]。

(1) 030211D: 【たぶん、2、3 歳でしょう？】
030212E: 【そうだけど、】

(2) 060080J: 【えとね、ああ、だいたいそういう仕事です。(ああ)】
【で、あのう、その後、定時制高校にも行ったんですけどね。(ええ)】

モダリティ論の観点によると、(1)の 030211D では、「たぶん」は、推量を表す「でしょう」と呼応し、(2)の 060080J の最初の文では、「だいたい」は、判断を表す「です」と呼応すると考えられている。しかし、(2)の 060080J の最初の文の「文頭」にくる「えとね」「ああ」と、次の文の「文頭」にくる「で」「あのう」は、話し手の心情・態度を表わすモダリティ要素と見られるが、それぞれの「文末」のモダリティ要素と呼応するとは言えないだろう。

言い換えれば、「文頭」及び「文末」はどのような性質を持っているのか、互いにどのように関連するか､モダリティ論の観点では解説できないところが残っている｡そうすると、新たな観点で観察する必要があると考えられる。また、ここで言及した「文頭」及び「文末」は従来「前置き」及び「文末表現」などと呼ばれているが、それらは具体的に何を指すか、従来の文研究には明確な定義はないようである。

上述した問題を解明するために､本論文では､言語行動の視点を設定することによって、談話における文を観察することにする｡従来の「文頭｣､「前置き」及び「文末」「文末表現」

[1] データの表記については、3.に説明している。

といった用語を本研究では「初頭」及び「末尾」と呼び、言語行動として、「初頭行動」・「末尾行動」及び「初頭形式」・「末尾形式」などの概念を導入する。

なお、現在までの研究によって、文の初頭のモダリティ要素は末尾のモダリティ要素と呼応する性格を持つということが分かっている。本論文では、1 文の「初頭」及び「末尾」に用いられた言語形式からどのような言語行動が捉えられるか、それらはどのような性質が見られるかということを、談話調査のデータから言語行動の視点で分析してみる。

また、自然談話のまとまりの中で、話し手及び聞き手は、いかに談話を展開させるか、という点においても、言語行動の視点で考察する。

1.2. 本論文の構成

本論文は、全部で 9 章から構成される。1.から 3.までは、先行研究及び本論文の方法論及び本論文の立場を明らかにする。4.から 9.までは、収集したデータを用いて、文の「初頭行動」と「末尾行動」との関係を検証する。詳細は下記のように構成されている。

1.では、研究動機と論文の構成を述べる。

2.では、日本語の文、モダリティ論、言語行動について、それぞれの先行研究について言及する。その上で、本研究の立場を述べる。

3.では、談話調査の要領及び分析対象について記述する。

4.では、言語形式を観察した上で、それぞれの言語行動を設定する。具体的には、初頭行動・末尾行動及び初頭形式・末尾形式を定義する。

5.では、文の初頭行動・末尾行動の鏡像関係を論じる。

6.では、文の初頭行動・末尾行動の統合関係を論じる。

7.では、文の初頭行動・末尾行動の鏡像関係と統合関係から得る結果をまとめる。

8.では、問題点及び今後の課題を述べる。

9.では、結びとして、対照言語学的な課題について述べる。

2. 先行研究

本章では、日本語の文、モダリティ論、言語行動に分けて、それぞれに関する先行研究を振り返る。また、最後に本論文の位置づけについて述べる。

2.1. 日本語の文について

日本語は、膠着的な言語であるため、文が、典型的には主語(S)、目的語(O)、述語(V)からなる。文の定義については、『日本語文章・文体・表現事典』は、「文に対する十全な規定は、単語のそれに劣らず難しい。フリーズ（C.C.Fries）の The Structure of English は、文の定義が二百あまりあることを指摘している。」(中村明ほか編 2011:25)と記述している。従って、どのように定義するかは、文研究の考え方そのものにも影響されるだろう。

文は、その形式的、意味的特徴から様々な分析がなされるが、一般的に行われている文の研究には、構造的な観点からと意味的な観点からとがある。構造的な観点とは、文がどのような下位的構成要素（節、語など）から構成されているのか、といった文内部の構造に関わるものである。意味的な観点とは、話し手の事柄に対する態度、あるいはどのように聞き手に伝達するか、といった表現意図に関わるものである。今日まで文に関わる研究は、かなり蓄積されている。林四郎(1960a,b)、南不二男(1974,1993) 、北原保雄(1981)、久野暲(1973,1983)、奥田靖雄(1985)などの研究が挙げられる。

これらの内に、林四郎(1960b)は、文章を構成する各文がどのようにつながるかに着目し、その文の「姿勢」を分類した。これは文章論の研究であるが、本論文に対して意義があると筆者は考えている。ここでは、その考え方の要点を示す。

林四郎(1960b)は、文の「姿勢」を、「言い始めの時の姿勢」「言い終わりまでを見通した姿勢」「言い終わる時の姿勢」の 3 段階に区切って、それぞれの「姿勢」に対応する文型を「起こし文型」「運び文型」「結び文型」と称している。また、「「結び文型」は，ほとんどそのまま「文の表現意図に関する文型」に当たり，つまり，述語の陳述部を問題にするのである」(林四郎 1960b:42)と指摘し、文の述語部分を「描叙段階」「判断段階」「表出段階」「伝達段階」の 4 段階に区別している。それぞれの内容は下のようにまとめられる。

(3) 「描叙段階」: 事柄に対する「態」、状態、程度など
「判断段階」: 肯定・否定判断、可能・不可能判断、推量など
「表出段階」: 感動、願望、意志など
「伝達段階」: 単純な伝達、押しつけふう、勧誘、命令、質問など

上述した 4 段階のように、文の末尾に位置する「結び文型」は、話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれると考えられ、日本語の文の述語構造の一般的性格が見られる。

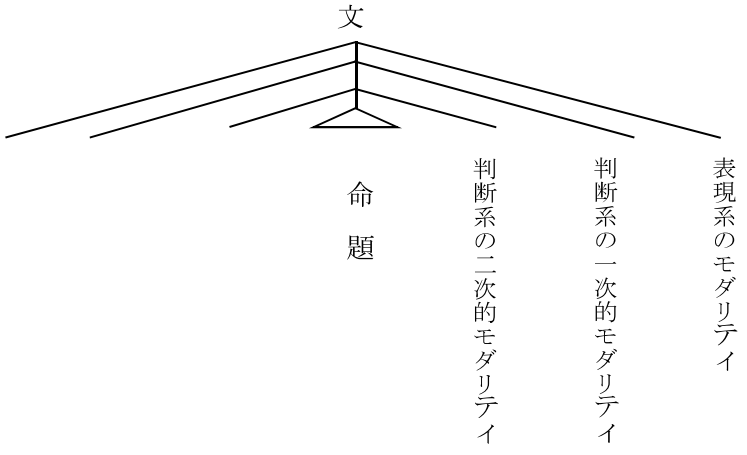
2.2. モダリティ論について

モダリティの体系の全体像を描き出す研究としては、仁田義雄(1991)、益岡隆志(1991)、森山卓郎・工藤浩(2000)、日本語記述文法研究会編(2003)などが挙げられる。これらの研究に、共通する考え方は、下記のようにまとめられる。

(4) 日本語の文は、客観的に把握される事柄を表す要素（命題）と、表現者の主観を表す要素(モダリティ)という二大要素で構成される。「話し手の主観性」を表す形式は、すべてモダリティ形式と考えられる。

とくに、益岡隆志(1991)はモダリティ論の観点で、文構造及び文構造に対応する意味などについて議論を展開している。この研究は、文を構成するモダリティは「表現形のモダリティ」と「判断系のモダリティ」とに大きく分類でき、さらに下位に 6 つのカテゴリーに分けられると述べている。その上で、モダリティの構造は「依存関係構造」と「階層関係構造」の 2 種の構造があることを指摘している。「依存関係構造」は、本論文の 1.に挙げた(1)のように、「でしょう」は判断を表す「モダリティ核要素」として、「たぶん」は判断の対象に含まれるのではなく、「モダリティ呼応要素」とする、ということである。「階層関係構造」については、「モダリティの諸カテゴリーの間には、文中に顕在化する際には、互いに包み込む・包み込まれるという包含関係が成立する。言い換えれば、カテゴリー間の統合的関係として上位・下位の階層関係が認められる」(益岡隆志 1991:42)と指摘されている。カテゴリー間の全体的な階層関係を図示すれば、次のようになる。

［図 1］モダリティの階層関係



(益岡隆志 1991:41 図(51))

また、この研究では、主に終助詞「ね」「よ」、文末の「のだ」「わけだ」などの言語形式からモダリティの構造と機能を検証している。

今日ではモダリティ論の観点によって、文の末尾がより詳細に解明されたと考えられるが、文の初頭に関しては、「モダリティ呼応要素」と呼ばれる副詞的なものにしか言及されていない。また、モダリティの「依存関係構造」といっても、本論文の 1.「はじめに」に文の「文頭」にくるモダリティ要素は、と「文末」のモダリティ要素と呼応しないデータをあげた。「文頭」及び「文末」はどのような性質を持っているのか、互いにどのように関連するか、モダリティ論の観点では解説できないところが残っている。

2.3. 言語行動について

言語研究の中で、言語行動の研究はかなり盛んである。「言語行動研究とは, 社会言語学・語用論・談話分析・会話分析などの，それぞれが固有の歴史をもつ既存の研究分野に対する総称」(渋谷勝己 2003:241)と指摘されているように、言語行動はきわめて多くの側面に関わる幅広い分野である。

言語行動の定義について、『日本語学研究事典』(2007:2)は下のように記述している。

「言語行動とは、言語によって人が行う、思考・表現・伝達、及びこれらに対応する理解・受容・反応などの行動という。具体的には、思考の構築・内省・記述、思考内容の表現・理解・記録、意思の伝達・受容・反応、感情の表出・受容・反応、歌謡・文芸・書な

ど言語芸術の表現・鑑賞・蓄積など多様な姿をとる。いずれも、音声・文字など言語記号や文・文章・発話など言語作品そのものでなく、それらによって人が行う動的な行動やそのやりとりの過程である。」

南不二男(1974)は、「言語社会」「参加者」「状況」「言語的コミュニケーションの機能」「コミュニケーションの内容（話題)」「媒体」「言語体系」など言語行動の構成要素から談話の仕組みを議論している。また、南不二男(1979:5)は、言語行動を「人間がことばを使ってなんらかのコミュニケーションを行う行動」と述べている。

また、杉戸清樹(1992:34)は、言語行動について、次のように述べている。

「言語行動がこうしたさまざまな要素から成り立つという議論をふまえて，これらの要素(ないしその組み合わせ)を観点として実際の言語行動を観察・記述・分析する多様な研究が展開される。言語行動研究の主力というべき領域である。言語行動研究も概括すれば言語研究に属するからには，多くの場合，諸要素のうち言語形式が研究の焦点に選ばれることは言うまでもない。とくに社会言語学的研究においては，個人や言語社会に観察されることばの幅を言語変種(language variety)という術語によって積極的に扱うという，言語形式についての基本的な姿勢が一貫してある。」

このように、言語行動と結びついているのは言語形式である。1 つの文が、どのような言語形式を選ぶかは、話し手の主観で決まり、音声的に実行されると考えられる。

2.4. 本論文の位置づけ

ここまで、先行研究を振り返ってみた。それらを踏まえて、本節では、本論文の位置づけについて述べる。

本論文では、言語行動については、「言語によって人が行う、思考・表現・伝達、及びこれらに対応する理解・受容・反応などの行動という。」という、『日本語学研究事典』(2007:2)の定義を援用する。文は、言語行動の基本的単位として、話し手が外在的・内在的な要因に基づいて作り出した事柄的な内容と、その事柄をめぐる話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれる、とする。

また、本論文では、言語行動と言語形式との対応関係を述べているが、言語行動と言語形式とは別々のものだと筆者は考えている。すなわち、言語形式は言語行動の道具として存在すると考える。従って、2 つの言語行動に同じ 1 つの言語形式が利用されることもある。

なお、「敬語表現」「待遇表現」「配慮表現」などを対象とする分野では、言語行動におけ

る待遇のあり方が様々な角度から考察されている。待遇が現れる言語形式は、初頭や末尾、更に命題のところに出現する可能性があり、それゆえ網羅的な存在であるので、本論文では扱わないことにする。

本論文では、言語行動の視点を設定することによって、談話における文を観察することにする。従来の「文頭」「前置き表現」及び「文末」「文末表現」という用語を本研究では「初頭」及び「末尾」と呼び、「初頭行動」・「末尾行動」及び「初頭形式」・「末尾形式」などの概念を導入する。本論文で用いる概念を次ように仮定する。

(5) a. 初頭行動： 話し手が、話題に関連する命題を産出するために行った、何らかの言語行動の総称。

b. 初頭形式： 上述した言語行動を行うために、話し手が用いる言語形式。

(6) a. 末尾行動：話し手が、命題を産出した後行った、何らかの言語行動の総称。

b. 末尾形式：上述した言語行動を行うために、話し手が用いる言語形式。

そして、文の初頭形式及び末尾形式からどのような初頭行動及び末尾行動が捉えられるか、それらはどのような性質が見られるかということを、談話調査のデータから言語行動の視点で試みる。

3. 調査要領

3.1.データについて

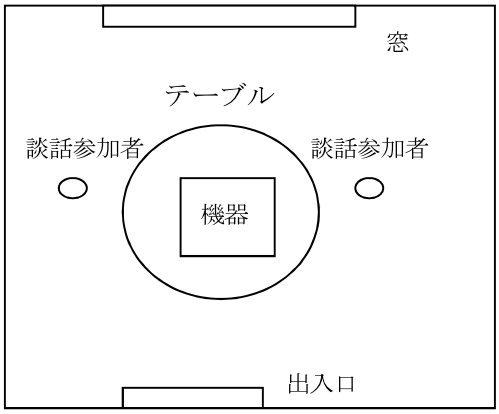
本節では、本論文に用いるデータと、その収集方法について述べる。談話調査では、6つの談話を収集した。それらを「データ 1」「データ 2」･･･「データ 6」と呼ぶ。被調査者の属性を含め、各データの概要を［表 1］に示す。

［表 1］データの概要

データ	被調査者	被調査者の関係	録音・録画の時期	録音・録画の時間
データ 1	A（20 代 女性） B（20 代 女性）	同じ大学の学部生同士	2014 年 6 月 16 日	約 15 分
データ 2	A（20 代 女性） C（20 代 男性）	同じ大学の学部生同士	2014 年 6 月 16 日	約 15 分
データ 3	D（20 代 女性） E（20 代 女性）	同じ大学の学部生同士	2014 年 12 月 8 日	約 30 分
データ 4	F（20 代 女性） G（20 代 女性）	同じ大学の学部生同士	2014 年 12 月 8 日	約 30 分
データ 5	H（20 代 女性） I（40 代 女性）	大学院の同じ専攻の院生同士	2015 年 3 月 27 日	約 30 分
データ 6	I（40 代 女性） J（60 代 女性）	初対面	2015 年 3 月 27 日	約 30 分

談話調査は、2 人ペアの組み合わせで行った。談話の自然さを確保するため、調査者は「話題などは指定しませんから、自由談話の形式で会話してください、30 分後(データ 1 とデータ 2 は 15 分)に再び部屋に戻って録音を中止します」とのみ指示を与え、退室した。事前に、録音・録画機器(KINGJIM ミーティングレコーダーMR360)をセットしておき、全談話の過程を録音・録画した。録音室の配置は［図 2］の通りである。

［図 2］調査時の配置



また、談話調査によって得たデータを文字化する際、次のような表記を使用している。

？　上昇イントネーション
。　下降イントネーション
、　短いポーズ
{笑い} 笑い
・・・　音声的に言いよどんだように聞こえるもの
//　改行される発話と発話の間がまったくないこと、同時発話
(　)　相手の発話に重なるあいづちや笑い
#　聞き取れない部分、推測される拍数に応じてつける
＜　＞ 聞き取りにくい部分を予測したもの
(氏名)　固有名詞（氏名）が現れる箇所

3.2.　分析対象について

本節では、データを分析する際の分析対象及び分析対象に使われる記号を説明する。

データには、「060082J」のような発話番号を使用している。最初の 2 桁数字「06」は談話データ全体を示す番号で、次の 4 桁数字は発話の通し番号で、「J」は発話者である。括弧【　】は一つの文を指す。次にデータのサンプルを挙げる。

(7) 060082J:【えと、3 年制の、だいがっ、高校に行けない人たちが、（はい）皆働かないといけないわけでしょう？】
060083I:【うん】
060084J:【だから、すごくね、活気があって、】

【いい時代だったなと思います、ある意味でね。】

本論文は、文に着目して、その初頭及び末尾に現れる言語形式を観察する。2.4.で見たように、文は、言語行動の基本的単位として、話し手が外在的･内在的な因素に基づいて作り出した事柄的な内容と、その事柄をめぐる話し手の主体的な捉え方及び心情・態度のあり方が含まれる、と述べている。それを基準として、基本的に、(7)の 060082J の発話のように、「えと、3 年制の、だいがっ、高校に行けない人たちが、（はい）皆働かないといけないわけでしょう？」を 1 つの文と認める。そして、それを分析対象とする。また、060083I の発話では、「うん」も一つの文と認めるが、一語であるため、初頭と末尾の言語形式を観察しにくい。そのため、本論文では、それを分析対象としない。また、060084J のように、話し手が一度に発話した内容に、複数の文がある。その場合は、改行して示す。

4. 初頭行動及び末尾行動の記述

本章では、収集した会話データを利用して、文の初頭形式及び末尾形式にはどのようなものがあるか、どのような言語行動が捉えられるかを分析する。

4.1. 初頭行動

まず、本節では初頭行動について観察していく。初頭行動は、2.で仮定したように、話し手が、話題に関連する命題を産出するために行った、何らかの言語行動の総称である。本章では、文の初頭に来る言語形式は様々であるが、それらと結び付けて観察しながら、下記の５つの言語行動を設定し、記述する。

・直前の発話あるいは話題に応答する言語行動
・直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動
・直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動
・後続命題に態度を表明する言語行動
・後続命題の一部を焦点化する言語行動

4.1.1. 直前の発話あるいは話題に応答する言語行動

本節では、下記の文の初頭に来る言語形式を観察し、それらを通して、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」を設定する。

・疑問に対する返答
・あいづち
・笑い

4.1.1.1. 疑問に対する返答

話し手は、返答の形で、聞き手による回答の要求あるいは情報などのやりとりに対して反応する。その回答の要求あるいは情報のやりとりは言語形式としては、おもに疑問の形で出現する。それに応じて、話し手が自己の発話を立ち上げる時点では、肯定、否定、承認など様々な形で反応する。まず、次のデータが挙げられる。

(11) 010122A: 【あ、カクテルか、（うん）でも、酒飲まないか？ 】
010123B: 【うん、まあ、でもね、飲み会があるよ。】
【飲み会ある】

(12) 010008B: 【ケイドロやってた。】

010009A:　【ケイドロ？】

010010B:　【うん、山大でやってた。】

(13) 060091I:　【ああ、そう思われれば、】

【すごいいいことじゃないですか？】

060092J:　【はい、（うん）まあ、ほんとですね、】

【なんか、いろんな問題しますね。】

(14) 040106G:　【あ、でも、いずれ、はやく、免許取ったあと、】

【ペーパになりそうよね。】

040107F:　【そう、あれもね、今の時期さあ、取っても正直運転しねえから。】

(15) 020066C:　【あのう、あのう、ショッピングモールじゃないけど、】

【デパートみたいな？】

020067A:　【そうそうそうそう、そんな感じのところに行ってきましたね。】

一般的に、(11)～(15)のように「うん」「はい」「そう」など感動詞類は、応答要求に対する肯定の態度を表す。(11)では、B は「うん」を用いて、「お酒を飲まない」ということを肯定する。(12)では、A は、直前の B の発話に対して情報を確認するため、反問の形で B の肯定か否定かを求める。「うん」は、B の肯定の態度が表れ、確かに「ケイドロをやってた」ということの再確認である。(13)では、I は自分の意見に賛成かどうか J に求めているので、J は「はい」を使って、賛成の態度を表す。言い換えれば、J が I の意見に対して、肯定の態度を表している。(14), (15)では、「そう」「そうそうそうそう」の使用は、(13)と同様に、話し手は、自分の意見に賛成かどうか聞き手に求めている。(15)に出現した「そうそうそうそう」のように感動詞「そう」の 2 つ以上の繰り返しの形は実際の会話にもよく見られるが、言語行動としては、単なる「そう」と変わらない。

また、次の(16)に出現した感動詞「はい」は、行為要求に対する承認の態度を表す。「名前」を教えるかどうかは、聞き手が判断するので、I の「はい」という返答によって承認の態度を J に与えた後、自分の名前を名乗っている。

(16) 060002J:【こちらこそよろしくお願いします、（{笑い}）ちょっと、お名前をなにか教えてもらえますか？】

060003I:【はい、私は（氏名）と申します。】

初頭に来る肯定あるいは承認の態度を表す感動詞の他に、「いや」「いえ」のような、否定の態度を表す感動詞も言語データに見られる。次のデータが挙げられる。

(17) 040611F:　【でも、あのクッパさんの 3 つ選ぶやつは大概運じゃない？】
040612G:　【いや、あれ全部運だよ。】

(18) 020205A:　【カレー、カレー、そんなに手づくりする？】
020206C:　【えっ、どういうこと？】
【インスタントのこと？】
020207A:　【いやいやいや、なんと言うか、そんなに、カレー作る機会ってあるか？】

(19) 060085I:　【ああ、そうなんですね、】
【すごくでも、熱心に勉強ずっとされたわけですよね。】
060086J:　【いえいえ、そういうわけでもないです。】

(17)～(19)のように、「いや」「いえ」などの感動詞類は、直前の応答要求に対する否定の態度を表す。(17)では、G は「クッパさんの 3 つ選ぶやつ」について、「大概運（だ）」ではなく「全部運だ」ということを述べる前に、「いや」を用いて F の観点を否定する。(18)では、B は、A が「インスタントのこと」を言っているかどうかという、直前の話の内容を確認するが、A は「いやいやいや」を先に述べて、B の質問に否定の態度を表す。(19)の「いえいえ」は、J が I の意見を否定すると捉えられる。もちろん、それも謙虚という待遇表現と考えられる。

ここまで、話し手は直前の発話あるいは話題に対して、感動詞類を用いてどのように反応するかを記述した。友定賢治(2005:58)は、感動詞を「立ち上げ詞」であるという見方を提唱した。「他者の発話に応じて、応答の発話を立ち上げるもの」という意味で、本論文の立場はそれと一致する。これらの感動詞類といった言語形式に相当する言語行動を、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と設定する。

また、感動詞類以外には、副詞類、助動詞類、感情を表す動詞、直前の発話の一部（もしくは全体）を繰り返すという語彙的な応答があり、これらは感動詞類と同様に、同じ言語行動として捉えられる。次のデータが挙げられる。

(20) 060261J: 【携帯もね、すごく進化しましたよね。】

060262I: 【ほんとに、たぶん、携帯が普及し始めた頃ですね（はい）、】

【これが、もし、机の上に置いてあったとして、（はい）】

(21) 050132H: 【研究室は、やっぱり、エアコンがきれいではないですよね。】

050133I: 【でしょう、たぶん、やばいと思う。】

(22) 040225G: 【それ、オーバーディスのやつ？】

040226F: 【違う違う、あのう、あのう、『キングダムハーツ』のシリーズやりたいんじゃけど。】

(23) 030245E: 【そうか、ユカは、泳げるっけぇ？】

030246D: 【泳げる、泳げる、綺麗には泳げないけど、】

(24) 040104G: 【あ、そうなん、土日はあかない？】

040105F: 【あいてない、あいてない、平日しかやってないから、】

【いけんのよね。】

(20)では、J は、「携帯が進化した」と思ったことを I に確認する。I のそれに対する応答「ほんとに」は、自分も同じように感じている気持ちを表す。(21)では、助動詞「でしょう」は、基本的に文の末尾に置き、推量の意を表すが、初頭にくるのは、直前の発話に対して、肯定の意と捉えられる。(22)では、「違う」は、一致しない、異なるという意味である。ここでは、F が「それはオーバーディスのやつではない」という否定態度を G に伝えるとは言え、前述の感動詞類「いや」と入れ替えても、言語行動としては変わらないと考える。(23)の「泳げる、泳げる、」と(24)の「あいてない、あいてない、」は、話し手の発話の一部を繰り返したものである。これらの言語形式では、聞き手が応答要求に対する肯定の態度を捉えられる。前述の感動詞類「はい」、「うん」などを入れ替えても、言語行動としては変わらないと考える。

話し手は直前の発話あるいは話題に対して、自分が知っているかどうかを様々な言語形式を用いて表し、その言語行動を使い分ける。一般的に、(11)～(19)のような感動詞類で肯定の態度あるいは否定の態度を表す。また、(20)～(24)のような副詞類などを用いる言語形式も見られる。これらの言語形式は初頭に出現する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「直前の発話あるいは話題に応答す

る言語行動」と設定できる。

4.1.1.2. あいづち

会話では、聞き手が話し手の話を聞いているとき、反応がないことは稀である。特に、直前の話あるいは話題に関心をもち、同意したり理解したりするという合図を話し手にあいづちで伝えるのが一般的である。堀口純子(1997：42)は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義している。「発話権」と言う点においては、本論文の立場とは異なるが、「話し手から送られた情報を共有」するという点においては、あいづちという言語形式から、その言語行動の使い分けが捉えられると考える。あいづちには、感動詞類、副詞類などがある。なお、実際の会話に頷きというジェスチャーなどもよく使われるが、本論文では扱わない。次のデータが挙げられる。

(25) 010027A: 【まあ（ああ、そうか）20 だね、うん、そう、という感じ、】
【プレゼントを買いに行って来ました。】
010028B: 【うん、どこまで、どこ行った？】

(26) 060076J: 【だからね、男の人はどんな生き方したのかなというのが、(はい)】
【はっきり分からないです。】
060077I: 【はい、そういう理由ですか？】

(27) 020073A: 【まあ、高校の時からの友達なん。】
020074C: 【ああ、やっ、ちょっと、国研の 1 年生だれか//、】
020075A: 【ああ、でも、あれよね、ヨシノの誕生日プレゼントは･･･】

(28) 030154E: (前略)
【それこそ、なんのために、今（うん)、生活してるんとか（そうそう)、】
【なんか、いやなこと、考えそうやけん、働きたいかも。】
030155D: 【そう、なんでもいいから（うん)。】
【{笑い}、モチベーションみたいな、(後略)】

(29) 030048E: 【よく言えば（うん)、するってほうがいいよって言ってもらとるけぇ、】
【またありがたいなって。】

030049D: 【そうやね、まあ、がんばろう、】
【あとちょっとだしね】

(30) 060110J: 【やっぱり原発のこともありますし、】
060111I: 【はい、そうですね、なんか、このさき、なんか、こう、子ども、(ああ、)
なんか、そういうこと考えると（はい)、】
【いいのかあっていう。】

一般的に、(25)～(30)のような、「うん、」「ああ、」「はい、」「そう、」「そうやね、」「はい、そうですね、」などの感動詞類は、それぞれの文の初頭に出現し、前に話し手が提供した情報に対する理解を示す。なお、「そうですね」というのは、コピュラ文の形であるが、本論文では言語行動を捉える時は、「そう」の形と同様に見なす。(25)では、B は「うん」を用いて、直前の A の提供した「プレゼントを買いに行った」という情報に対する理解を表す。その後、「どこに行った？」と A がさらに補助の情報を追究する。(26)は、(25)と同じパターンであり、同様に説明できると考える。「はい、」は直前の発話に対して理解を表す。次は、「そういう」という指示表現は直前の内容を指し、I が反問の形で確認を求める。一方、(27)では、「ああ、」は、C が A の発話に応じて理解を表す。A の提供した情報を手掛かりとして、C が何らかのことを思い出して、「やっ、ちょっと、」を用いて自分の話を展開する。その次の A の発話は、(28)～(30)と同様に考えられる。一般的に、「やっ、」「ちょっと、」「なんか」「でも」などの表現は、「はい、」「そう、」「そうやね」などあいづちを伴って出現する。直前の発話あるいは話題に対して関心をもち、理解したという合図を表し、その後、自分の話題になる発話を展開する。また、(30)では、「はい、」「そうですね、」のように、あいづちの表現が 2 つあるいは 2 つ以上の繰り返しの形も実際の会話にもよく見られるが、言語行動としては、1 つのみのパターンと同じであると仮定する。

ここまでは、話し手は直前の発話あるいは話題に対して、感動詞類を用いてどのように反応するかを記述した。次に、感動詞類以外に、「ほんとう」「たしかに」など副詞的なもの、助動詞類、直前の発話の一部（もしくは全体）を繰り返すという語彙的なあいづちのデータを挙げる。これらは感動詞類と同様に、同じ言語行動として捉えられる。次のデータが挙げられる。

(31) 030193D: 【同性やったら、】
【ちょっと、なかの一人、比べられてかわいいそう。】
030194E: 【たしかに、兄弟おらんっけぇ、】

【分からんけどさあ（うん）。(後略)】

(32) 060103I:　(前略)

【ああいい時代だったかという感じです。】

【あ、やあ、なんか、そう思えるようでありたいなあと{笑い}思いました。】

060104J:　【ほんとですね、今の人って、ある意味かわいそうと思いますね（ああ）。】

【で、何年生まれですか？】

(33) 060162J:　【ああ、なんかね、ほんと、若い人たち、真剣に考えられないと、】

060163I:　【ほんと、そうですよね、（んん）なんでしょうね、何ができるのかなって思いますね。】

(34) 060224I:　【そうですそうです、とても手間がかかる。】

060225J:　【手間がかかる、間違えたらまた新しく書き直したりとか。】

(35) 010057A:　【“何を求めていますかー”、“ちょっと、ちょっと誕生日プレゼント”、“これはいかがですか”、ぐいぐい来るね。】

010058B:　【ぐいぐい来るね。】

010059A:　【ぐいぐい来るね、“ちょっと手を出してみて、いい香りでしょう”みたいな。】

(36) 040625F:　【ワンワン、ひゅーってきて飛ばされて、】

【それで、終わり。】

040626G:　【分かる分かる、呼ぶところがおかしいよね。】

(37) 060277J:　【言われますよ、もってもってって言われます、】

【不自由だからって】

060278I:　【ですよね、そこを、流されずにもたれてないわけじゃないですか？】

(38) 060291J:　【ありますね、なんか問題が。】

060292I:　【でしょう？あらぬ心配をしてしまったりとか、】

【それは、けっこう、プランニングというのもしますし、（んんん）】

「たしかに」、「ほんと」など副詞は、物事に対する肯定、確信や理解が深まった時の表現である。(31)～(38)はそのデータである。なお、(32)の「ほんとうですね」というのは、コピュラ文の形であるが、前述した「そうですね」と同様に、本論文では「ほんと」の形と同様に見なす。(33)では、「ほんと、そうですね」と、あいづちが 2 回続いており、このように 2 回あるいは 2 回以上出現する場合が実際の会話にもよく見られる。あいづちが 1 回の場合も 2 回以上の場合も、同じ 1 つの言語行動として捉える。(34)では、060225J の初頭にくる「手間がかかる、」が、直前 I の発話の一部である。(35)では、「ぐいぐい来るね、」が、直前 B の発話の全体の繰り返しである。これらの繰り返しの言語形式は、聞き手が話し手の発話の内容に同意した態度と捉える。(36) の「わかる」は、知っている、理解しているという意味である。初頭では、それを前述の感動詞類「はい」「うん」と入れ替えても、言語行動としては変わらないと考える。(37)の助動詞「です」＋終助詞「よね」、(38)の「でしょう」＋上昇調は、基本的に文の末尾に置かれ、確定あるいは推量の意を表すが、初頭では、直前の発話に対する同意の態度と捉えられる。

また、あいづちは、上のデータのように直前の発言内容に対する同意、理解の態度を表すとともに、驚きや疑いなどの気持ちを込めて応答する場合にも用いられる。次のデータが挙げられる。

(39) 040013F: (前略)
【高校生もいたには、いたけど、】
【夜頃（うん）、学校終わっての頃ぐらいにしかいなかった。】
040014G: 【そうか、なんかね、広島で受けたいんよ。】

(40) 040242F: 【あのね、一番、一番、『キングダムハーツ』は一応、全部、ストーリー知っちょるんよ、一応ね（うん）。】
【だけど、いっちゃん一番好きなんよ、】
040243G: 【マジか、いっちゃんないわ。】

(41) 040014G: 【そうか、なんかね、広島で受けたいんよ。】
040015F: 【広島か、だったら、夏休みのほうが、】

(39)では、040014G の初頭にくる「そうか、」では、G は、F が提供した情報を知らなかったので、初めて聞いて少し疑いを持ったと考えられる。(40), (41)も同様である。これらは、感動詞「そう」、副詞「マジ」、直前の発話の一部「広島」に終助詞「か」がつい

た、というのが共通して、疑いなどの気持ちを表す。

以上考察したあいづちの言語形式は、4.1.1.1.「疑問に対する返答」とほぼ同様であるが、相違点は、話し手が回答の要求あるいは情報のやりとりがあるか否かにある。あいづちの言語形式に相当する言語行動は、前節の応答と同様、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と設定する。

4.1.1.3. 笑い

一般的には、笑いとは、楽しさや嬉しさを表現する感情表出行動の1つである。本論文では、初頭に現れる笑いを限定して、話し手が直前の発話あるいは話題に対して自分の理解あるいは同意の態度を伝える場合、と捉える。次のデータが挙げられる。

(42) 010093A: 【やあ、えっ、2時間ちかくずっとケイドロしてた？】
010094B: 【ケイドロしてますね。】
010095A: 【{笑い}、てっか、そのサークルかなり人数多い？】

(43) 050064I: 【やあ、もう、めちゃがちゃがちゃ洗ったから（そう）、】
【相当//】
050065H: 【{笑い}、洗い終わったんじゃないのみたい。】

(44) 030180E: 【勉強がね、怖くなってきたわ。】
030181D: 【{笑い}、そうやね、とりあえず勉強しよう（{笑い}）。】
【そして、早く結婚したい。】

(45) 050018I: 【あ、あげてない、と思う（ああ）、】
【あげてない、最初の数分見てないけど、】
【その数分の間に、現実的じゃないと思う。】
050019H: 【{笑い}、確かに、こんな出ている状態でね。】

(46) 040144F: 【うん、まあね、いい人もいるんだよ、】
【だが、皆いい人なんだけど。】
040145G: 【あのさあ、自分と違うでしょう？】
040146F: 【{笑い}、そのテンションについて、話しもあわないし、】

(47) 060155I: 【うんうん、そうですよね、ほんとに、やあ、捨てるところはどうするでしょう、】
【宇宙に捨てるんですかね。】
060156J: 【{笑い}、そしたら、お金がすごくいるじゃないですか？】

(42)～(47)に現れる笑いは、それぞれの文の初頭に出た、聞き手の発話の直後に話し手が発した反応である。(42)では、A が笑いを通して、B の「ケイドロしてますね。」という答えに対する理解を表す。理解した上で、少し意外な気持ちを伝えていると考えられる。同様に、(43)～(45)に出現した笑いは、理解という態度と捉えられる。4.1.1.2.で考察した「あいづち」と類似すると考える。とくに、(44), (45)では、笑いの直後に「そうやね、」「確かに、」のようなあいづちが出現し、直前の発言内容に対する同意、理解の態度をいっそう強調すると考えられる。一方、(46)では、F の{笑い}は、G の「自分と違うでしょう？」という質問に対する肯定の態度を表す。(47)では、J の{笑い}は、I の「宇宙に捨てるんですかね。」という確認要求に対する同意の態度を表す。これらは、4.1.1.1.で考察した「疑問に対する返答」と類似すると考え、聞き手による回答の要求あるいは情報などのやりとりに対して反応している。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の疑問に対する返答やあいづちと同様に、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と設定できる。

4.1.2. 直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動

本節では、下記の文の初頭に来る言語形式を観察し、それらを通して、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」を設定する。

・言いよどみ
・意外・驚き
・接続表現

4.1.2.1. 言いよどみ

話し手は、どう考えたらいいか、どのように言ったらいいか、などと考えている状態を、言いよどみの形で表す。言いよどみに関する研究は多くないが、現在では徐々に増えつつある。言いよどみは、会話の中でその機能が形作られるもの、「場つなぎ的な語」、「フィラー」と称する。また、談話分析の研究では、その場つなぎ的な役割としての「発話権保持」

的機能を提唱するものが少なくはない。田窪行則・金水敏（1997:274)は、「(言いよどみは)[2]聞き手に対して「有意味な発話にはもうしばらくかかるのでそれまで待機してくれ」との指示として利用することもできる。この場合はまだ発話の権利を保持させてほしいと相手に示しているともいえる」と指摘している。

本論文では、言いよどみには、話し手が何かを言い続ける意志があるとする。言い換えれば､聞き手による直前の発話あるいは話題を終了するという言語行動が見られる。なお、命題の中に出現する言いよどみも筆者のデータに見られるが、それは本論文では対象にしない。次のデータが挙げられる。

(48) 020060C:【えっ、井筒屋、何屋さん？】
020061A:【まあ、大きいな、なんと言うか、大型店舗。】

(49) 040047F:【1 週間だし､】
040048G:【なんか、でも、長期合宿もあるでしょう？】

(48)では、C の質問に対して、A が直ちに答えを出すのではなく、「まあ､」を通してその時点の思考の状態を表す。(49)では、F の発話内容に対して、G が自分の意見を述べる前に、考えている状態を音声的に「なんか､」で表した。これらの言いよどみの言語形式がそれぞれの文の初頭に単一に出現する。また、文の初頭に言いよどみの言語形式が 2 回あるいは 2 回以上出現することも実際の会話によく見られる。次のデータが挙げられる。

(50) 020065A:【だから、いろんな店舗を（ああ）突っ込んでる。】
020066C:【あのう、あのう、ショッピングモールじゃないけど､】
【デパートみたいな？】

(51) 050063H:【{笑い}、でも 30 分あるから、（そうね）また、きっと、大丈夫な。】
050064I:【やあ、もう、めちゃがちゃがちゃ洗ったから（そう)､】

(52) 060092J:【はい、（うん）まあ、ほんとですね､】
【なんか、いろんな問題しますね。】
060093I:【ああ､やあ､なんか､聞いてすごいことなると思ったんですけど､(はい、んん)】

[2] 括弧の内容は引用者が書き加えたものである。

【その、まあ、私たちの時代って言ってしまえば、(はい)】

(50)では、言いよどみの言語形式「あのう、」が 2 回出現する。(51)では、「やあ」も「もう、」も言いよどみの言語形式と考えられる。これらの言語形式が文の初頭にくる際に、1 回でも 2 回でも、言語行動は 1 つと見なす。同様に、(52)では、060093I の前文の初頭にくる「やあ、」「なんか、」も、1 つの言語行動と捉える。その言いよどみの言語形式の前にくる「ああ、」は、4.1.1.で分析した「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と捉える。(48)～(51)、また(40)の 060093I の前文では、言いよどみの言語形式を観察する時、話し手と聞き手が二人交替する場合のデータを挙げた。一方、交替しない場合、即ち話し手あるいは聞き手が一人で発話する時で、2 つの文あるいは 2 つ以上の文が話される場合、後文の初頭にくる言いよどみの言語形式については、(52)を再度見てみよう。(52)では、060092J の発話の中の、後文の初頭にくる「なんか、」や、060093I の発話の中で、後文の初頭にくる「その、」「まあ、」も言いよどみの言語形式と見られる。話し手が何かを言い続ける意志があると思われ、直前の発話あるいは話題を終了するという言語行動も見られる。

ここまで、話し手は直前の発話あるいは話題に対して、感動詞類の言いよどみを用いてどのように反応するかを記述した。感動詞類以外に、言いよどみの「なんだっけぇ、」「どうかなあ、」「あれですよね、」などの言語表現、「あれっ」のような指示表現などは、実際の会話にもよく見られる。本論文では、これらは、文と見なさずに、感動詞類と同様に、１つの言語行動と捉える。次のデータが挙げられる。

(53) 030033D: 【そう、いいんかな、】
【こんな恋愛の話しって。】
030034E: 【{笑い}いいんじゃない。】
030035D: 【なんか、さあ、なんだっけぇ、国研のやつ、行事。】

(54) 010255B: 【でも、そんなに弱いじゃないけどね。】
010256A: 【私が？】
010257B: 【うん。】
010258A: 【どうかなあ、飲んでるときは平気だけど。】

(55) 020124A: 【なんで奴だ、外道だ。】
020125C: 【あれっ、俺は誕生日、あの、チョコレートケーキを作ったことあるよ。】

(56) 060100J:(前略)

【それを言われるというのが、私にとってはすごいことだなあと今思ったんですよ。】

060101I: 【そうですか、あのう（ああ）、あれですよね、あのう、フォークソングなんかも間で流行りましたでしょう？】

(57) 060302I:(前略)

【写真がとれるようになったのは、】

【かなりなんか進化したんじゃないかなと思うんですけど(ああ、うん)、】

【そうですね、それからスマホが出てきて、】

060303J: 【うん、そうですね、思い出しました、私がね、社会人入学しましたから、】

【1997 年に、（ええ）大学に入ったんです。】

(53)の「なんだっけぇ、」(54)の「どうかなあ、」は質問の形で何らかの情報を要求していると思われるが、実際は情報を要求する対象は相手ではなく、話し手の自問自答という心的な操作の状態と考えられる。(55)の「あれっ」と(56)の「あれですよね」は、ア系列の指示詞を含む。一般的に、この種の指示詞は記憶の中にあるものを引き出すときに用いる。(57)では、「思い出しました、」は、話し手が何を言おうかという思考の状態が、言葉の形で表れている。

このような言いよどみは、適当な言葉が見つからない、あるいは、言い換えの言葉を捜すときに出てくる。話し手は続けて何を言おうかを考えていると思われ、直前の発話を終了させるという言語行動も取っていると捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」と設定する。

4.1.2.2. 意外・驚き

一般的に、聞き手の発話の内容を察知し、話し手は自分の予想と異なることを察したとき、その驚きの態度を音声にして発する。「あっ」「えっ」など驚愕の意味を含む言語形式が見られる。次のデータが挙げられる。

(58) 010085A: 【よう、ようやるね。】
010086B: 【ようやるやろ？】
010087A: 【ようやるね、大学生が。】
010088B: 【4 回に分けてやって、（{笑い}）】
【前 2 回あ、次、2 回鬼やって、】
【鬼じゃない、警察か】
010089A: 【夜中に？】
010090B: 【休憩ははさむよ。】
010091A: 【やあ{笑い}、えっ、2 時間ちかくずっとケイドロしてた？】
010092B: 【ケイドロしてますね。】

(59) 020026A: 【あ、なるほど、{笑い}そうだなあ、週末？】
020027C: 【週末、週末はずっと寝てたから、】
020028A: 【えっ、ずっと寝てたの？】
020029C: 【ずっとっていうか、】
【ほぼ寝てた。】

(60) 020071A: 【あるの、{笑い}一応あるの、一応ある、（{笑い}）そこでね、誕生日プレゼント買ってきたんです。】
020072C: 【だれの？】
020073A: 【まあ、高校の時からの友達なん。】
020074C: 【ああ、やっ、ちょっと、国研の一年生だれか//、】
020075A: 【ああ、でも、あれよね、ヨシノの誕生日プレゼントは･･･】

(61) 020212C: 【ああ、そんなたいしたもんつくってへん、魚焼いたりとか、（{笑い}）】
【なんか、この前は、何もしらないけど、】
【牛丼つくってて、】
020213A: 【えっ、牛丼は作ったの？】
020214C: 【うん】
020215A: 【牛丼作ったの？】
020216C: 【作ったよ。】

(62) 030050E: 【ねえ、だって、今回おわったとしたら、（うん）】

【論文と見学の説明と、卒論と、えと、追いコン（うん）と卒業式かあとないよ、準備としては、】

030051D:【そうだね、あっ、色紙。】

030052E:【そう、それが一番、】

030053D:【早く、早く買って、】

【早く国研で回し、】

(63) 030284E:【これで、時間、4 分だな（お）。】

【もういいかな。】

030285D:【やっ、いきたくない。】

030286E:【今日でも、模擬授業終わりよね？】

030287D:【そうやね、楽だね、】

【しかも聞いてるだけでいいから、】

(58)では、010091A の文の初頭に出現する「やあ」及び「{笑い}、」は、「休憩ははさむよ。」という内容に対する理解という言語行動として捉えられる。その直後の「えっ、」によって、話し手は聞き手の発話内容が自分の予想と異なることを示す一方、ここまでのケイドロの内容に関する話題を止めて、別の話題に転換すると考えられる。(59)では、C が「週末はずっと寝てた」といったことに対して、A は意外と考えた。その意外という態度を音声で「えっ」と発して、続けて再確認した。(60)では、020074C の発話まで、A の友達の誕生日プレゼントをめぐって話している。020073C の文の初頭に出現する「ああ、」は、その発話内容に対する理解を表す。その直後の「えっ、」「ちょっと、」によって、C が A の発話内容から連想し、なんらかの別のことを思い出したと考えられる。ここまでの A の友達の誕生日プレゼントの内容に関する話題を一旦止めて、「国研の 1 年生だれか」に関する内容に転換すると考える。(61)では、020213A の文の初頭に出現する「えっ」は、ここまで C が言及した「牛丼つくって」ということに対する驚きの態度を表す。(62)では、030051D の文の初頭にくる「そうだね、」は、直前の発話内容に対する理解という言語行動として捉えられる。その直後の「あっ、」によって、D が理解した内容から「色紙」ということを想起した時の態度を表す。(63)では、E が録音の時間が終わりに近づくという話題を提起した。030285D の文の初頭にくる「やっ」によって、D が「はやい、これから、授業に行かなければならない」と想起して、「授業」に関する話題に転換すると考えられる。

以上より、意外、驚きのような言語形式に相当する言語行動は、前節の言いよどみと同様、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」と設定できる。

4.1.2.3. 接続表現

文章論などでは、「だから」「でも」などの接続表現は、先行の文あるいは話題とのつながりを示す表現と考えられている。佐久間まゆみ(1990:35)は、「「接続表現」とは、従来、文章論の領域では、「接続語句」と称されたものであるが、主として文や節をつなぐ働きをする「接続詞」「接続助詞」「接続連語」等の総称である」と述べている。この「つなぐ働き」を示す言語形式として、接続詞以外に、「やはり、」「結局」などの副詞類も含まれている。

本論文では、接続表現は言語文脈だけでなく、状況文脈とも密接に関わっているため、話し手の言語行動と密接な関連性があるとする。談話においては、発話あるいは話題を開始する機能を有すると考える。次のデータが挙げられる。

(64) 060082J: 【えと、3年制の、だいがっ、高校に行けない人たちが、(はい) 皆働かないといけないわけでしょう？】
060083I: 【うん】
060084J: 【だから、すごくね、活気があって、】
【いい時代だったなと思います、ある意味でね。】

(65) 020063A: 【まあ、うん、そんな私もそんな知ってないよ。】
020064C: 【えっ何屋さん？】
020065A: 【だから、いろんな店舗を（ああ）突っ込んでる。】
020066C: 【あのう、あのう、ショッピングモールじゃないけど、】
【デパートみたいな？】
020067A: 【そうそうそうそう、そんな感じのところに行ってきましたね。】

(66) 020093A: 【あのう、たぶん、人にあげるプレゼント、めちゃくちゃ難しい、】
【人に誕生日プレ、誕生日プレゼント出たことある？】
【ないよね？】
020094C: 【その時//】
020095A: 【だって、なさそうな顔。】
020096C: 【あるよ、なんか//】

(67) 050178 I: 【めっちゃ汚いね。】
050179H: 【でも、机移動するにもできないですよね。】

(68) 020150A: 【世の中で、レシピを見て、】
【作れない人がいるんだよ。】
020151C: 【たぶん見てない。】
020152A: 【うるせいよ。（{笑い}）うるせいよ、見て作ってるよ。】
020153C: 【やっぱり、要所要所の温度がわからないと困るね。】
020154A: 【うるせい。】

(69) 040190F: 【わかる、『キングダム』面白いのね。】
040191G: 【ですが、それ、懸命ですの、途中ぐらいですよ。】
040192F: 【わーお】
040193G: 【ほんと、＊＊＊＊順番でいくよ。】

(64)～(69)はいずれも、「だから」「だって」「でも」などといった接続詞が文の初頭に出現する。(64)では、「3 年制の高校に行けない人は働かないといけない」という話題を聞き手と共有した後、J は「だから」を用いて、別の話題を開始する。言い換えれば、それまでの話題を終了させると考えられる。(65)では、「えっ何屋さん？」という質問に対して、A が直接の答えではなく、「だから、」を用いて説明を展開する。この場合は、「前に説明したのに、まだわかっていないか」という強調の意味も含むと考えられる。(66)では、C の発話「その時//」がまだ終了してないうちに、A が「だって、」を用いて、割り込んで自分の意見を先に述べている。(67)では、「でも、」という逆接の表現によって、前の I の提供した情報に対して自分の意見を述べ始める。(68)では、「やっぱり、」は副詞であるが、この単語には最後の結果、つまるところという意味がある。020153C までさまざまなやり方を話したが、つまり「要所の温度」が肝心であると言っている。(69)では、「ですが」という表現は、本来コピュラ+接続助詞という形であるが、基本的に文の末尾に置き、逆接の意を表す。040191G の文の初頭に用いるのは、直前の発話とつながり、G が自分の意見を述べ始めると考えられる。それは、「でも」「しかし」を入れ替えても、言語行動として変わらないと考えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、言いよどみや意外・驚きと同様、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」と設定できる。

4.1.3.　直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動

本節では、下記の文の初頭に来る言語形式を観察し、それらを通して、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」を設定する。

・指示表現

・同語重複

4.1.3.1.　指示表現

本節で示す指示表現は指示詞類を指す。日本語では、指示詞は、「これ」「それ」「あれ」のように話者との関係で人や、物事、場所などを指し示す語のことである。談話においては、指示詞は、話題になっているものや記憶の中にある要素を指す用法をもつ。一般的に、話し手が指示詞とともに、ポーズ、「～は」「～て」などを用いて、その部分を取り立てて、他と区別する。それは、言語行動の１つとして考えられる。次のデータが挙げられる。

(70) 010008B:【ケイドロやってた。】
010009A:【ケイドロ？】
010010B:【うん、山大でやってた。】
010011A:【それは何人ぐらいで？】

(71) 020066C:【あのう、あのう、ショッピングモールじゃないけど、】
【デパートみたいな？】
020067A:【そうそうそうそう、そんな感じのところに行ってきましたね。】
020068C:【そんなところもあるんですか？】
020069A:【そんなの、一応あるんですよ。】

(72) 030234E:【あと、1 年間だけ、なぜか新体操をやってた。】
030235D:【ああ、言ってたね、（うん）、そろばんはいいと思うわ。】
【実生活ぜったい役立つやん、こう、こう。】
030236E:【あれは、楽やった、】
【役立った、めちゃ。】

(73) 040028G:【ああ、そうか、でも、合宿 30 日でしょう？】
040029F:【合宿 30 日もあるの？】
040030G:【えっ、なんか、2 ヶ月とか聞いた。】
040031F:【それは、普通に通ったんと変わらへんやん。】

(70)では、注目したいところは、「それは」である。指示詞「それ」+副助詞「は」で構成され、010011A まで、話題になった「ケイドロ」を指す。「それは」は、010011A の文の主題になっているため、話し手によって焦点化される言語行動と考えられる。(71)では、020068C と 020069A にある「そんなところも」「そんなの、」は、020066C で言及された「デパートみたいな（ところ）」を指す。それらは、それぞれの文の初頭に出現し、それぞれの文の焦点になる。同様に、(72)の「あれは、」は、その直前の発話で言及された「そろばん」を指し、(73)の「それは、」は、その直前の発話で言及された「２ヶ月」を指す。それらもそれぞれの文の初頭に出現し、焦点になる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」と設定する。

4.1.3.2. 同語重複

同語重複は、既出の発話（あるいはその一部）を繰り返すことを指す。従来、繰り返し、反復などの名称で呼ばれる。同語重複に関する研究は、文章論、談話分析など分野で比較的に多数見られる。佐久間まゆみ(1993,1996)では、文連鎖論の観点で、反復表現が文脈展開形態の１つとして挙げられている。泉子･K･メイナード(2005)は、繰り返しの効果を談話のトピック管理、結束性など面から論述している。それらを踏まえて、本節で分析する同語重複は、4.1.1.に言及した繰り返しと異なる言語行動と考える。次のデータが挙げられる。

(74) 010005A: 【あ、土曜日は何をした？】
010006B: 【土曜日は、サークルでケイドロやってた。】

(75) 010039A: 【いや、でも、うん、いや、まあ、私の家から遠いけど、】
【あの、二人で、私ともう一人友達と（ああ）一緒に買い物してから、】
【まあ、ね、山口には店がないから（ないよね）。】
【井筒屋とかに行かないと//】
010040B: 【井筒屋さんなんか、敷居が高くない？】
010041A: 【うん？】
010042B: 【井筒屋って、なんか、マダムじゃないと、】
（後略）

(76) 040014G: 【そうか、なんかね、広島で受けたいんよ。】

040015F: 【あ、広島か、だったら、夏休みのほうが、】

040016G: 【夏休みってさあ、たしか、二年生の夏休みがわからん。】

040017F: 【んん、ひま】

(77) 040573F: 【うん、ヘイホー、ヘイホーあのやつ。】

040574G: 【{笑い} そうそう、ヘイホーさあ、めっちゃ似とる振動のやつっておらんかった？】

040575F: 【ていうがね、全員なんだかんだいって震えるから。】

040576G: 【震えるなんか、強い震えるやつだったら、】

【これヘイホーじゃないわっと思って、】

(78) 020220C: 【でも、この前さあ、（うん）計量カップがさあ、（あ）ちゃんと計ったから、】

【味薄くなって、】

【しようがないけぇ、({笑い})】

【あの、材料、あの、調味足して、（うん）】

【煮込んでちゃんとした味になったんけど。】

020221A: 【計量カップ、買ったんか？】

(74)～(78)に表記した同語重複は、「は」や「なんか」「って」ポーズなどを伴い、それぞれの文の初頭に出現する。(74)の 010006B では、B は 010005A に既出した「土曜日」を繰り返して、「土曜日は、」をその文の主題として取り立てている。(75)では、「井筒屋なんか、」「井筒屋って、」は 010039A が話した「井筒屋」と重複しており、それぞれの文の焦点になると考えられる。(76)では、「夏休みってさあ、」は 040015F が話した「夏休み」と重複しており、040016G の文の主題になると考えられる。その文の命題にも「夏休み」が出現したが、初頭の同語重複と異なって、焦点にならない。(77)では、「ヘイホーさあ、」「震えるなんか、」は、それぞれの直前の発話内容の一部の重複である。その文の主題として取り立てられていると考える。040576G の文の命題にも「震える」が出現したが、初頭の同語重複と異なって、焦点にならない。また、(74)～(77)に出現した同語重複は全て名詞の繰り返しであるが、(77)に出現した「震える」は動詞である。それは、特定の言語形式がその言語行動と対応し、品詞とは関係ないからである。(78)の 020221A の初頭に来る「計量カップ、」は、020220C で話された「計量カップ」と重複しており、020221A の文の主題になると考えられる。ここまで挙げた同語重複という言語形式は、「は」「なんか」

「って」みたいな副助詞とは関連すると考えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の指示詞と同様に、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」と設定できる。

4.1.4. 後続命題に態度を表明する言語行動

本節では、「副詞修飾」という文の初頭に来る言語形式を観察し、それを通して、「後続命題に態度を表明する言語行動」を設定する。また、前節まで述べた直前の発話あるいは話題と区別するため、本節でいう後続命題とは、分析対象となる文の命題のことを指す。

4.1.4.1. 副詞修飾

本節で示す副詞修飾における副詞は、従来の研究では「陳述副詞」「文副詞」「モダリティ副詞」と呼ばれている。基本的に、話し手の態度・気持ち・取り上げ方などを表す副詞である。モダリティ論の観点から見ると、この種の副詞は、文の客観的な内容部分にかかるのではなく、その部分に対する認め方やムードなど述語の陳述的な意味を補足・強調するのである。一般的に、これは、文末モダリティと呼応すると考えられる。本論文では、その話し手の態度、取り上げ方は、言語行動の１つとして考えられる。次のデータが挙げられる。

(79) 050194 I: 【たぶん、1 年前もきれいじゃなかったよ、予感する。】
050195H: 【うん】

(80) 020012A: 【今、あの、喋ってる最中に（うん）気づいたよ、】
【あっ、言っちゃだめ？】
020013C: 【たぶん、それは大丈夫。】

(81) 040504G: 【いい、あれいい。】
040505F: 【あれええよね、だいたい持ってない人ばかりだからさあ。】
040506G: 【うん、分かる分かる、私もってるか〈私の家中古見てないさあ、それあったじゃないか、〉】

(82) 060119J: 【51 年なら、】
【ほんとに、ある意味で満ち足りた時がずっとですからね。】
060120I: 【そうですね。】

(83) 010186A: 【{笑い}すごくびっくりしたけどね、】
【ミサツ死んどる。】
【ほんとに、あの時は本当に私もびっくりした。】
010187B: 【正直で（うん）あの時、私もね、記憶はない、あんまり。】

(84) 030046D: 【難しいね。】
030047E: 【そうだね、ほんとに、土日も、面倒くさいなあみたいな。】
【しょうがないことなんやけど。】

(85) 040057F: 【でも、正直思うけど、】
【ほんとに、合宿つらいんだったら、】
【極端、短いほうが、その合宿としての利点じゃないけど、】
【いいでしょう。】
040058G: 【うんうん、ああ、そうだね。】

(86) 010226B: 【ああ、赤いという//】
010227A: 【決して赤くはなかったろう（ああ）、】

(87) 030007D: 【なんか、余裕の点数だったらしい。】
030008E: 【そうなんじゃ。】
030009D: 【全然心配することもなかったって（へぇ）】
【よかった。】

(79), (80)では、「たぶん」は推量の態度で、命題に対する確からしさが示される。(81)でも、「だいたい」は、物事の程度・見当であると、おおまかに推し量るさまを表し、命題に対する確からしさを示す。(82)の、「ほんとに、」「ある意味で」のような、副詞修飾が 2 回出現するデータも実際の会話で少なくはない。基本的に、「ほんとに」は、程度を強調するときに用いられるが、話し手は、「満ち足りた時がずっとです」という「事実」を引き合いに出しているので、程度がはなはだしいことを表すと考えられる。また、「ある意味で」を用いるのは、話し手が後続命題の確からしさを表している。完全に客観的な情報を保証するのではなく、個人的に考えている曖昧な態度を表明すると思われる。(83)でも、「ほんとに」を用いるのは、(82)と同様に説明できると考える。「正直で」とは、心がまっすぐで

言動に偽りのないさまという意味である。話し手Bは「私もね、記憶はない」によって「うそではないよ」という態度を表明すると考えられる。(84), (85)では、それぞれ出現した「ほんとに」「正直」は前述したように、話し手が後続命題の態度を捉える。「極端」を用いるのは、程度がはなはだしく個人的に考えている曖昧な態度を表明すると思われる。(86), (87)では、「決して」「全然」を用いるのは、話し手が命題に対する否定の態度を表明しているものと考えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「後続命題に態度を表明する言語行動」と設定する。

4.1.5. 後続命題の一部を焦点化する言語行動

本節では、下記の文の初頭に来る言語形式を観察し、それらを通して、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」を設定する。

・「は」「って」などによる焦点化

・疑問詞の焦点化

4.1.5.1. 「は」「って」などによる焦点化

日本語研究では、「は」「も」「こそ」など、名詞などの語について、そこに焦点を当てる助詞を「取り立て助詞」と呼ぶ。これらは、一般的に、ある事柄を話題として取り上げて示す意を表す。談話においては、話し手が「～は」、「～て」、「～、(ポーズ)」などを用いて、その直前の部分を取り立て、他と区別する。「～は」、「～て」、「～、(ポーズ)」などは言語形式としては命題に含まれるが、それは、言語行動の1つとして考えられる。次のデータが挙げられる。

(88) 010021A: 【で、ケイドロ？】
010022B: 【うん、バレーもバスケットも普通にするよ。】
010023A: 【ちょっと、ちょっと理解しかねるなー。】
010024B: 【言われちゃった。】
010025A: 【私は、 昨日は、あの、今月が誕生日の子がいたから、(おう)】
【あのう、その子の誕生日プレゼントを買いに//】
010026B: 【今月？ああ。】

(89) 020215A: 【牛丼作ったの？】
020216C: 【作ったよ。】

020217A: 【なんなん（{笑い}）、なんなん、お前、牛丼作るの？】

020218C: 【でも、この前さあ、（うん）計量カップがさあ、（あ）ちゃんと計ったから、味薄くなって、】

【しようがないけぇ、（{笑い}）】

【あの、材料、あの、調味足して、（うん）】

（後略）

(90) 040044G: 【{笑い}、マジで、そんに速い？】

040045F: 【うん、】

040046G: 【そうなん、やっ、なんか、勘違いしよったかなあ。】

040047F: 【1 週間だし、】

040048G: 【なんか、でも、長期合宿もあるでしょう？】

040049F: 【長期合宿もあるけど、】

【長期で一ヶ月ぐらい通うんだったら、】

(91) 050211H: 【でも、ほかの〈にっこう〉がけっこう勉強な感じだったから。】

050212I: 【良かったよね、】

【うちの内容が良かったね。】

050213H: 【うん】

050214I: 【そうだね、なんか、今年も引き続きしよるんけど、】

【なんか、まあ、他の大学、なんか、愛媛はこんな感じとして（うん）、】

【大分は、こんな感じでした。】

(92) 030251E: 【そう、やっけ、顔に水つけるのが、まず、無理やけん（うんうん）。】

【潜れんのよ。】

030252D: 【ああ、自分が、どうやって泳げるようになったか覚えてない。】

030253E: 【や、でも、最初から泳げるのはすごいな、】

(93) 040068G: 【あ、そうなん、あ、それいいじゃん。】

040069F: 【あのう、総合って、短期っていうのあって。】

040070G: 【それいいじゃん、】

【そうそう、夏休みさあ、帰ってそれにしようかなあ。】

(94) 060094J: 【はい、学校も、まあ、いろんな事情、事情があると思うんですけど、】
【行きたいと望んで、(はい)】
【そんなに、こう、めちゃめちゃ行けなかったりとか、】
【ないわけですよね。】
060095I: 【はい、ああ】
060096J: 【望めば、】
060097I: 【望めばね。】
060098J: 【はい、携帯電話とかも持つようになったら、】
【かなり、こう便利になってきた、(はい)】
【で、なんか、そういう意味では、不自由はないなと思うんですけど、(はい)】
(後略)

(88)では、010024B までは「ケイドロ」を話題として会話が行われてきた。「私は、」「昨日は、」は 010025A の前文の初頭に出現し、命題の一部として焦点化されると同時に、話題の大まかな方向性も示していると考えられる。その会話では、010025A から、A の「買い物」という話題に転換していく。(89)では、020218C までは、C が「牛丼を作った」ことが話題となっていた。020218C の最初の文の初頭に出現する「でも、」は、「接続表現」という言語形式で、それに相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。「でも、」の直後に来る「この前さあ、」「計量カップがさあ、」を際立たせて、「C がこの前作った牛丼」という話題を続けることを聞き手に示す。(90)では、040048G の文の初頭に出現する「なんか、」「でも、」に相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後に来る「長期合宿も」を際立たせて、「長期合宿」という話題を続けることを聞き手に示す。(91)では、050214I の文の初頭に出現する「そうだね、」に相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後に来る「なんか、」に相当する言語行動は「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「今年も」は、命題の一部として焦点化されると同時に、「今年の学会」について話題を展開していく。(92)～(94)の、それぞれの文の初頭にくる「自分が、」「総合って、」「学校も、」「携帯電話とかも」も同様に説明できると考える。

また、本節で示す「「は」「って」などによる焦点化」は、4.1.3.に設定した「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」と類似しているため紛らわしいが、その相違点は、焦点化になる言語形式が、直前の発話あるいは話題に出現したか、それと

も直後の発話あるいは話題に出現したのかにある。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」と設定する。

4.1.5.2. 疑問詞の焦点化

一般的に、疑問文とは話し手にとって未知の情報を聞き手に問うということを表す。言語形式では、「何」「誰」「いくつ」「どんな」など疑問詞を含んだりする。いずれも情報内容が不確定であるという意味で、話し手が聞き手に対して回答などを要求する。初頭にくる疑問詞は、取り立てられてその文の焦点になると考えられる。従って、言語行動の１つとして見なす。次のデータが挙げられる。

(95) 060006J: 【木前の、あ、そうですか。】
060007I: 【はい】
060008J: 【さとみさんは、どんな字ですか？】
060009I: 【はですね、えと、知識の知、】

(96) 030182E: 【ああ、いくつで結婚したい？】
【いくつまでに結婚したい？】
030183D: 【うん、22 で卒業するやんか、】
【んん、25 才に結婚が理想かな。】

(97) 020041C: 【ショッピング？】
020042A: 【ショッピング、何でその言い方？】
020043C: 【ショッピングするとこなんて、この辺あったっけ？】

(98) 020258C: 【弟も今できるんが、】
【妹あんまりやらないから（{笑い}）、】
【作られるしかないじゃ。】
020259A: 【ああ、えっ、お母さんは何の仕事？】
020260C: 【うちのお母さん、なんか、教師もどきみたいな（ほうほうほう）。】

(99) 040390F: 【うん、5 大好きって。】
040391G: 【5 はどんなやつだっけぇ？】

040392F: 【え、どんなやつ、私も困る、】

(100) 050240H: 【小倉から速いかも。】
050241I: 【あそうか、新幹線は、小倉までやると、】
【何ぼでいける？】
【6、7千円？】
050242H: 【うん。】

(95)では、「さとみさんはどんな字」は命題として捉えられるが、前節で述べたように、「さとみさんは、」は「後続命題の一部を焦点化する言語行動」の言語形式として捉えられる。その直後の疑問詞「どんな」も初頭の位置に出現し、未知情報が取り立てられて、疑問詞も含んだ後続命題が焦点化されると考えられる。(96)では、2 つの文は、話し手による繰り返しの発話と見られる。年齢を問う疑問詞「いくつ」が、文の初頭の位置に出現し、(95)と同じ、命題の焦点になる。(97)では、020042A の文の初頭に来る「ショッピング、」は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」として捉えられる。その直後、理由を問う疑問詞「何で」も、初頭の位置に出現し、命題の焦点になる。(98)の 020259A の文では、前の記述に踏まえて、「ああ、」に相当する言語行動は「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。「えっ、」に相当する言語行動は「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。「お母さんは」に相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。それに続く疑問詞「何」も、未知情報が取り立てられ、命題の一部として焦点化されると考えられる。(99)の 040391G の文では、「5 はどんなやつ」は命題として捉えられるが、「5 は」は「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」の言語形式として捉えられる。その直後に来る「どんな」も(95)のように、未知情報が取り立てられ、命題の一部として焦点化されると考えられる。(100)では、金額を問う疑問詞「なんぼ」が、その文の初頭に出現し、命題の焦点になる。これらの疑問詞は、言語形式としては命題に含まれるが、言語行動の 1 つと見なす。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の「は」「って」などによる焦点化と同様、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」と設定できる。

4.2.　末尾行動

本節では、末尾行動を観察していく。末尾行動は、3.の仮説のように、話し手が、命題を産出した後、行った何らかの言語行動の総称である。本章では、文の末尾に来る様々な言語形式と結び付けて観察しながら、下記の 5 つの言語行動を設定し、記述する。

・既出命題に態度を表明する言語行動
・発話あるいは話題を完了する言語行動
・発話あるいは話題を継続する言語行動
・既出命題を焦点化する言語行動
・発話あるいは話題を共有する言語行動

4.2.1.　既出命題に態度を表明する言語行動

本節では、下記の文の末尾に来る言語形式を観察し、それらを通して、「既出命題に態度を表明する言語行動」を設定する。

・形式名詞述語
・話し手自身の感情・思考
・命題に対する推量・伝聞など
・肯定・否定の態度
・命題の遂行

4.2.1.1.　形式名詞述語

日本語研究では、「のだ」「ことだ」「ものだ」「わけだ」などは断定、疑問、命令などの用法を持つとされている。これらに関しては、寺村秀夫（1984）、野田春美（1997）などの研究が代表的である。野田春美（1997）は、「のだ」を統括的に考察した上で、対事的「のだ」と命令を表す対人的「のだ」を分けて、「のだ」「ことだ」「ものだ」の違いについても論述している。「のだ」「ことだ」「ものだ」「わけだ」などは、形式名詞の「の」「こと」「もの」「わけ」などに「だ」が後接し、一語化して助動詞だと見なす。本論文では、これらを「形式名詞述語」と呼び、言語行動の１つと見なす。次のデータが挙げられる。

(101) 060070J:　【んんん、私たちはね、ほんとに狭いところ、こう、ずっと生きてきたって言いますかね。（ええ、）】
【あのう、えと、中学卒業してね、（はい、）】
【すぐ、准看の学校に行った$\boxed{\text{んです}}$よ。（ああ）】
【准看護婦の学校に、（ええ）それが、ずっと長い$\boxed{\text{もんです}}$からね。（は

い)】

【外のこと知らないですよね。】

060071I: 【ああ、】

060072J: 【准看って、あのう、まあ、狭い世界ですよね、】

(102) 060082J: 【えと、3 年制の、だいがっ、高校にいけない人たちが、(はい) 皆に働かないといけないわけでしょう？】

060083I: 【うん。】

060084J: 【だから、すごくね、活気があって、いい時代だったなと思います、ある意味でね。】

060085I: 【ああ、そうなんですね、すごくでも、熱心に勉強ずっとされたわけですよね。】

(103) 010044B: 【やろ？この前、井筒屋さん、お母さんはさあ（うん)、バレンタインのチョコをちょっと買うからって言って（ああ)】

【あのう、一緒に行ったんやけど(ああ)、】

【ちょっと高いです、】

【売ってないじゃないか、】

【怖い怖いと思って。】

010045A: 【あそこ、あそこは怖い。】

(104) 010095A: 【えっ、昨日でも 48？】

010096B: 【うん、少なく、少ないほうでね、それは。】

010097A: 【だよね、たぶん、来てない人かなり、それでも//】

010098B: 【いるいるいる、一年女子、私しか来らんもん。】

(105) 020176A: 【ちょっと、テンパリングが気に入って、】

【なんか、いまいち分かってないけぇ、({笑い})】

【料理、料理何かできる？】

【料理、何かできる？】

020177C: 【カレーぐらいは作れた。】

020178A: 【うるさい、うるさい、我が家はだめなの、】

【料理が下手なの。】

020182C:　【いや、でも、カレー、えっ、】

(106) 030145E:　【なんやった、ユカが言ったんだっけぇ、】
【なんか、相手がすごい稼ぎ（うん）、】
【っていうやったら（うん）、】
【仕事やめて（うん）、】
【専業主婦なる、いいかなあって言った[の]。】
030146D:　【ああ、えっ、言ったけぇ。】

(101)で、「んだ」によって、話し手 J が、「准看の学校に行った」ことを強く表明するのは、続けて「准看護婦の学校」の何らかの状況を言うつもりだからである。(102)の 060085I の文では、I は、J による発話の内容を推論し、結果的に帰結すると考えられる。(103)では、「んや」は方言形式で、「のだ」に相当する。B は「（お母さんと井筒屋に）一緒に行った」ことを強く表明するのは、続けて「井筒屋で見聞したこと」に関して言うつもりだからである。(104)では、「もん」は「もの」に相当する。010098B までは、「来てない人」が少ないことが話された。B は、「もん」を用いて、人数が少ない理由を強調する。(105)では、020178A の 2 つの文の末尾に「の」が出現している。ここまでは、A が「あまり料理できないこと」を C との会話で展開してきた。A が、文の末尾に「の」を用いるのは、「我が家はだめ」ということ、また「料理が下手」ということを強調するためである。(106)の 030145E では、「ユカが言った」ことを E が引用している。最後に「の」を用いるのは、「専業主婦なる、いいかなあ」が「ユカが言った」ことの肝要な点であることを強調する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定する。

4.2.1.2.　話し手自身の感情・思考

本節で議論するのは、「（と）思う」「（と）考える」「（と）感じる」「（の）気がする」などの思考動詞類である。これらの言語形式を用いる際に、話し手が命題内容をめぐって、個人のある判断あるいは個人的な意見を表すと考えられる。それは、言語行動の 1 つとして考えられる。次のデータが挙げられる。

(107) 060084J:　【だから、すごくね、活気があって、いい時代だったな[と思います、]ある意味でね。】
060085I:　【ああ、そうなんですね、すごくでも、熱心に勉強ずっとされたわけで

すよね。】

(108) 050121I: 【そうそう、いいかなと思うんけど（うん）、】
【たぶん、1年前もきれいじゃなかったよ、予感する、】
【うん、なんか、何あったか、】
【見なかったことに。{笑い}】
050122H: 【{笑い}見なかったらね。】

(109) 010042B: 【井筒屋って、なんか、マダムじゃないと、】
【なんか、そういう人が行く感じで、】
【ちょっと入りにくい。】
010043A: 【あ、でも私は、ものすごく、一人だったら、】
【入りづらいけど（ああ）、】

(110) 030106D: 【うん、そうなんよ、やあ、どうしよう、迷ってる。】
【なんか、前も言ったと思うけどさあ、（うん）】
【あのう、高校時の先生がさあ、誘ってくれるんよ。】
030107E: 【うん、〈誘ってくれるんよ、〉】

(111) 030252D: 【ああ、自分が、どうやって泳げるようになったか覚えてない。】
030253E: 【や、でも、最初から泳げるのはすごいな、】

(112) 040124F: 【うん、やっぱね、バイトとね（うん）、車校の両立はきびいと。】
040125G: 【きびい？】

(113) 050180I: 【そうねそうね、そうしよう、】
【ちょっと、もう、昨日、このなかで、日傘さしてる人がいて（ああ）、】
【図書館の近くで見たのかな、気がしますけど。】
050181H: 【いますよね、ぜんぜん曇りなのに】

(107)では、「活気があっていい時代だった」という内容は、「活気」があるかどうか、「時代」は良いか良くないかについて、話し手が「と思います」という言語形式を用いて、個人的な意見を主張する。このように、既出命題に対する個人の主張が見られる。また、(108)

は、「1 年前もきれいじゃなかった」という客観的な事実を不確定な態度、「予感する」で表明する。(109)では、「井筒屋はマダムが行くところ」というのは、客観的なことではなく、B の個人的な考えである。その考えが、「感じ」で表明される。(110)では、「どうしよう」は聞き手 E に対する質問ではなく、話し手 D の内心の状態である。その状態を「迷ってる。」という言語形式で表す。同様に、(111)では、「どうやって泳げるようになったか」も、聞き手 E に対する質問ではなく、話し手 D の内心の状態である。その状態を「覚えてない」という言語形式で表明する。(112)では、「バイトと車校の両立はきびい」という意見は、話し手 F の個人的な考えである。「と」は、「と思う」の省略と考えられる。それによって、話し手は自分の意見を表明する。(113)では、話し手 I は、「気がします」という言語形式を用いて、「図書館の近くで見た」という内容を確定できないという態度を表明する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、形式名詞述語と同様に、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.1.3. 命題に対する推量・伝聞など

日本語研究では、「う/よう」「そうだ」「ようだ」「らしい」「たい」などは助動詞類に分類され、推定、推量、伝聞、断定、希望などさまざまな出来事の捉え方を表している。また、終助詞のうち「ぞ」「さ」「わ」「よ」「ね」などは、発話内容あるいは命題を強調する用法がある。「か」「かな」などは、発話内容あるいは命題に対する可能、不定の用法もある。話し手はこれらの言語形式を用いて、命題内容をどのように把握するか、判断するか、という自分の態度を表すのである。それらは、言語行動の 1 つとして考えられる。次のデータが挙げられる。

(114) 060135I: 【ええ、たしかに、その安全神話今まではあったので、(あ)】
【事故が起こらないという前提だから、(はい)】
【低コストで空気も汚さないと言うんでしょうけど（空気)、】
（後略)

(115) 010063A: 【一連ね、結局そこでは、買ったんけど(うん)】
【すごいオプションどんどん、「良かったら、サンプルなんですけど」みたいな。】
010064B: 【サンプルとかさあ、「これとこれ合わせるといいですよ」みたいなさあ。】

(116) 010030B: 【道門って、湯田温泉ぐらい？】
010031A: 【いや、そっちじゃない。】
【山口駅のほうの（ああ）まあ、商店街というか。】

(117) 010106A: 【えっ、一番と二番は何？】
010107B: 【知らない、知らない。】
010108A: 【そっちのほうが気になるけど。】
010109B: 【でも、(あー)トップクラスにでかいらしい。】

(118) 020088C: 【まあ、七月の上旬か、中旬、下旬か。】
020089A: 【うん、じゃあ、そうだなあ、じゃあ、下旬にしとこうか。】
020090C: 【しとこうか。{笑い}】
020091A: 【後で、確認しよう。】

(119) 020199A: 【{笑い}そんなマンガみたいな作りしたかなー、】
【それだったら、かなり//】
020200C: 【いや、普通そんなもん作れんやろ。】
020201A: 【やっ、でも、おいしくなかったよ、】

(120) 030005D: 【おめでたい。】
030006E: 【よかったね。】
030007D: 【なんか、余裕の点数だったらしい。】
030008E: 【そうなんじゃ。】

(121) 030242D: (前略)
【ただね、書き方のに、筆の使い方（うん)、とかも大事やっけぇ（そうそう)。】
【それは、知らないとできんだろなと思うんね。】
030243E: 【それは、習ってないと、】
【できないと思う。】

(122) 010072B: 【わいわいわい、えっ、何サー？】

010073A:　【内緒。】

010074B:　【{笑い}えー?】

010075A:　【私は今入ってるサークル、たぶん、国研の誰も知らないぞ。】

(114)では、「低コストで空気も汚さないと言う」は確かにこのように言ったかどうか、出来事が真実であるとは言い切れない、という命題に対する態度が、「でしょう」によって捉えられる。「でしょう」の直前にある「ん」は、前節で分析した言語形式の 1 つであり、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」として捉えられる。(115)の「みたいな」は、伝え聞いたことを根拠にして、その命題に対する不確定の態度を示している。(116)では、「ぐらい」によって、話し手 B は、「道門って、湯田温泉」にあるかどうか自信がないため、それを推定する。(117), (120)では、「らしい」を用いるのは、何らかの伝聞を基に判断を行うという表現である。(119)の「やろ」は、(121)の「だろ」に相当する。いずれも、(114)の「でしょう」と同様に、命題が真実であると考えつつ言い切れない、という態度が捉えられる。また、(121)では、「だろな」の直後にある「と思う」は、前節で分析した「話し手自身の感情・思考」の言語形式であり、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」として捉えられる。(118)では、「しとこう」「確認しよう」という言語形式は、用言の未然形である。「う/よう」は、話し手の命題に対する意志、希望を表す。

「でしょう」「らしい」「だろ」などの助動詞類以外に、挙げたデータの中に終助詞も出現している。(119)の 020199A では、「かなー」は命題に対する不確定の態度を示している。「そんなマンガみたいな作りした」ということが真実かどうか、話し手自身も確定できない。020201A の文では、「よ」によって、話し手は発話内容を強調し、聞き手に伝えることもできる。また、(121)をもう一回挙げるが、「な」が「だろ」の直後に来て、同様に、命題が真実であると考えつつ言い切れない、という態度が捉えられる。一方、(122)では、「ぞ」によって、話し手は断定し、聞き手に伝えることも強調できる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節と同様、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.1.4.　肯定・否定の態度

聞き手から情報あるいは意見を要求される場合、話し手はそれに応じて単なる情報あるいは意見となる命題を返事するわけではないだろう。その際には、命題に伴う言語行動が産出されると考えられる。本論文では、命題に対する肯定か否定かという態度を表明することを、言語行動の 1 つと見なす。次のデータが挙げられる。

(123) 060077I: 【はあ、じゃ、ずっと看護婦されてこられたんですか？】
060078J: 【えとね、あ、だいたいそういう仕事です。】

(124) 010001A: 【えと、(⁽笑い⁾)しゅっ、週末、(うん)実家に帰ってたんよね。】
010002B: 【実家帰ってた、】
【日曜日ね。】

(125) 020102A: 【やっぱ、うん、えっ、ライトレベル誕生日プレゼントするの？】
020103C: 【うん、ライトレベルと漫画セットにしてあげた、】
【あれが 1 巻。】

(126) 040530G: 【えっ、あのう、なんかさあ、パズルとかはなかった？】
040531F: 【パズルあった気がする。】

(127) 020109C: 【いや、ちょっと、んん、弟、本を読めない。】
020110A: 【それで、本を読めるようになったの？】
020111C: 【なってない。】

(128) 020236C: 【えっ、風さん、普段料理せんの？】
020237A: 【やっぱ、うん、しないね。】
020238C: 【しろって言われへん？】
020239A: 【言われない。】

(123)では、聞き手が「ずっと看護婦されてこられた」ということについて確認を要求する。それに応じて、話し手は「です」という言語形式で、「そういう仕事」という命題に肯定の態度を表した。ここの「そういう仕事」は、「看護婦」を指す。(124)では、聞き手が「実家に帰ってた」ということの確認要求に応じて、話し手は「た」によって、同じ命題に対する肯定の態度を表明する。同様に、(125), (126)では、「た」によって、同じ命題に対する肯定の態度が見られる。また、(126)では、「た」の直後に来る「気がする」は、4.2.1.2.で分析した「話し手自身の感情・思考」の言語形式であり、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」が捉えられる。

否定の場合は、一般的に用言の活用による否定の形式になる。(127)のように、「(い)ない」は、「いる」の否定の形式で、(128)の「しない」は「する」の否定の形式である。いずれ

も命題に対する否定の態度が捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、形式名詞述語、話し手自身の感情・思考、命題に対する推量・伝聞など、と同様に、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.1.5. 命題の遂行

日本語研究では、「遂行文」というタイプが検討されている。それについて、三木悦三(2000)は、「或る文を発することそのことが、すなわち、その文の表わしている内容を現実に「行なう」ことになる」と述べている。ここでは、「言う」「約束する」「頼む」「命令する」「発見する」などの動詞が表われる。本節では、言語行動の１つとして設定する。次のデータを挙げる。

(129) 060002J: 【こちらこそよろしくお願いします、(｛笑い｝) ちょっと、お名前を、なにか教えてもらえますか？】
060003I: 【はい、私は、(氏名)と申します。】

(130) 020012A: 【今、あの、喋ってる最中に（うん）気づいたよ、】
【あっ、言っちゃだめ？】
020013C: 【たぶん、それは大丈夫。】

(131) 060131I: (前略)
【あえて、しなくてはいけないかなと思いますね、(ん)】
【どっちらといえば、私は、あれをあんまり賛成しない。】
060132J: 【｛笑い｝そうですか、私もね、(はい) 大反対です (ああ)。】
【あれはね、なんか、おかしいですよ（うん)。】
(後略)

(129)では、「申します」が文の末尾に出現する。話し手Ｉの「私は(氏名)」という内容は、「申します」という遂行動詞によって表明されている。(130)では、「気づいた」によって、話し手はその時点で、発見、察知することを表明する。(131)では、「賛成しない」は「賛成する」の否定の形式である。「反対です」は、「賛成しない、反対する」という態度が表現されている。

以上より、このような言語形式に相当する言語行動は、形式名詞述語、話し手自身の感

情・思考、命題に対する推量・伝聞など、肯定・否定の態度と同様に、「既出命題に対する態度を表明する言語行動」と設定できる。

4.2.2. 発話あるいは話題を完了する言語行動

本節では、「述語の終止形」という文の末尾に来る言語形式を観察し、それを通して、「発話あるいは話題を完了する言語行動」を設定する。

4.2.2.1. 述語の終止形

日本語研究では、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞などが活用で、他への接続がないとき、または終助詞に接続して文末で言い切る形は終止形と呼ばれている。本稿では、すべての用言の終止形を観察対象にするのではなく、話し手による1つのまとまった話題あるいは内容を打ち切るケースを対象とする。次のデータが挙げられる。

(132) 060024J: 【ちょっと大きすぎますね。】
【{笑い}で、泰子はね、天下泰平の泰です。(ああ、はい)】
【ん、なんか、あのう、私が生まれたときには、昭和21年に生まれたんですけど、(ええ)】
【戦争は20年に終わったでしょう？】
060029I: 【はい】
060030J: 【あの年に天下泰平になったから、】
【その泰を取って父がつけたって言って$\boxed{\text{ました。}}$】
060031I: 【ああ、とてもいいお名前ですね。】

(133) 010025A: 【私は、昨日は、あの、今月が誕生日の子がいたから、(おう)】
【あのう、その子の誕生日プレゼントを買いに//】
010026B: 【今月？】
010027A: 【まあ(ああ、そうか)20だね、うん、そう、という感じ、】
【プレゼントを買いに行って来$\boxed{\text{ました。}}$】
010028B: 【うん、どこまで、どこ行った？】

(134) 020204C: 【あれで何回もカレー作った。】
【したが、水の量ちょっとマズかった（ああ)。】
【そうそう、で、ちょっと煮込んだら、】

【でも美味しかった。】

020205A: 【カレー、カレー、そんなに手つくりする？】

(135) 020242C: 【弁当手伝うんか、朝は？】

020243A: 【朝はだいたい、そんな、】

【だから、わたし、晩御飯あんまりそんな、だって、夜遅く帰って来て（うん）】

【でも、遅いから（うん）】

【食べない時多いから（ああ）】

【晩御飯が、少々を朝ごはんに回されるという時もある。】

020244C: 【うん、弁当手伝って、どういうこと？】

(136) 030231D: 【うん、部活、ハルちゃんは、何やったけぇ？】

【水泳とピアノ？】

030232E: 【水泳とピアノ、と、そろばんと、】

030233D: 【ああ、そろばんはね。】

030234E: 【あと、一年間だけ、なぜか新体操をやった。】

030235D: 【ああ、言ってたね、（うん）、そろばんはいいと思うわ。】

【実生活ぜったい役立つやん、こう、こう。】

(132)では、「ました。」という終止形が文の末尾に出現する。060031I の直前までに話し手 J が自分の名前の由来を説明した後、その説明的な話を、「ました」という用言の終止形で完了させる。(133)でも同様である。このデータの文脈をみると、話し手 A は日曜日に買い物に行ったという話題を聞き手 B に伝え、内容的には「（行って来）ました。」で終了させる。この終了させる言語行動によって、ここで話題が終わりになるのである。(134)では、020205A の直前までに、話し手 C がカレーの作り方について話した。内容的には「（美味し）かった。」で終了させる。(135)では、020244C の直前までに、話し手 A が朝ごはんに関して聞き手 C に伝え、内容的には、「（あ）る。」で終了させる。(136)では、030235D の直前までに、E が参加した部活をめぐって２人で話していた。内容的には、「（やって）た。」で終了させる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題を完了する言語行動」と設定する。

4.2.3. 発話あるいは話題を継続する言語行動

本節では、「接続表現」という文の末尾に来る言語形式を観察し、それを通して、「発話あるいは話題を継続する言語行動」を設定する。

4.2.3.1. 接続表現

本論文の 4.1.2.3.でも「接続表現」というセクションを設定したが、それは、文の初頭にくる「だから」「でも」などの接続詞類を指す。それに対して、本節で示す接続表現は、従来の節と節とを結びつける接続助詞である。学校文法では、「接続助詞は、その前に置かれる節(前件または従属節)と後に置かれる節(後件または主節)を結びつける働きをする附属語です。」(山田敏弘 2004:63)との概論的な定義が成されている。また、接続表現と文構造の関係に関するものに、南不二男(1974,1993)の研究がある。南は従属節(従属句)を、従属節末の表現や節内に出現する助詞・副詞などから A.「ナガラ＜継続＞、ツツ、テ、連用形反復」など、B.「ト、ナガラ＜逆接＞、ノデ、ノニ、バ、タラ、ナラ、テモ」など、C.「ガ、カラ、ケレド、シ」など、の 3 つに分類している。接続助詞は前後の節の関係によって、順接か逆接かといった機能を持つので、接続助詞が文の構成素の 1 つとして見られるが、本論文では、先行研究を踏まえて、話し手の言語行動をどのように捉えるか、という点について観察していく。次のデータを挙げてみる。

(137)060080J: 【えとね、あ、だいたいそういう仕事です。(ああ)】
【で、あのう、その後、定時制高校にも行ったんですけどね。(ええ)】
【はい、その時も、まあ、あいう時代ですから、】
【夜間高校もすごく賑やかですよね。】
060081I: 【ああ、】

(138) 010067A: 【すごいよね、確かに、肌がお綺麗だったけど、】
010068B: 【やっぱり、化粧品の人、あれあれやったら、】
【まずいじゃない？】
010069A: 【いや、そうだけど、そうだけど、】
【やっぱ、あ、すごいわ。】

(139) 060302I: (前略)
【はい、(あ) そんなできる、できるわけなんですけど、】
【だから、50 件で、(はい) 50 件いっぱいなっちゃうと、(はい)】

【もっとも使わないだろうなあという、】
【番号を消さないといけないんですよ。】

(140) 020226C: 【{笑い}計量カップなかったから、】
020227A: 【やあ、まあ･･･、へぇ、牛丼を作る？】
020228C: 【牛丼ぐらいすぐ作れるよ。】

(141) 050007H: 【ああ、エリーが倒れてて(うんうん)、】
【木曜日の朝見たのか？】
050008I: 【木曜の朝、昨日、木曜の朝、】
050009H: 【そうか、昨日か？】

(137)では、話し手は、「夜間高校が賑やか」ではないと聞き手が思うだろうと予想する。「けど」から見られる言語行動は、その後「夜間高校もすごく賑やか」を発話する前の逆接条件として準備されるのである。また、「から」から見られる言語行動も、「夜間高校もすごく賑やか」の根拠となる準備である。(138)でも、「化粧品の人、あれあれやる」という命題と「まずい」という命題が繋がる言語行動は、順接条件としての「たら」に反映される。次の 010069A では、「けど」は上記と同様に説明できる。

しかし、(139)の 010067A では、末尾にくる「けど」は、話し手 A が次の発話をする前の逆接条件として準備されるのであるが、その直後に話し手 B が割り込んでくる。010068B の「やっぱり」は、4.1.2.に分析した初頭行動の言語形式である。この言語形式に相当する言語行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「化粧品の人、」という言語形式に相当する言語行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。それらによって、話し手 A の発話が終了させられたと考えられる。010067A の末尾にくる「けど」は、010068B の「やっぱり、化粧品の人、あれあれやったら、」と逆接の意味が成立しないが、1 つの言語行動と捉えられる。従って、(140)の「から」も同様に説明できると思う。(139)では、最初の文の末尾にくるのは「けど」という言語形式である。この場合は、聞き手の割込はない。次の文の初頭にくる「だから、」に相当する言語行動は、4.1.2.の分析から、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。要するに、「はい、（あ）そんなできる、できるわけなんですけど、」という発話を終了したと言える。前文の末尾にくる「けど」と次の文の初頭にくる「だから、」とは、順接か逆接か判断し難いが、「けど」という言語形式は、1 つの言語行動と捉えられる。(141)の「倒れてて」のように、用言活用の「て」の直後に「て」

を用いるのは、「いて」の省略と考えられる。それは、「ので」のように順接の意味と考えられるが、次の文を見ると、(139)のように、話し手が自分の前の発話に割り込んで、内容的には別の話題に移したと考えられる。「て」という言語形式は、1つの言語行動と捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動を、「既出命題を継続する言語行動」と設定する。

4.2.4. 既出命題を焦点化する言語行動

本節では、下記の文の末尾に来る言語形式を観察し、それらを通して、「既出命題を焦点化する言語行動」を設定する。

・前述の事項を焦点化する表現

・前述の事項を例示として扱う表現

4.2.4.1. 前述の事項を焦点化する表現

本節では、文の末尾に現れる「～というのは、」「～っては、」「～のは、」など言語形式を示す。これらの言語形式は、文の末尾という位置の制約があり、先行発話の内容あるいは命題を焦点化するという働きがあると考える。本論文では、話し手の既出の命題に対する言語行動の1つであると考える。次のデータが挙げられる。

(142) 060060J: 【だから、（うんうん）私たちと同じ人が、どんな生活をして来られたかなっていうのは（ああ）、】
【興味があります。】
060061I: 【そうなんですね、そこのところに。】

(143) 030206E: （前略）
【私がやった習い事とかを（うん）、】
【けっこう、習い事、遅くによりよったけど（うん）、】
【もう、4歳とか3歳ぐらいからやり始めて、】
【で、たぶん私を無意識で、まあ、見てはいるんじゃないっていうのは、】
【すごい、なんか、（うん）親とか、おばあちゃんとかからめちゃ言われて、】

(144) 060088J: （前略）

【あのう、3年高校すぐ行けなかったものは、（うんうん、）】
【どこかに勤めて、】
【あのう、定時制高校に行く[という、]（ええ）】
【そういう行き方もあったんですよね。】
060089I:　【ああ、なるほどね、それそうね、】

(142)では、「っていうのは」は、「私たちと同じ人が、どんな生活をして来られたかな」という部分を取り立てて、続いてくる文「興味があります」の主題になると考えられる。同様に、(143)では、「っていうのは」は、「私を無意識で、まあ、見てはいるんじゃない」という先行の文脈を取り立て、そこで述べられている内容を焦点化する。(144)では、「という、」は、「定時制高校に行く」という先行の文脈を取り立て、そこで述べられている内容を焦点化する。それに続く文の初頭の「そういう」は、4.1.3.1.の指示表現という言語形式で、前文の「定時制高校に行く」を指し、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」として捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」と設定できる。

4.2.4.2.　前述の事項を例示として扱う表現

本節では、文の末尾に現れる「とかを、」「～みたいなを」など言語形式を示す。これらの言語形式は、前節の述べている「前述の事項を焦点化する表現」と同様に、文の末尾という位置の制約がある。それらは、先行発話の内容あるいは命題を例示して具体化するという働きがあると考える。本論文では、このような例示することが、話し手の既出の命題に対する言語行動の1つであると考える。次のデータが挙げられる。

(145) 030206E:　(前略)
【私がやった習い事[とかを]（うん）、】
【けっこう、習い事、遅くによりよったけど（うん）、】
【もう、4歳とか3歳ぐらいからやり始めて、】
【で、たぶん私を無意識で、まあ、見てはいるんじゃないっていうのは、】
【すごい、なんか、（うん）親とか、おばあちゃんとかからめちゃ言われて、】

(146) 030041D:　(前略)

【ほかの案も考える（うん）かが、】
【もしくは、流しがどっちが（うん）いいと思うみたいなを（うん）、】
【あのう、ショウタロウが教えに来たね、昨日（うん）。】
【たしかになあと思う。】

(145)の「とかを、」は、「私がやった習い事」という先行文脈を受ける一方、話し手は自分の意見を述べる際、断定を避けていることを表示する。(146)では、文の末尾にくる「みたいなを、」は、「流しがどっちがいいと思う」という先行文脈を受ける一方、前述した4.2.1.3に記述した「みたい」のように、話し手は自分の意見を述べる際、断定を避けていることを表示する。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、前節の「前述の事項を焦点化する表現」と同様に、「既出命題を焦点化する言語行動」と設定できる。

4.2.5. 発話あるいは話題を共有する言語行動

本節では、下記の文の末尾に来る言語形式を観察し、それらを通して、「発話あるいは話題を共有する言語行動」を設定する。

・終助詞及びイントネーションによる共有
・聞き手への何らかの行動を求め

4.2.5.1. 終助詞及びイントネーションによる共有

本節では、伝統的に終助詞に分類される「か」「の」「よね」「ね」「ぞ」や、上昇イントネーションなどを観察する。終助詞は、主に文の末尾に現れ、話し手から聞き手への伝達に伴う疑問、感動、確認などの態度を表す。イントネーションとは、音声言語において文または発話全体につけられた音の高低のパターンを言う。一般にイントネーションのパターンは、上昇調、下降調という用語で表される。日本語の終助詞及び文末イントネーションの意味機能の関わりについては、これまで多くの研究で取り上げられてきた。郡史郎(1997)、森山卓郎(2001)、伊豆原英子(2003)、大島デイヴィッド義和(2013)などの研究が挙げられる。大島デイヴィッド義和(2013)では、終助詞「よ」「ね」の機能をイントネーション別に分析している。そして、「ね」の機能をイントネーションによって、「共有認識」「確認要求」「承認要求」「共有認識＋感情表明」などの機能があることを指摘している。それらを踏まえて、本論文では文の末尾の終助詞及び上昇調のイントネーションを取り上げ、どのような言語行動が捉えられるかを観察する。次のデータが挙げられる。

(147) 060037I: 【相当当時の流行的な名前なんですね。】
060038J: 【そうなんですね、ほんとに。】

(148) 040603F: 【ぷくぷく釣りもあった？】
040604G: 【あったあった、あれでも運ゲーではなかったよね。】
040605F: 【運ゲー、運ゲー、えさをするやつ。】
040606G: 【うん、あるよね、いろんな。】

(149) 030304D: 【春休みって、いつから始まるっけぇ。】
030305E: 【2 月の 8 かなあ。】

(150) 060048J: 【あ、そしたら、まあ、ずっとお若い時からですか？】
060049I: 【えとですね、いや、昔はサラリーマンをしてた時期もありましたし、】

(151) 020102A: 【やっぱ、うん、えっ、ライトレベル誕生日プレゼントするの？】
020103C: 【うん、ライトレベルと漫画セットにしてあげた、】
【あれが 1 巻。】

(147)の 060037I の発話では、「ね。」によって、話し手の既出の命題内容を聞き手に伝えていきながら、聞き手の承認などの返事を待っていることが推測できる。要するに、命題内容を聞き手と共有しているのである。060038J では、話し手は、「そうなんですね、ほんとに。」を用いて、聞き手に肯定の態度を伝えていく。すなわち、話し手は、聞き手による話題に参加したことを表明している。(148) 040604G では、「よね。」によって、話し手 G は「あれでも運ゲーではなかった」という命題内容を F に確認する。040605F の初頭に来る「運ゲー、運ゲー、」という言語形式は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」に相当する。要するに、聞き手 F は、話し手 G の発話に参加したことを表明している。(149)の「っけぇ。」も同様に説明できると考える。

終助詞の他に、(148)の 040603F の上昇イントネーションも同様に捉えられる。話し手 F は「ぷくぷく釣りもあった」という命題内容を G に確認する。040604G の初頭に来る「あった、あった、」という言語形式は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」に相当する。ここでも、聞き手 G は、話し手 F の発話に参加したことを表明している。また、終助詞と上昇調イントネーションとの併用のデータは、実際の談話にもよく見られる。(150), (151)はそのデータである。(147)～(149)と同様に、「か？」「の？」によって、話し

手は聞き手に情報あるいは確認の要求を行うと捉えられる。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、「発話あるいは話題を共有する言語行動」と設定する。

4.2.5.2. 聞き手への何らかの行動の求め

本節では、「てもらう」「てくれる」などの動作の方向性を表す補助動詞に言及する。基本的に「くれる」「くださる」「やる」「あげる」「さしあげる」「もらう」「いただく」 の 7 語は、伝統的な文法では「授受動詞」と呼ばれ、ひとつのまとまった体系をなしている。配慮表現などの研究においては、授受動詞は行為に伴って恩恵のやりとりがあることを表すもので、「～てもらう」「～てくれる」は行為に伴う恩恵の受け取りを表す。本論文では、その恩恵のやりとりを、言語行動の 1 つと考える。次のデータがあげられる。

(152) 060002J: 【こちらこそよろしくお願いします、(｛笑い｝) ちょっと、お名前をなにか教えてもらえますか？】
060003I: 【はい、私は(氏名)と申します。】

(153) 020020C: 【うまいことなんか、やってくれる？】
020021A: 【やあ、まあ、そうだよね、大丈夫でしょう。】

(154) 030290E: 【てっかさあ、前回のさあ（うん)、家庭科のさあ、指導案がある、】
【国研以外のやつ、 1 つ（あるある)】
【あれ、コピーさせてもらえる？】
030291D: 【いいよ、あ、でも、今日は持ってきてない。】

(152)では、「お名前をなにか教えてもらえますか？」という発話から分かるように、聞き手 I が答えるように話し手が要求している。この要求する言語行動は、2 つの部分に分けて分析する。まず、前節で記述した「か？」は「発話あるいは話題を共有する言語行動」に相当する。また、「てもらえます」という言語形式を用いるのは、話し手 J が聞き手 I から「教える」ということを受け取る。つまり、話し手は聞き手に対する態度を表明しているので、発話あるいは話題を共有しようと考えていると見られる。(153)の「くれる」も同様に説明できる。(153)では、「？」が「発話あるいは話題を共有する言語行動」に相当する。また、「てくれる」という言語形式を用いるのは、話し手 C が聞き手 A から「やる」ということを受け取るからである。(154)では、「？」が「発話あるいは話題を共有する言

語行動」に相当する。また、「させてもらえる」という言語形式を用いるのは、話し手 E が聞き手 D から「コピー」ということを受け取るからである。

以上より、これらの言語形式に相当する言語行動は、終助詞及びイントネーションによる共有と同様、「発話あるいは話題を共有する言語行動」と設定できる。

4.3.　言語行動と言語形式のまとめ

本節では、4.2 に記述した文の初頭行動及び末尾行動の種類とそれぞれの言語形式を［表 2］のようにまとめる。また、１つの文において初頭行動と末尾行動がどんな仕組みであるかについて、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動を観察してみる。さらに、初頭行動・末尾行動及び初頭形式・末尾形式といった概念の定義を示す。

［表 2］言語行動と言語形式

<table>
<tr><th colspan="2">言語行動</th><th colspan="2">言語形式</th></tr>
<tr><td rowspan="12">初頭行動</td><td rowspan="3">1.直前の発話あるいは話題に応答する言語行動</td><td>疑問に対する応答
（「はい、」「うん、」「そう、」「そうそうそうそう、」「いや、」「いやいやいや、」「いえいえ、」「ほんとに、」「でしょう、」「違う違う、」「泳げる、泳げる、」「あいてない、あいてない、」）</td><td rowspan="12">初頭形式</td></tr>
<tr><td>あいづち
（「うん、」「ああ、」「はい、」「そう、」「そうやね、」「はい、そうですね、」「たしかに、」「ほんとですね、」「ほんと、そうですよね、」「手間がかかる、」「ぐいぐい来るね」「わかるわかる、」「ですよね、」「でしょう？」「そうか、」「マジか、」「広島か、」）</td></tr>
<tr><td>笑い</td></tr>
<tr><td rowspan="3">2.直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動</td><td>言いよどみ
（「まあ、」「なんか、」「あのう、あのう、」「やあ、なんか、」「その、まあ、」「なんか、さあ、なんだっけぇ、」「どうかなあ、」「あれっ」「あのう、あれですよね、あのう、」「そうですね、思い出した、」）</td></tr>
<tr><td>意外・驚き
（「えっ、」「やっ、ちょっと、」「あっ」「やっ」）</td></tr>
<tr><td>接続表現
（「でも、」「だから、」「だって、」「でも、」「やっぱり、」「ですが、」）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3.直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動</td><td>指示表現
（「それは」「そんなところも」「そんなの、」「あれは、」「それは、」「ていうがね、」）</td></tr>
<tr><td>同語重複
（「土曜日は、」「井筒屋さんなんか、」「井筒屋って、」「夏休みってさあ、」「ヘイホーさあ、」「震えるなんか、」）</td></tr>
<tr><td>4.後続命題に態度を表明する言語行動</td><td>副詞修飾
（「たぶん、」「だいたい」「ほんとに、ある意味で」「ほんとに、」「正直で」「正直、」「極端、」「決して」「全然」）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">5.後続命題の一部を焦点化する言語行動</td><td>「は」「って」などによる焦点化
（「私は、昨日は、」「この前さあ、計量カップさあ、」「長期合宿も」「今年も」「自分が、」「総合って、」「学校も、」「携帯電話とかも」）</td></tr>
<tr><td>疑問詞による焦点化
（「どんな」「いくつ」「何で」「何」「何ぼ」）</td></tr>
</table>

末尾行動	1.既出命題に態度を表明する言語行動	形式名詞述語 （「んです」「もんです」「わけです」「んや」「もん」「の」）	末尾形式
		話し手自身の感情・思考 （「と思います、」「予感する、」「感じ」「迷ってる。」「覚えてない。」「と。」「気がします」）	
		命題に対する推量・伝聞など （「でしょう」「みたいな。」「みたいなさあ。」「ぐらい」「らしい」「こう」「よう。」「かあー」「やろ。」「よ、」「だろな」「ぞ。」）	
		肯定・否定の態度 （「です」「た、」「ない。」「しない」）	
		命題の遂行 （「申します。」「気づいた」「賛成しない。」「反対です。」）	
	2.発話あるいは話題を完了する言語行動	述語の終止形 （「～ました。」「～かった。」「～る。」「～た。」）	
	3.発話あるいは話題を継続する言語行動	接続表現 （「から、」「けど、」「たら、」「～てて、」）	
	4.既出命題を焦点化する言語行動	前述の事項を焦点化する表現 （「っていうのは、」「という、」）	
		前述の事項を例示として扱う表現 （「とかを、」「みたいなを」）	
	5.発話あるいは話題を共有する言語行動	終助詞及びイントネーションによる共有 （「ね。」「よね。」「っけぇ。」「？」「か？」「の？」）	
		聞き手への何らかの行動の求め （「てもらえます」「くれる」「させてもらえる」）	

［表 2］に示すように、まず、文の初頭行動は、5 つの言語行動に下位分類でき、それらに対応して、11 種類の言語形式が見られる。末尾行動も、5 つの言語行動に分類でき、11 種類の言語形式が対応する。

以上、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動を記述してきた。一般に、文の初頭においては、話し手は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」によって、直前の発話あるいは話題に対して何らかの反応あるいは態度を示す。また、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」「後続命題に態度を表明する言語行動」「後続命題の一部を焦点化する言語行動」によって、伝えたい命題に対して、なんらかの態度を表す。文の末尾においては、話し手は、「既出命題に態度を表明する言語行動」「発話あるいは話題を完了する言語行動」「発話あるいは話題を継続する言語行動」「既出命題を焦点化する言語行動」によって、伝えた命題に対して、なんらかの態度・心情を示す。「発話あるいは話題を共有する言語行動」によって、聞き手に何らかの態度・心情を表す。

本論文の 3.では、初頭行動・初頭形式及び末尾行動・末尾形式の概念について、仮説を立てたが、上のデータを観察した上で、初頭行動及び末尾行動などの定義を次にまとめる。

(161) a. 初頭行動: 話し手が、直前の発話あるいは話題、または産出する話題に関連する命題に対して態度・心情を表したりする言語行動。

初頭形式: 上述した初頭行動を行うために、話し手が用いる言語形式。

b. 末尾行動: 話し手が、産出した命題、または聞き手に対する態度・心情を表わしたりする言語行動。

末尾形式: 上述した末尾行動を行うために、話し手が用いる言語形式。

5. 文の初頭行動と末尾行動の関係

4.では、文の初頭形式及び末尾形式に現れるものを記述し、それらの言語形式に相当する言語行動を設定した。それに伴って、初頭行動及び末尾行動の定義を修正した。本章では、初頭行動と末尾行動の間に類似したものが見られることから、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察してみる。

5.1. 言語行動の配列

1 つの文の中にある初頭行動と末尾行動が類似しているかどうかを確認するためには、複数の初頭行動や末尾行動が現れるデータを観察すべきである。本節では、初頭行動と末尾行動を別々に観察していく。

5.1.1. 初頭行動の配列

まず、初頭行動の下位分類した言語行動の配列について分析する。次のようなデータから見てみる。初頭形式は一重下線で示す。

(162) 010092B:【ケイドロしてますね。】
　　010093A:【<u>{笑い}、てっか、そのサークル</u>かなり人数多い？】

(162)の 010093A では、初頭に来る「{笑い}」に相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「てっか、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。次に来る「そのサークル」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。このように、この文で捉えられる初頭行動の配列は、［図 3］のようになる。

［図 3］

「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」

⇓

「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」

⇓

「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」

別のデータを挙げる。

(163) 040460G:【え、なんか、100 個ぐらいね、】
【なんか、バルーン押せやつ並んでて、】
【選んでて、】
040461F:【ああ、でも、それ 5 じゃない？】

(163)の 060162J では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。次に来る「それ」は「指示表現」というという初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。（149）と同様に、この文で捉えられる初頭行動の配列は、［図 4］のようになる。

［図 4］

「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」
⇓
「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」
⇓
「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」

別のデータを挙げる。

(164) 060281J:【うん、最後まで持たずにして、】
060282I:【そう、ぜったい今後も持たれないほうがいい気がします。】

(164)の 060282I では、初頭に来る「そう、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「ぜったい」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。次に来る「今後も」は、「「は」「って」などによる

焦点化」というという初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。このように、この文で捉えられる初頭行動の配列は、［図 5］のようになる。

［図 5］

「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」

⇓

「後続命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「後続命題の一部を焦点化する言語行動」

別のデータを挙げる。

(165) 060161I:(前略)

【なんか、考えるのは、ちょっと怖い気がしますね。】

060162J: 【ああ、なんかね、ほんとに、若い人たち、真剣に考えられないと、】

(165)の 060162J では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後に来る「なんかね、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「ほんとに」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。次に来る「若い人たち、」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。このように、この文で捉えられる初頭行動の配列は、［図 6］のようになる。

［図 6］

「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」

⇓

「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」

⇓

「後続命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「後続命題の一部を焦点化する言語行動」

別のデータを挙げる。

(166) 050327I:(前略)

【準備とかも、うまく行ったんだろうなあと思うし、】

050328H:【うん、でも、あれもぜんぜん、先輩はノータッチだったって。】

(166)の 050328H では、初頭に来る「うん、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後に来る「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。次に来る「あれ」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。それに続く「ぜんぜん、」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。その次に来る「先輩は」は「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。このように、この文に捉えられる初頭行動の配列は、[図 7] のようになる。

[図 7]

「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」

⇓

「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」

⇓

「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」

⇓

「後続命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「後続命題の一部を焦点化する言語行動」

以上、初頭行動の配列を観察した。出現した初頭行動に、文頭から順に数字番号を付けてまとめると、次のような配列になる。

①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動
②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動
③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動
④後続命題に態度を表明する言語行動
⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動

談話においては、これら初頭行動の下位言語行動は、必ずしも全部出現するとは限らない。

5.1.2. 末尾行動の配列

一方、下位分類した末尾行動が、どのような配列であるかについて、次のデータを挙げて観察する。末尾形式は二重下線で示す。

(167) 050085I: 【どんな本があるとか、】
【あとは、パソコンもある、】
【パソコンと、プリンタがあるのは知ってるけど、】
【何だっけぇ、コピー機つき、コピー機能付きのプリンタだっけぇ。】
050086H: 【ああ、あるとかなんとか。】
050087I: 【あるとかなんとかね（うんうん）、詳細知らんしさあ、】
【なんて、今日は、探検がてら（うん）、見てみ<u>ようと思う。</u>】

(167)の 050087I の最後の文では、末尾に来る「よう」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに続く「と思う。」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。また、「思う。」は、「述語の終止形」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は「発話あるいは話題を完了する言語行動」である。このように、この文に捉える末尾行動の配列は、［図 8］のようになる。

［図 8］

「既出命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「発話あるいは話題を完了する言語行動」

別のデータを挙げる。

(168) 010132A: 【ミサツは、お酒はもう、飲ま、飲めない？】

010133B: 【んん、わかーない、ただ、アルコールパッチテストー、ハヤシさんと一緒に（うん）やったんけど、】

【その時は、あのう、反応はなかった。】

(168)の 010133B の最初の文では、末尾に来る「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題に態度を表明する言語行動」である。また、それに続く「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。このように、この文で捉えられる末尾行動の配列は、［図 9］のようになる。

［図 9］

「既出命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「発話あるいは話題を継続する言語行動」

別のデータを挙げる。

(169) 060300I: 【1990 年代の後半からですよね。】

060301J: 【はい】

060302I: (前略)

【もっとも使わないだろうなあというを、】

【消さないといけないんですよ。({笑い})】

(169)の 060302I の最初の文では、末尾に来る「だろう」「なあ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「というを」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。このように、この文で捉えられる末尾行動の配列は、［図 10］のようになる。

［図 10］

「既出命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「既出命題を焦点化する言語行動」

別のデータを挙げる。

(170) 010001A: 【えと、({笑い})しゅっ週末、(うん)実家に帰ってたんよね。】
010002B: 【実家帰ってた、】
【日曜日ね。】

(170)の 010001A では、末尾に来る「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「発話或いは話題を共有する言語行動」である。このように、この文で捉えられる末尾行動の配列は、［図 11］のようになる。

［図 11］

「既出命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「発話或いは話題を共有する言語行動」

以上、下位分類した末尾行動の配列を観察した。ただ、談話においては、末尾行動の下位言語行動は、必ずしも全部出現するとは限らないと分かる。特に、「既出命題に態度を表明する言語行動」は、「発話あるいは話題を完了する言語行動」、「発話あるいは話題を継続

する言語行動」、「既出命題を焦点化する言語行動」、「発話或いは話題を共有する言語行動」のそれぞれ言語行動と共起し、2 つずつ出現する場合がよく見られる。従って、「発話あるいは話題を完了する言語行動」、「発話あるいは話題を継続する言語行動」、「既出命題を焦点化する言語行動」、「発話或いは話題を共有する言語行動」という 4 つの言語行動の前後の配列が、初頭行動ほど顕著に捉えられない。

ところが、話し手の一度の発話のなかに、2 文以上が存在するデータを観察する場合、「発話或いは話題を共有する言語行動」が、その発話の最後に出現する傾向が見られる。次のデータが挙げられる。

(171) 010067A: 【すごいよね、確かに、肌がお綺麗だったけど、】
010068B: 【やっぱり、化粧品の人、あれあれやったら、】
【まずいじゃない？】

(172) 060088J: (前略)
【あのう、三年高校すぐいけなかったものは、(うんうん、)】
【どこかに勤めて、】
【あのう、定時制高校に行くという、(ええ)】
【そういういきかたもあったんですよね。】
060089I: 【ああ、なるほどね、それそうね、】

(173) 060303J: 【うん、そうですね、思い出しました、私がね、社会人入学しましたから、】
【1997 年に、(ええ) 大学に入ったんです。】
060304I: 【ああ、そうなんですね。】
060305J: 【で、その時に、他の社会人が全部で 5 人入った。(はい)】
【あのう、山大ですか？】
060306I: 【いや、私は山大じゃないです。】
060307J: 【あ、そうですか (はい)、あのう、共通教育棟から、こう、下を見てると、】

(171)の 010068B では、前文の末尾に来る「たら、」は「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文の末尾に来る「じゃない」「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は「発話或いは話題を共有する言語行動」である。

(172)では、前文の末尾に来る「という、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文の末尾に来る「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。

(173)では、前文の末尾に来る「た。」は「述語の終止形」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「発話あるいは話題を完了する言語行動」である。後文の初頭に来る「あのう、」は、は「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。要するに、前文に繋がっていて、発話或いは話題を継続していくのである。末尾に来る「か」「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は「発話或いは話題を共有する言語行動」である。

以上は、話し手の一度の発話のなかに、文の末尾行動を観察してきた。「発話あるいは話題を完了する言語行動」、「発話あるいは話題を継続する言語行動」、「既出命題を焦点化する言語行動」、「発話或いは話題を共有する言語行動」という 4 つの言語行動が、一つの文では共起しにくい。しかし、複数の文で構成された一度の発話のデータになると、「発話或いは話題を共有する言語行動」が、他の 3 つの言語行動より、後に出現すると考えられる。そうすると、前述した「既出命題に態度を表明する言語行動」を含め、文の末尾行動の配列は、［図 12］のようになる。

［図 12］

「既出命題に態度を表明する言語行動」

⇓

「発話あるいは話題を完了する言語行動」・「発話あるいは話題を継続する言語行動」・「既出命題を焦点化する言語行動」

⇓

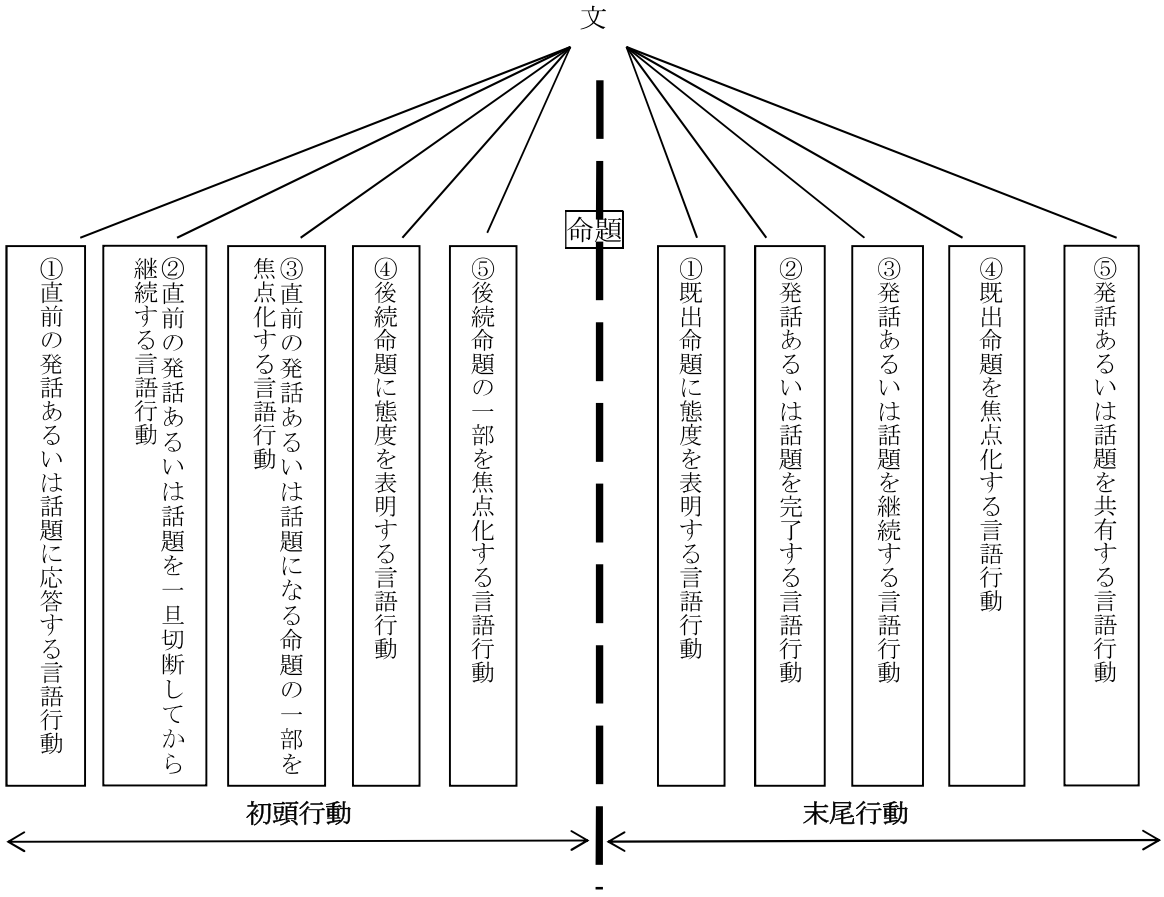
「発話或いは話題を共有する言語行動」

上記のように、「発話あるいは話題を完了する言語行動」「発話あるいは話題を継続する言語行動」「既出命題を焦点化する言語行動」は、並列の関係である。本論文では、初頭行動と対応させるため、数字番号を付けて、下記のように示す。なお、その中の②③④は並列関係であり、順列は存在しない。

①既出命題に態度を表明する言語行動
②発話あるいは話題を完了する言語行動
③発話あるいは話題を継続する言語行動
④既出命題を焦点化する言語行動
⑤発話或いは話題を共有する言語行動

以上、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、下位分類した初頭行動及び末尾行動の配列を観察した。談話においては、初頭行動及び末尾行動の下位分類した言語行動は、必ずしも全部出現するとは限らない、と考えられる。これらの配列を図示すれば、下のようになる。

［図 13］下位分類した言語行動の配列



［図 13］から分かるように、まず初頭行動は、基本的に「①直前の発話あるいは話題に

応答する言語行動」「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」という配列で現れる。一方、末尾行動は、基本的に、「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」「③発話あるいは話題を継続する言語行動」「④既出命題を焦点化する言語行動」「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」という配列で現れる。なお、「②発話あるいは話題を完了する言語行動」「③発話あるいは話題を継続する言語行動」「④既出命題を焦点化する言語行動」は、並列的な関係である。

5.2. 初頭行動と末尾行動の鏡像関係

本章の冒頭に述べたように、初頭行動と末尾行動の間に類似したものが見られることから、本節では、文の初頭形式及び末尾形式の下位分類した言語行動の順序を決めた上で、初頭行動と末尾行動の関係を観察してみる。まず、次のようなデータを見てみる。

(174) 010122A:【あ、カクテルか、（うん）でも、酒飲まないか？ 】
010123B:【うん、まあ、でもね、飲み会があるよ。】

(174)の 010122A では、初頭に来る「あ、」「カクテルか、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。末尾に来る「か」や「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」である。

010123B では、初頭に来る「うん、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」」である。その直後に来る「まあ、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、「でもね、」は「接続表現」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。末尾に来る「よ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「①既出命題に態度を表明する言語行動」である。

以上、いずれの発話においても、初頭行動の「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」は、聞き手に対する言語行動と考えられる。末尾行動の「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」

も、聞き手に対する言語行動と考えられる。このことから、初頭行動と末尾行動には共通点があるということが分かる。

(175) 060056J:【あのう、ねえ、ほんとに、私たちって 21 年だから、】
【ちょうど節目の時に生まれたんですよね。】
060057I:【ええ、そうそうね。】

(175)の 060056J の最初の文では、初頭に来る「あのう、」「ねえ、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後に来る「ほんとに」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「④後続命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「私たちって」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。末尾に来る「から、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「③発話あるいは話題を継続する言語行動」である。

ここで見られる初頭行動は、聞き手に関わる言語行動とその直後の命題に関わる言語行動である。末尾行動は命題に関わる言語行動である。命題に関わる言語行動が、初頭行動にも末尾行動にも共通して現れていることが分かる。

また、060056J の 2 番目の文では、初頭に来る「ちょうど」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「④後続命題に態度を表明する言語行動」である。末尾に来る「んです」は、「形式名詞述語」という初頭形式で、それに相当する末尾行動は、「①既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後に来る「よね。」は「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」である。

ここで見られる初頭行動は命題に関わる言語行動であり、末尾行動は命題に関わる言語行動とその直後の聞き手に関わる言語行動である。ここでも、命題に関わる言語行動が、初頭行動にも末尾行動にも現れている。

さらに、次のデータを見てみよう。

(176) 040047F:【1 週間だし、】
040048G:【なんか、でも、長期合宿もあるでしょう？】

(176)の 040047F では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。末尾に

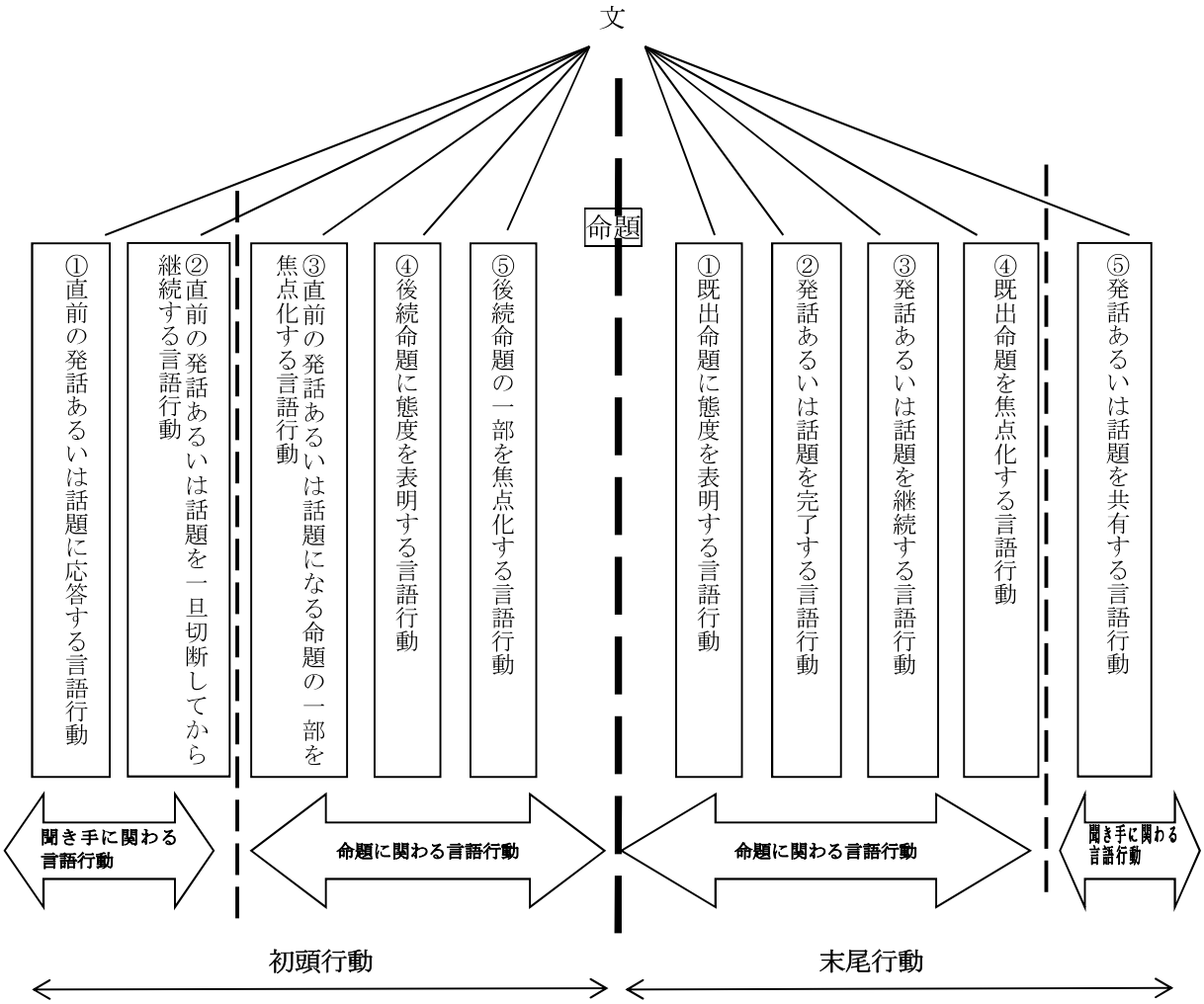
来る「し」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「③発話あるいは話題を継続する言語行動」である。

040048G では、初頭に来る「なんか」は、「言いよどみ」で、それに続く「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「長期合宿も」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。一方、末尾に来る「でしょう」は「命題に対する推量・伝聞など」という初頭形式で、それに相当する末尾行動は「①既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後の「？」は「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」である。

ここで、捉えられる初頭行動は、聞き手に関わる言語行動とその直後の命題に関わる言語行動である。末尾行動は同様に、命題に関わる言語行動とその直後の聞き手に関わる言語行動である。初頭行動と末尾行動に共通の言語行動が現れていることが分かる。

以上、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察した。基本的に、文の初頭行動が行われる際に、末尾行動も行われる。すなわち、初頭行動と末尾行動が共起する。いずれも聞き手に関わる言語行動と命題に関わる言語行動を含む、と考えられる。また、初頭行動には、聞き手に関わる言語行動が命題に関わる言語行動の前に出現する。一方、末尾行動には、聞き手に関わる言語行動が命題に関わる言語行動の後ろに出現する。これらの関係を図示すれば、［図 14］のようになる。

［図 14］初頭行動と末尾行動との鏡像関係



［図 14］から分かるように、まず初頭行動には、「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」が現れる。このうち、①，②は聞き手に関わる言語行動である。また、③，④，⑤は命題に関わる言語行動である。

一方、末尾行動には、「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」「③発話あるいは話題を継続する言語行動」「④既出命題を焦点化する言語行動」「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」が現れる。このうち、①，②，③，④は命題に関わる言語行動であり、⑤は聞き手に関わる言語行動である。

［図 **14**］に示したのは、文が産出されるとき、初頭行動及び末尾行動の下位の言語行動がどのように構成されるかということである。ここでは、文の命題を中心として、命題から相対的に外側には聞き手に関わる言語行動が、相対的に内側には命題に関わる言語行動がそれぞれ位置している。つまり、命題を中心として、初頭行動と末尾行動とは、鏡像関係にあるといえるだろう。

6. 言語行動の統合関係

5.までは、初頭行動と末尾行動との鏡像関係を、1 つの文の中に命題に関わるか聞き手に関わらないかという観点から一般化に分析した。しかし、一般に、話し手と聞き手による「談話」は、その達成する過程では、複数の文がつながりながら、展開すると思われる。文と文がつながる際、初頭行動及び末尾行動の下位分類した言語行動どうしの横の関係については、まだ明確に言えない。例えば、次のデータを挙げる。

(177) 060079I:【はあ、じゃ、ずっと看護婦されてこられたんですか？】
060080J:【えとね、あ、だいたいそういう仕事です（ああ）】
(後略)

(178) 060098J:【はい、携帯電話とかも持つようになったら、】
【かなり、こう便利になってきた、（はい）】
(後略)

(177)のように、話し手と聞き手とが交替して発話した文の場合では、前文の末尾形式「か」「？」から「発話あるいは話題を共有する言語行動」を捉える。後文の末尾形式「えとね」から「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」を捉え、「あ」から「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」を捉える。5.に分析した初頭行動と末尾行動との鏡像関係の観点で見れば、それらは、聞き手に関わる言語行動という共通の性質を持つので、2 つの文が繋がっていくことが考えられる。しかし、(178)の場合、すなわち 1 人が一度に発話した 2 つの文の場合では、前文の末尾にも、後文の初頭にも、聞き手に関わる言語行動が見られない。その前文の末尾行動と後文の初頭行動はどのように関連するのであろうか。

上述した問題を言い換えれば、実際の談話では、話し手及び聞き手は、如何に談話を展開させるか、談話をスムーズに進行させるか、ということである。そして、この点において、本研究に記述した初頭行動及び末尾行動が重要な役割を果たしていると考えている。本章では、(177)で分析したように、前文の「発話あるいは話題を共有する言語行動」という末尾行動と、後文の「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」という初頭行動のような、前後文のつながりを示す言語行動は、「前後文のつながりに関わる言語行動」として設定する。従って、以上の問題を念頭にして、話し手と聞き手とが交替する場合と交替しない場合とに分けて、前文の末尾行動と後文の初頭行動とがどのように関連するか、解明してみよう。

6.1. 話し手と聞き手とが交替する場合

本節では、話し手と聞き手が交替して発話した文の場合で、前文の末尾行動と後文の初頭行動の下分類した言語行動には、つながりに関わる言語行動はどのように組み合わせるかについて考察する。その組み合わせのパターンをⅠ-a 類、Ⅰ-b 類、…II-a 類…III-a 類、III-b 類、…III-m 類のように分けて記述する。なお、これらの分類に現れる I, II, III または a,b,c,…m という記号の意味は、それぞれのパターンを記述しながら説明する。また、観察対象となる文は、文全体を大きな□で囲み、観察対象となる言語形式は、小さな□で囲む。

6.1.1. Ⅰ-a 類

本節は、Ⅰ-a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(179) 010004B: 【実家帰って、あのう、だから、ね、あれ買って、】
【{笑い}これ買って(ああ)、】
【食料とか調達して(ああ)、】
【で、あのう、夜 10 時ぐらいこっち帰ってきた。】
010005A: 【あ、土曜日は何をした？】

(180) 050005H: 【マッサン今日で終わりですか？】
050006I: 【明日、明日で終わり。】
050007H: 【ああ、{笑い}エリーが倒れてて(うんうん)、】
【木曜日、の朝見たのか？】

(181) 040154F: 【出た出た（うん)、え、なんかね、溜めとくのすきじゃないやね。】
040155G: 【うん、そんな感じやわ。】
040156F: 【{笑い}ストレス溜まらん？】
040157G: 【{笑い}あ、なんかね、そのう、何やってる間も、それが溜まっとんよね。】

(179)の 010004 の観察対象となる文では、末尾に来る「(帰ってき）た。」は、「述語の終止形」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を完了する言語行動」である。010005 では、「ああ、」は「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

(180)の 050006 では、末尾に来る「(終わ）り。」は、「述語の終止形」という末尾形式

で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を完了する言語行動」である。050007の観察対象となる文では、「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、「{笑い}」は、「笑い」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

(181)の 040155 では、末尾に来る「感じ」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、「やわ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040156 では、「{笑い}」は、「笑い」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を完了する言語行動」や「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」であると考えられる。

このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、前文の末尾に出現せずに、後文の初頭のみに出現する類型を、「I 類」と設定する。本節のパターンは、このI類の中の 1 つとして、「I - a 類」と設定する。

6.1.2. I - b 類

本節は、I - b 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(182) 040182F: 【高くつかわんでもいいし、】
【ぬくぬくして楽しいし、】
【ああ、幸せみたい。】
040183G: 【そう、 やっ、新しいゲーム買っちゃったんだね。】
040184F: 【何にしに買ったん？】

(183) 050140H: 【でも、あれ以来、そんなにそこまでならない。】
050141I: 【あ、ほんとに、 やっ、めっちゃ気分悪くなってくる。】
050142 H: 【あ、気分悪くなったり、】
【あの日じゃなくて、】
【で、ちょっと前の、マスクして（うん）、】
(184) 060326I: 【はい、ぜんぜん違う場所なんですけど、（うん、んん）】
【去年、関西から帰ってきたんですよ。】
060327J: 【あ、そうですか、 あのう、院に入るためですか？】

060328I:　【はい（んん）関西の大学院も選択肢にあったので、(はい)】
【どうしようかすごく迷ったんですけど、(はい)】

(182)の 040182F では、末尾に来る「みたい。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040183G では、「そう、」は「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「やっ、」は、「意外・驚き」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(183)の 050140H では、末尾は「(ない)。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。050141I では、「あ、」「ほんとに、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「やっ、」は、「意外・驚き」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(184)の 060326I の観察対象となる文では、末尾に来る「んです」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「よ」は「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。060327J では、初頭に来る「あ、」「そうですか、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「あのう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - b 類」と設定する。

6.1.3.　I - c 類

本節は、I - c 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(185) 010188A:　【記憶はない？{笑い}】
010189B:　【飲んで、】

【それから、（うん）あいまいになってるね。】
010190A: 【{笑い}　それやったら、】
【やっぱり、そのさあ、パッチテストはハヤシ先輩やったよね。】

(186) 030050E: 【ねえ、だって、今回おわったとしたら、（うん）】
【論文と見学の説明と、卒論と、えと、追いコン（うん）と卒業式かあとないよ、】
【準備としては、】
030051D: 【そうだね、あっ、色紙。】
030052E: 【そう、　それが一番、】

(187) 040063F: 【で、長期で一ヶ月ぐらいかけるんじゃったら、】
【ちまちま自分の空いたスケジュールで行ったほうがええと思うよ。】
040064G: 【うん、そうかそうか、でも、山口か、車校。】
040065F: 【ああ、　車校、山口きついかもしれない。】

(185)の 010189B の観察対象となる文では、末尾に来る「ね。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。010190A の観察対象となる文では、「{笑い}」は、「笑い」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「それ」は、「指示表現」というという初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(186)の 030051D では、末尾に来る「(色紙)。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。030052E では、「そう、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「それ」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(184)の 040064G では、末尾に来る「(車校)。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040065F では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「車校」「山口」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話

あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」と「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - c 類」と設定する。

6.1.4. I - d 類

本節は、I - d 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(188) 010181B: 【あのね、で、先輩たちに声掛ければよかったんだけ（うんうん）、】
【なんか盛り上がったから、】
【話すに話せんかったんよ。】
010182A: 【ああ、　でも、　それすごい盛り上がってるなあって。】

(189) 020262A: 【なんか、言い方すごいなあ、】
【おくっ、送り込まれる{笑い}】
【学級崩壊する送り、送り込まれる。】
020263C: 【いや、　そのう、そのう、　その小学校なんだけど、】
【その小学校よく学級崩壊するけぇ。】

(190) 040075F: 【うん、大学の近くとか、の車校とかもしかして、やっちょうかもしれんけど、】
【それでやってみたら、】
040076G: 【あ、大学、そうだね、修道大近くにないかなあ。】
040077F: 【うん、　まあ、　そっちさあ、車校の事情が分からんからさあ。】
040078G: 【{笑い}、そうしよう。】

(188)の 010181B の観察対象となる文では、末尾に来る「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「よ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。010182A では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後の「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してか

ら継続する言語行動」である。それに続く「それ」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(189)の 020262A の観察対象となる文では、末尾に来る「(送り込まれ) る。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。020263C の観察対象となる文では、初頭に来る「いや、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後の「そのう、そのう、」は、は「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「その」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(190)の 040076G では、末尾に来る「かなあ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040077F では、初頭に来る「うん、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。その直後の「まあ、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「そっちさあ、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」や「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - d 類」と設定する。

6.1.5. I - e 類

本節は、I - e 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(191) 030196E: (前略)

【なんで、こんな (ああ)、】

【というのに、兄弟って、やっぱ、双子とかでなくと、】

【比べるんだなあ。】
030197D: 【なんか、ミサトが言ってたよ（そうなん）、】
【ミサトの場合は、逆だけど（うんうん）、】

(192) 040332F: 【64 やったことないな。】
040333G: 【あのう、Wii やったことはない？】
040334F: 【うち、Wii 3 D やっても（うん）、】
【Wii はね、友達のうちとかね、よくやってた（うん）。】
【だから、この間ね、ショウタロウさんのうちで、〈『ラインロギオン』〉、】

(193) 050055H: 【{笑い}分からないですね。】
050056I: 【想定外？】
050057H: 【想定外かな。】
050058I: 【しかも、どうぞどうぞと言ったけど、】

(191)の 030196E の観察対象となる文では、末尾に来る「んだ」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「なあ。」は「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。030197D の観察対象となる文では、初頭に来る「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(192)の 040332F では、末尾に来る「な。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040333G では、初頭に来る「あのう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(193)の 050057H では、末尾に来る「かな。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。050058I では、初頭に来る「しかも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1

つとして、「I - e 類」と設定する。

6.1.6. I - f 類

本節は、I - f 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(194) 010251B: 【それが、飲んで、】
【すごいテンション逆あがって（ああ）行くわ。】
010252A: 【でも、 それは、ああ、なんか想像できるね。（だろ）】
【てっか、うち一年生、なんか、意外にお酒つよそうな人が多い（ああ）。】
【イノッチ、あのう//】

(195) 020103C: 【うん、ライトレベルと漫画セットにしてあげた、】
【あれが 1 巻。】
020104A: 【えっ、 それは、だめだ、】
【ちょっと、やっぱ、それで喜んだらいいけど。】

(196) 030009D: 【全然心配することもなかったって（へぇ）】
【よかった。】
030010E: 【えっ、じゃ、 それ資格とったら、（うん）】
【ゆう、なんだっけぇ、有利とか。】

(194)の 010251B の観察対象となる文では、末尾に来る「わ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。010252A の観察対象となる文では、初頭に来る「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「それは、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(195)の 020103C の観察対象となる文では、末尾に来る「(1 巻)。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。020104A の観察対象となる文では、初頭に来る「えっ、」は、「意外・驚き」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「それは、」は、「指示表現」

という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(196)の 030009D の観察対象となる文では、末尾に来る「た。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。030010E の観察対象となる文では、初頭に来る「えっ、」は、「意外・驚き」という初頭形式で、「じゃ、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「それ」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」と「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - f 類」と設定する。

6.1.7. I - g 類

本節は、I - g 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(197) 030235D: 【ああ、言ってたね、(うん)、そろばんはいいと思うわ。】
030236E: 【実生活ぜったい役立つやん。】
【あれは、楽やった、】
【役立った、めちゃ。】

(198) 040014G: 【そうか、なんかね、広島で受けたいんよ。】
040015F: 【あ、広島か、だったら、夏休みのほうが、】
040016G: 【夏休みってさあ、たしか、二年生の夏休みがわからん。】
040017F: 【んん、ひま】

(199) 040377G: 【Wii U】
040378F: 【Wii U ね、ほしいんだよ。】
040379G: 【Wii U ね、なんかさあ、買っても接続できないけど、】
【ほんとに、いやで、いやで。】

(197)の 030235D の観察対象となる文では、末尾に来る「やん。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。030236E の観察対象となる文では、初頭に来る「あれは、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(198)の 040015F では、末尾形式が見られないので、末尾行動は捉えられない。040016G では、初頭に来る「夏休みってさあ、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。その直後の「たしか、」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

(199)の 040378F では、末尾に来る「んだ」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「よ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。040379G の観察対象となる文では、初頭に来る「Wii U ね、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」あるいは、後文の初頭行動「後続命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - g 類」と設定する。

6.1.8. II - a 類

本節は、II - a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(200) 030215D: 【ああ、好きなことさせるのが一番ぜ（うん)。】
【ぜったい、いやになる。】
030216E: 【えっ、習い事をしてたか？】
030217D: 【私、習字だけは、やってたよ。】
030218E: 【ああ、そうなんや。】

(201) 040169G: 【飛んちゃう。（{笑い}）私は、今週は、土日は、日曜日バイトあっただけで、】
【ずっと休みがあって、】

【何しようか？】
040170F: 【普通は土日家を一歩も出てねえ。】
040171G: 【いやいや、なんでなんで？】

(202) 040404F: 【カプセルか、どうしたかな？】
040405G: 【あれあれ、海のステージとかのやつでしょうか？】
040406F: 【あったかもしれん。】
040407G: 【あと、やってみろ。】

(200)の 030216E では、末尾に来る「か」「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。030217D では、初頭に来る「私、」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(201)の 040169G の観察対象となる文では、末尾に来る「よう」は、「命題に対する推量・伝聞など」という初頭形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後の「か」「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040170F では、初頭に来る「普通は」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

(202)の 040405G では、末尾に来る「でしょう」は、「命題に対する推量・伝聞など」という初頭形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後の「か」「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。030217D では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、後文の初頭行動「「後続命題の一部を焦点化する言語行動」あるいは、「後続命題に態度を表明する言語行動」ではなく、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」であると考えられる。

このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、後文の初頭に出現せずに、前文の末尾のみに出現する類型を、「II 類」と設定する。本節のパターンは、この II 類の中の 1 つとして、「II - a 類」と設定する。

6.1.9. III - a 類

本節は、III - a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(203) 050044H: 【なんか、いつも、プレミアムトークなんかって、】
【国会中継ですよね。】
050045I: 【ねえ、甲子園、今春の選抜ってね（うん）、】
【なんかなあ、ちゃんとやってほしいね、】
【今日ぐらい 2 時間やってもいいやんさあ、】

(204) 050319I: 【飲む前とかに聞いてた、】
【もう、ちょっと、こう冷静に、】
050320H: 【うん、うまく行ってなかったんですかね。】
050321I: 【ねえ、二次会と思ってたんかなあ、】
【でも、それは、二次会にいきませんかってなるよね。】

(205) 060175I: 【なんか、そうだったら//】
060176J: 【ちょっと、皆がね、気を付けば暮らしていけるかもしれませんよね。】
060177I: 【そうですよね、可能性は、ぜんぜんありますよね。】
060178 J: 【はい、そうですね、寒い時にはね、いっぱいきこんで、】

(203)の 050044H の観察対象となる文では、末尾に来る「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。050045I の観察対象となる文では、初頭に来る「ねえ、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「甲子園、」は「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(204)の 050320H では、末尾に来る「んです」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「かね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。050321I の観察対象となる文では、初頭に来る「ねえ、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

(205)の 060176J では、末尾に来る「かもしれません」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。060177I では、初頭に来る「そうですよね、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「可能性は、」は「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。その直後の「ぜんぜん」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」あるいは、後文の初頭行動「後続命題の一部を焦点化する言語行動」や「後続命題に態度を表明する言語行動」のではなく、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」であると考えられる。

このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、前文の末尾及び後文の初頭に出現する類型は、「III 類」と設定する。本節のパターンは、この III 類の中の 1 つとして、「III - a 類」と設定する。

6.1.10. III - b 類

本節は、III - b 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(206) 010130A: 【{笑い}1 人でボイコット?】
010131B: 【いえ、 だから、だから、女の子皆集まって飲みましょうみたいな会があるけど、(あー)】
【それ、私棄権なんだよ。(あー)】
【{笑い}ボイコットする。】

(207) 030089E: 【ほんと、今年、授業にひいひいしんどい分思いせんで、】
【済むよね。】
030090D: 【うん、ああ、 でも、勉強してるのかな。】
030091E: 【なになに？】

(208) 060109I: 【ちゃんとありましたし、(まあ、はい)】

【なんて、そんなに自分自身が困った印象はなかったんですけど(はい)、】

060110J: 【うん、そうですね、その意味じゃ、たしかに不自由はなかったですよね。】

【なかったですよね、({笑い}) なんか、今、今はいろいろのと心配種がありますから(うん)。】

【やっぱ原発のこともありますし、】

(206)の 010130A では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。010131B の観察対象となる文では、初頭に来る「いえ、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「だから、だから、」は「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(207)の 030089E の観察対象となる文では、末尾に来る「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。030090D では、初頭に来る「うん、」「ああ、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「でも、」は「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(208)の 060109I の観察対象となる文では、末尾に来る「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。060110J の観察対象となる文では、初頭に来る「なかったですよね、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「なんか、」は「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後に来る「今、今は」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答す

る言語行動」「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - b 類」と設定する。

6.1.11. III - c 類

本節は、III - c 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(209) 040090G: 【あ、そう、えっ、待って待って、】
【卒験ってやってないってこと?】
040091F: 【いや、 卒験は、やって卒業したけど（うん）、】
【そのあと、免許のなんか、センターみたいなところに行って、】
【勉強、学科受けて、】

(210) 040106G: 【あ、でも、いずれ、はやく、免許取ったあと、】
【ペーパになりそうよね。】
040107F: 【そう、 あれもね、今の時期さあ、取っても正直運転しねえから。】
040108 G: 【そう、それがこわくて、】

(211) 060206I: 【うんうん、なんか、これってどういう字だっけぇなんか、（うん）】
【ねえ、そうそう、あのう、携帯ばかり賢くなるでしょうね。】
060207J: 【そうですね、 ていうのは、携帯で、こう、何か書こうとしたら、】
【携帯に入力して、（うんうん）】
【それを見て手で書くといいますよね。】

(209)の 040090G の観察対象となる文では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040091F の観察対象となる文では、初頭に来る「いや、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「卒験は、」は「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(210)の 040106G の観察対象となる文では、末尾に来る「そう」は、「命題に対する推量・伝聞など」という初頭形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後の「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」と

いう末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040107F では、初頭に来る「そう、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「あれもね、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。その直後の「今の時期さあ、」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(211)の 060206I の観察対象となる文では、末尾に来る「でしょう」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後の「ね。」は、は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。060207J の観察対象となる文では、初頭に来る「そうですね、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「ていうのは、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」や「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」あるいは、後文の初頭行動「後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - c 類」と設定する。

6.1.12. III - d 類

本節は、III - d 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(212) 020185A: 【何？】

020186C: 【カレー、作れない？】

020187A: 【いや、 てか、 カレーをそんな、あんまり作ったことないというのもあるけど、】

020188C: 【カレーってあれじゃん、】

【カレーのパックに作り方書いてあるじゃないっすか？】

(213) 040021F: 【ああ、でも、合宿で取るんやったらさあ（うん）、】
【まあ、事故しやすいは事故しやすいけど。】
040022G: 【たしか？】
040023F: 【いや、　だって、まあ、　それは、そうだって、お母さんとこないだ話したけどさあ（うん）、】
【やっぱさあ、1時間毎日、1時間を（うん）、ん、なん、一ヶ月と、】

(214) 060126J: 【そうね、歴史的に見ればですね。（うん）】
【で、また、安倍さんはね、変なこと言ってるし、（{笑い}変なこと、ねえ）】
【やっぱ、原発も、あれは恐ろしいですよね。】
060127I: 【うん、ねえ、　なんか、　あんなことあっても、】
【なお稼動しようとしている原発はありますよね。】

(212)の 020186C では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。020187A では、初頭に来る「いや、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「てか」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。「カレーを」は「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。その直後の「そんな、あんまり」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

(213)の 040022G では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040023F の観察対象となる文では、初頭に来る「いや、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「だって」は、「接続表現」という初頭形式で、「まあ」は「言いよどみ」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。「それは、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(214)の 060126J の観察対象となる文では、末尾に来る「よね。」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。060127I の観察対象となる文では、初頭に来る「うん、」「ねえ」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「なんか、」は「言いよどみ」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。「あんな（こと）」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」や「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、後文の初頭行動「後続命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - d 類」と設定する。

6.1.13. III - e 類

本節は、III - e 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(215) 010010B: 【うん、山大でやってた。】
010011A: 【それは何人ぐらいで?】
010012B: 【えとね、40 人ぐらい。(へええ)】
【48 人だった。】

(216) 020063A: 【まあ、うん、そんな私もそんな知ってないよ。】
020064C: 【えっ、何屋さん?】
020065A: 【だから、いろんな店舗を（ああ）突っ込んでる。】
020066 C: 【あのう、あのう、ショッピングモールじゃないけど、】

(217) 040573F: 【うん、ヘイホー、ヘイホーあのやつ。】
040574G: 【{笑い}そうそう、ヘイホーさあ、めっちゃ似とる振動のやつっておらんかった?】
040575F: 【ていうかね、全員なんだかんだいって震えるから。】
【これヘイホーじゃないわっと思って、】

(215)の 010011A では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。010012B の観察対象となる文では、初頭に来る「えどね、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(216)の 020064C では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。020065A では、初頭に来る「だから、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(217)の 040574G では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040575F の観察対象となる文では、初頭に来る「ていうかね、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - e 類」と設定する。

6.1.14. III - f 類

本節は、III - f 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(218) 020067A: 【そうそうそうそう、そんな感じのところに行ってきましたね。】
020068C: 【そんなところもあるんですか？】
020069A: 【そんなの、一応あるんですよ。】
020070C: 【いずみとかフジグランドしか知らないけど。】

(219) 040288F: 【そんなもんだっけぇ、】
【忘れしもうた。】
040289G: 【あ、『ホロウバスティオン』かな？】
040290F: 【『ホロウバスティオン』は違う。】

(220) 040535F: 【バレー、】

040536G: 【ビーチバレー、あった?】

040537F: 【それは、覚えてねえやん。】

040538G: 【それは、一番かな、4(よん)か?】

(218)の 020068C では、末尾に来る「んです」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「か」「?」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。020069A では、初頭に来る「そんなの、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。その直後の「一応」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

(219)の 040289G では、末尾に来る「かな」「?」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040290F では、初頭に来る「『ホロウバスティオン』は」は「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(220)の 040536G では、末尾に来る「?」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。040537F では、初頭に来る「それは、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「終助詞及びイントネーションによる共有」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、後文の初頭行動「後続命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - f 類」と設定する。

6.1.15. III - g 類

本節は、III - g 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(221) 010320A: 【ミサツの研究日記、お酒なあ。】

010321B: 【逆に、ナッちゃん弱くないけど。】

010322A: 【ええ、怖そうー、】

【なんか、どうなるかね。】

(222) 040150F: 【もう、女子っていうやつも、わあっみたいな（{笑い}）。】

【「私ちょっとね、キャラじゃないね」っていうの感じだから（うん）、】

【ちょっとね、で、まあ、今は、ゆったりとしたお休みを過ごすことに、】

【てか、出来ているんで、】

【それはいいんですけれども、】

040151G: 【うん、よかったね、】

【はやく卒業できたけどね、】

(223) 050046H: 【{笑い}チャンネルは 2 つあるから、】

050047I: 【{笑い}そうそう、たしかに、E テレで全部今日やろみたいな（うん）、】

050048H: 【それ、用意してくれたらいい。】

050049 I: 【うん、ほんとに、ね、なんか、あのう、今日ぐらいちゃんと 2 時間見たかったなと思ったね。】

(221)の 010321B では、末尾に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。010322A の観察対象となる文では、初頭に来る「ええ、」は「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

(222)の 040150F の観察対象となる文では、末尾に来る「んです」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「けれども、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。040151G の観察対象となる文では、初頭に来る「うん、」は「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。

(223)の 050046H では、末尾に来る「から、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。050047I では、初頭に来る「{笑い}」は「笑い」という初頭形式で、「そうそう」「たしかに、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答す

る言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - g 類」と設定する。

6.1.16. III - h 類

本節は、III - h 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(224) 030039D: 【なんか、すごい、こう、ちょっと、ハルちゃんが困ってる感じあったっけぇ（ああ）。】

030040E: 【なんかあったかなと思って。】
【ああ、　なんか、金曜日に（うん）、中野研が出る日あるじゃん、（うん）】
【で、その時に、あのう、前の室長（うん）、前の前の室長は中野研じゃん。（うん）】

(225) 030081D: 【うん、そうだよね、小学校絶対皆分かるよね。（うん）】

030082E: 【学校一緒にしても。】
【うん、　でも、　ほんとう、ぜったい無理。】

030083D: 【しんどいな。】

(224)の 030039D の観察対象となる文では、末尾に来る「かな」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに続く「と思（って）」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「（思）って」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。030040E の観察対象となる文では、初頭に来る「ああ、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(225)の 030081D の観察対象となる文では、末尾に来る「ても、」は、「接続表現」とい

う末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。030082E では、初頭に来る「うん、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後に来る「ほんとう、ぜったい」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」及び「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」と後文の初頭行動「後続命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - h 類」と設定する。

6.1.17. III - i 類

本節は、III - i 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(226) 030102D: 【ねえ、楽しいは思うけど。】
030103E: 【うん、　それを、なんか職業にするってやっぱ違うなあと思った。】

(227) 030101E: 【そう、それ、いまだに、なんか、やっぱ、迷うもん、どうしようって。】
030308D: 【いえいえ、春休みいっぱいあるなあと思って。】
030309E: 【たしかに、　春休みは一番長いじゃない？】
030103E: 【うん、それを、なんか職業にするってやっぱ違うなあと思った。】

(228) 050032I: 【うん、てか、マイクが非常に軽いと思って。】
050033H: 【{笑い}　マイクが、なんかへんですよね。】
050034I: 【{笑い}どう、なんかね、なんか、何っつったけぇなあ、】
【なんか、マッサンが、なんか、言ったのに(うん)、】

(226)の 030102D では、末尾に来る「思う」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題

を継続する言語行動」である。030103E では、初頭に来る「うん、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「それを、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(227)の 030308D では、末尾に来る「なあ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに続く「と思（って）」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「（思）って」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。030309E では、初頭に来る「たしかに、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「春休みは」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(228)の 050032I では、末尾に来る「と思（って）」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。「（思）って」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。050033H では、初頭に来る「{笑い}」は「わらい」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「マイクが、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」及び「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - i 類」と設定する。

6.1.18. III - j 類

本節は、III - j 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(229) 030206E:　(前略)

【で、たぶん私を無意識で、】

【まあ、見てはいるんじゃないっていうのは、】

【すごい、なんか、（うん）親とか、おばあちゃんとかからめちゃ言われて。】

030207D: 【うん、　えっ、でも、　それってさあ、その甥っ子？】

030208E: 【姪っ子。】

(230) 040231G: 【いずれ終わったら。】

040232F: 【いやいや、PSP は、実家には一応、妹のがあるんで。】

040233G: 【うん、　やっ、　PSP はほんと貸してあげるよ。】

040234F: 【いえ、それは、ほんとに申し訳ない。{笑い}】

(231) 050187H: 【{笑い}、もうさして来るんですが、】

【風が強いですけど。】

050188I: 【{笑い}、　まあ、　それでやられる。】

050189H: 【{笑い}、みたいな】

(229)の 030206E の観察対象となる文では、末尾に来る「（言われ）て」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。030207D では、初頭に来る「うん、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「えっ」は「意外・驚き」という初頭形式で、「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後の「それってさあ、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(230)の 040232F では、末尾に来る「んで」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。040233G では、初頭に来る「うん、」は「あいづち」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「やっ」は「意外・驚き」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後の「PSP は」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。それに続く「ほんと」は、「副詞修飾」という初頭形式で、それに相

当する初頭行動は、「後続命題に態度を表明する言語行動」である。

(231)の 050187H の観察対象となる文では、末尾に来る「けど」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。050188I では、初頭に来る「{笑い}、」は「笑い」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それに続く「まあ、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後の「それで」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、後文の初頭行動「後続命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - j 類」と設定する。

6.1.19. III - k 類

本節は、III - k 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(232) 010066B: 【あの、店の人、全部把握してるだろ、】
【すげぇなあ。】
010067A: 【すごいよね、確かに、肌がお綺麗だったけど。】
010068B: 【やっぱり、化粧品の人、あれあれやったら、】
【まずいじゃない？】

(233) 010102B: 【でかい、でかい、たしかね、先輩たちにいわく、】
【山大で三番目でかいじゃないかとゆったけど、】
010103A: 【えっ、一番と二番は何？】
010107B: 【知らない、知らない。】

(234) 040046G: 【そうなん、やっ、なんか、勘違いしよったかなあ。】
040047F: 【1 週間だし、】
040048G: 【なんか、でも、長期合宿もあるでしょう？】

040049F: 【長期合宿もあるけど、】

(232)の 010067A では、末尾に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。010068B の観察対象となる文では、初頭に来る「やっぱり、」は、「接続表現」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(233)の 010102B の観察対象となる文では、末尾に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。010103A では、初頭に来る「えっ」は「意外・驚き」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後の「一番と二番は」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(234)の 040047F では、末尾に来る「し」は「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。040048G では、初頭に来る「なんか」は「言いよどみ」で、それに続く「でも、」は「接続表現」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「長期合宿も」は「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。なお、後文の初頭行動「後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - k 類」と設定する。

6.1.20. III - l 類

本節は、III - l 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(235) 020212C: 【ああ、そんなたいしたもんつくってへん、魚や焼いたりとか、({笑い}) 】
【なんか、この前は、何もしらないけど、】

	【牛丼つくってて、】
020213A:	【えっ、　牛丼は作ったの？】

020214C: 【うん】

(235)の 020212C の観察対象となる文では、末尾に来る「(つく）ってて、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。020213A では、初頭に来る「えっ、」は「意外・驚き」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。その直後の「牛丼は」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

このパターンは、収集したデータに１つしかないが、パターンの１つとして出現した。挙げたデータを見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - l 類」と設定する。

6.1.21. III - m 類

本節は、III - m 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(236) 020220C: 【でも、この前さあ、（うん）計量カップがさあ、（あ）ちゃんと計ったから、】
【味薄くなって、】
【しようがないけぇ、({笑い})】
【あの、材料、あの、調味足して、（うん)】
【煮込んでちゃんとした味になったんけど。】
020221A: 【計量カップ、買ったんか？】

(237) 030070E: 【取るんやったら、】
【たぶん、皆いっしょ。（うん)】
【まあ、講習違うやつあるけど、】
【皆いっしょかなと思うけど。】
030071D: 【皆いっしょ、がいいね。】
【だってさあ、（うん）国研でもさあ、実習先で（うん）ぜったい喧嘩するやんか。】

(238) 040574G: 【{笑い}そうそう、ヘイホーさあ、めっちゃ似っとる振動のやつっておらんかった？】

040575F: 【ていうかね、全員なんだかんだいって震えるから。】

040576G: 【震えるなんか、強い震えるやつだったら、】

【これヘイホーじゃないわっと思って、】

(236)の 020220C の観察対象となる文では、「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。020221A では、初頭に来る「計量カップ、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(237)の 030070E の観察対象となる文では、末尾に来る「なあ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに続く「と思う」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。030071D の観察対象となる文では、初頭に来る「皆いっしょ、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(238)の 040575F では、末尾に来る「なあ」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに続く「と思う」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。その直後に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。040576G の観察対象となる文では、初頭に来る「皆いっしょ、」は、「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - m 類」と設定する。

6.2. 話し手と聞き手とが交替しない場合

本節では、話し手と聞き手とが交替せず、1 人が一度発話した複数の文の場合を観察する。前文の末尾行動と後文の初頭行動の下分類した言語行動においては、つながりに関わる言語行動がどのように組み合わせるかについて考察する。その組み合わせのパターンをⅠ - a 類、Ⅰ - b 類 II - a 類、II - b 類…III - a 類、III - b 類、…III - f 類のように分けて記述する。なお、これらの分類に現れる I，II，III または a,b,c,…f という記号の意味は、それぞれのパターンを記述しながら説明する。また、観察対象となる文は、文の全体を大きな□で囲み、観察対象となる言語形式は小さな□で囲む。

6.2.1. Ⅰ - a 類

本節は、Ⅰ - a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(239) 010161B: 【でも、そういうのは、居酒屋みたいなお店だから（うん）、】
【そういう水もあるからと思って、】
【スルーしたいよ、】
【そしたら、後から〈マサヤ〉さんが「それ、あのう、お酒じゃ大丈夫」と言われて、】

(240) 030071D: 【皆いっしょ、がいいね。】
【だってさあ、（うん）国研でもさあ、実習先で（うん）ぜったい喧嘩するやんか。】
【なのに、他人やったら、】

(241) 050139I: 【なんか、マスクしてたし、】
【風邪って聞いても】
【そうじゃないし（うん）、】
【でも、花粉の季節でもないしみたい（うん）、】
【あのう、アレルギー持ち、やったっけぇという、】

(239)の 010161B の観察対象となる前文では、末尾に来る「たい」「よ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そしたら、」は「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続

する言語行動」である。

(240)の 030071D の観察対象となる前文では、末尾に来る「ね。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「だってさあ、」は「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「国研でもさあ、」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(241)の 050139I の観察対象となる前文では、末尾に来る「たい、」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「あのう、」は「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」、後文の初頭行動「後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。

このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、前文の末尾に出現せずに、後文の初頭のみに出現する類型を、「I 類」と設定する。本節のパターンは、この I 類の中の 1 つとして、「I - a 類」と設定する。

6.2.2. I - b 類

本節は、I - b 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(242) 030154E: 【なんか、家におっても、】
【たぶんね、ボーとするしかないけん（そうそう）。】
【なんか、むっ、無気力になりそう（うん）。】
【それこそ、なんのために、今（うん）、生活してるんとか（そうそう）、】

(243) 030197D: 【なんか、ミサトが言ってたよ（そうなん）、】
【ミサトの場合は、逆だけど（うんうん）、】
【あのう、妹ちゃんが（うん）、学校で（うん）、あのう、先生に（うん）お姉ちゃん、ミサトのほうは、よくできたのに、】

【なんでお前はできないんだって言われて（ああ、言われる）、】

(244) 030206E: 【うん、なんか、いま、私いとこのチビから、】
【来年小学校あがるんやけど（うん）、】
【なんか、比べてるんだって、】
【ていうの、実家帰る時、聞いて（うん）、】

(242)の 030154E の観察対象となる前文では、末尾に来る「そう。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「それこそ、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(243)の 030197D の観察対象となる前文では、末尾に来る「よ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「ミサト（の場合）は、」は「同語重複」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(244)の 030206E の観察対象となる前文では、末尾に来る「んだ、」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「って、」は「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「ていうの、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」ではなく、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - b 類」と設定する。

6.2.3. I - c 類

本節は、I - c 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(245) 030053D: 【はやく、早く買って、】

【早く国研で回し。】

030054E: 【やあ、ちょっと、ほんとうにかわいそうやなあ、】
【逆、 あれでいいんかもしれんけど（うん）、】

【うれしくない、（ああ）】

(246) 030264D: 【{笑い}、なんか、そう、小 2 ぐらいで、（うん）あのう、島に飛ばされたんよ、】

【ママと来て（うん）】

【なんか、海辺というか、あのうさあ（うん）、海岸で遊びよって、浜がないところね（うんうん）。】

【なんか、漁港みたいなところだ。】
【そう、 そこで、遊びよったら、】

【漁師の知らん、まったく知らんおじちゃんに（うん）、】

(247) 050320H: 【うん、うまく行ってなかったんですかね。】

050321I: 【ねえ、二次会と思ってたんかなあ、】
【でも、 それは、二次会にいきませんかってなるよね。】

050322H: 【うん】

(245)の 030054E の観察対象となる前文では、末尾に来る「やなあ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「逆、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「あれで、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(246)の 030264D の観察対象となる前文では、末尾に来る「だ。」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「そこで、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(247)の 050321I の観察対象となる前文では、末尾に来る「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、「かなあ、」は「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それ

らに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。後文では、初頭に来る「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「それは、」は「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」と「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、I 類の中の 1 つとして、「I - c 類」と設定する。

6.2.4. II - a 類

本節は、II - a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(248) 010157B: 【いや、その当時に自分に感謝したいのは、】
【ちょっことだけ、ちょっことずつ飲もうとするからね。】
010158A: 【ああ、よかったね。{笑い}】
010159B: 【〈ちょくすい〉ちょっとなんか、すっぱいな、レモンぽいな、】

(249) 060060J: 【だから、（うんうん）私たちと同じ人が、どんな生活をして来られたかなっていうのは（ああ）、】
【興味があります。】
060061I: 【そうなんですね、そこのところに。】

(250) 060288I: 【はい、例えば、今自分が用事があって、】
【何かしている時に、（はい、はい）メッセージが来たり、（はい）】
【例えば、LINE だと、】
【その記録になったけど、】
【返事をしないとか、】
【いろいろあるわけですよね。】

(248)の 010157B の観察対象となる前文では、末尾に来る「たい」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明す

る言語行動」である。それに続く「のは、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

(249)の 060060J の観察対象となる前文では、末尾に来る「かな」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「っていうのは、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

(250)の 060288I の観察対象となる前文では、末尾に来る「とか、」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、後文の初頭行動「既出命題を焦点化する言語行動」であると考えられる。このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、後文の初頭に出現せずに、前文の末尾のみに出現する類型は、「II 類」と設定する。本節のパターンは、この II 類の中の 1 つとして、「II - a 類」と設定する。

6.2.5. II - b 類

本節は、II - b 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(251) 010051A: 【だめだめ、都会とか絶対行けない感じだから(うん)、】
【人が怖い。】
010052B: 【人怖い。】
010053A: 【目が、爛々としてたから。】

(252) 040063F: 【で、長期で一ヶ月ぐらいかいけるんじゃったら、】
【ちまちま自分の空いたスケジュールで行ったほうがええと思うよ。】
040064G: 【うん、そうかそうか、でも、山口か、車校。】
040065F: 【まあ、車校、山口きついかもしれない。】

(253) 050137I: 【あああ、そうだっけぇ、けっこうつらい時あったよね。】
050138H: 【うん】

050139I: 【なんか、マスクしてたし、】
【風邪って聞いても】
【そうじゃないし（うん）、】

(251)の 010051A の観察対象となる前文では、末尾に来る「感じだ」は、「話し手自身の感情・思考」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「から、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

(252)の 040063F の観察対象となる前文では、末尾に来る「んじゃ」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「ったら、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭形式が見られないので、初頭行動は捉えられない。

(253)の 050139I の観察対象となる前文では、末尾に来る「し、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「風邪って」は、「「は」「って」などによる焦点化」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「後続命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、後文の初頭行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」と後文の初頭行動「後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、この II 類の中の 1 つとして、「II - b 類」と設定する。

6.2.6. III - a 類

本節は、III - a 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(254) 050097I: 【ああ、４月１日とか、２日とか、普通の休みでもいいですけど、】
【なんか、移動するのはそんなだけお手数（うん）、】
【私なんか、ちょっと早めがいいって、】
050098H: 【うん、なんで？】

(255) 060090J: 【なんか、（ええ）それから、右肩上がりでしたからね（うん）。】
【なんか、いい時代生きてきたなあと思います、ある意味で。】
060091I: 【ああ、そう思われれば、】
【すごいいいことじゃないですか？】

(256) 060302I: 【そのう、96 年 97 年から携帯を持ち出したんで、】
【当時、けっこう、まだ出始めの（そうか）。】
(中略)
【今、何件ですか、200 件とか、もっとできるのかな、】
【はい、（あ）そんなできる、できるわけなんですけど、】
【だから、50 件で、（はい）50 件いっぱいなっちゃうと（はい）、】

(254)の 050097I の観察対象となる前文では、末尾に来る「です」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(255)の 060090J の観察対象となる前文では、末尾に来る「た」は、「命題に対する推量・伝聞など」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「からね、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(256)の 060302I の観察対象となる前文では、末尾に来る「わけ」「なんです」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「だから、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度

を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。

このような類型、即ち、前後文のつながりに関わる言語行動が、前文の末尾及び後文の初頭の両方に出現する類型を、「III 類」と設定する。本節のパターンは、この III 類の中の 1 つとして、「III - a 類」と設定する。

6.2.7. III - b 類

本節は、III - b 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(257) 010132A: 【ミサツは、お酒はもう、飲ま、飲めない？】

010133B: 【んん、わかーない、ただ、アルコールパッチテストー、ハヤシさんと一緒に（うん）やったんけど、】

【その時は、あのう、反応はなかった。】

(258) 030121E: 【自分の子みたいにかわいがれるけどね（そう）。】

【そうなんよね。】

030122D: 【でも、そうなったらさあ、】

【タックンとは一生結婚できないから、】

【そんな、先のことなん、まだ考えきれないけど、】

(259) 050276H: 【往復 12,000 円、ねえ。】

050277I: 【大分駅に着いたら、】

【そこから、なんかね、何と読むやろう、】

【豊という字に、ひ、肥後の肥、何本線？】

(257)の 010133B の観察対象となる前文では、末尾に来る「ん」は、「形式名詞述語」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「既出命題に態度を表明する言語行動」である。それに続く「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「その時は、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(258)の 030122D の観察対象となる前文では、末尾に来る「から、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そんな、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当

する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(259)の 050277I の観察対象となる前文では、末尾に来る「たら、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そこから、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。なお、前文の末尾行動「既出命題に態度を表明する言語行動」は、前後文のつながりを示さない。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - b 類」と設定する。

6.2.8. III - c 類

本節は、III - c 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(260) 050279I: 【{笑い}、何とか本線に乗って（うん）、】
【で、そこから、三駅 13 分で】
【で、なんか、大学駅前ていう駅があるらしい（うん）、】
【そこから、歩けるから、】

(261) 060306I: 【いや、私は山大じゃないです。】
060307J: 【あ、そうですか（はい）、あのう、共通教育棟から、こう、下を見てると、】
【その頃こう、携帯を持ち始めた人がボツボツおりまして（ああ）、】
【で、その人たちはね、腕時計を持ってないと言われて（あ、そうですね）、】
【それはね、一緒に入った、あのう、社会人の男の人は言われたこと（ああ）があるんですよ。】

(262) 060302I: （前略）
【もっとも使わないだろうなあというを、】
【消さないといけないんですよ。（{笑い}）】

【で、そんな時代があったので、】
【はい、 そこから、どんどん進化して、（はい）】
【大学生の終わりぐらいには、同じ、その、（はい）ソフトバンク同士だったら、】

(260)の 050279I の観察対象となる前文では、末尾に来る「（乗）って、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「で、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「そこから、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(261)の 060307J の観察対象となる前文では、末尾に来る「（おりまし）て、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「で、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「その人たちはね、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(262)の 060302I の観察対象となる前文では、末尾に来る「ので、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「はい、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「そこから、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「発話あるいは話題を継続する言語行動」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - c 類」と設定する。

6.2.9. III - d 類

本節は、III - d 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(263) 030041D: 【うん、ああ、たしかになあと思って、（うん）】

(中略)

【もしくは、流しがどっちか（うん）、いいと思うみたいなを（うん）、】
【あのう、ショウタロウが教えに来たね、昨日（うん）。】
【たしかになあと思う。】

(264) 050348I: 【なんか、いっせいに伝える機会があったらいいと思う、】
【カンパの時とかに（うん）、その、SC のこと伝えるみたいな感じで（うん）、】
【学会がどうだったとか、】
【あのう、係りになってる、】
【だから、中心とか（うん）、三大学とか、瀬戸内とか、】

(265) 060302I: 【そのう、96 年 97 年から携帯を持ち出したんで、】
【今度はカラーになって、（はああ）】
【着信音が最初から単音だったんですけど（はい）、】
【それからも、複数音のメロディになったりとか（はい）、】
【そして、なんか、どんどん発展していきましたよね。】

(263)の 030041D の観察対象となる前文では、末尾に来る「みたいなを、」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「あのう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(264)の 050348I の観察対象となる前文では、末尾に来る「とか、」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「あのう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

(265)の 060302I の観察対象となる前文では、末尾に来る「とか、」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そして、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに続く「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それらに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題を焦点化する言語行動」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - d 類」と設定する。

6.2.10. III - e 類

本節は、III - e 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(266) 050131I: 【たぶん、先生不在でっていうはね（うん）、】
【そんな気がするから、】
【そうね。】
050132H: 【研究室は、やっぱり、エアコンがきれいではないですよね。】

(267) 060088J: 【皆と同じ生き方です。（ええ）】
(中略)
【あのう、定時制高校に行くという（ええ）、】
【そういう行きかたもあったんですよね。】
060089I: 【ああ、なるほどね、それそうね、】

(268) 060101I: 【そうですか、あのう（ああ）、あれですよね、あのう、フォークソングなんかも間で流行りましたでしょう？】
060102J: 【はい。】
060103I: 【だから、自分たちの表現したいものを、】
【そういうもので表現するということもあって（はい）、】
【いま、あのう、まあ、フォークソングとか聴くと、あんまり懐かしいなあ、】

(266)の 050131I の観察対象となる前文では、末尾に来る「っていうはね、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そんな（気）」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(267)の 060088J の観察対象となる前文では、末尾に来る「という、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そういう行きかたも」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

(268)の 060103I の観察対象となる前文では、末尾に来る「ものを、」は、「前述の事項を例示として扱う表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「そういうもので」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

以上挙げたデータから見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題を焦点化する言語行動」と後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - e 類」と設定する。

6.2.11. III - f 類

本節は、III - f 類のパターンについて記述する。次のデータが挙げられる。

(269) 040322F:【〈いかんせん〉、そっちをね、優先してしまうのは、いけん。】
040323G:【『スマブラ』ね、分かる、それ、】
【でも、『スマブラ』さあ、あのう、私がやったことあるのは（うん）、】
【あのう、あれは、ゲームキューブ時代のやつ。】

(269)の 040323G の観察対象となる前文では、末尾に来る「のは、」は、「前述の事項を焦点化する表現」という末尾形式で、それらに相当する末尾行動は、「既出命題を焦点化する言語行動」である。後文では、初頭に来る「あのう、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それに続く「あれは、」は、「指示表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」である。

このパターンは、収集したデータに１つしかないが、パターンの１つとして出現した。挙げたデータを見ると、前後文のつながりを示すのは、前文の末尾行動「既出命題を焦点化する言語行動」と、後文の初頭行動「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続

する言語行動」「直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」であると考えられる。本節のパターンは、III 類の中の 1 つとして、「III - e 類」と設定する。

6.3.　後文の初頭行動と前文の末尾行動との関係

6.1. と 6.2.では、話し手と聞き手とが交替する場合または交替しない場合を分けて、前文の末尾行動と後文の初頭行動とのつながりに関わる言語行動の組み合わせのパターンを分析した。それらのパターンを全体的に観察するため、本節では、それらのパターンを表にまとめる。また、まとめた表に基づいて、後文の初頭行動と前文の末尾行動との関係を考察する。さらに、各パターンの間に類似したものが見られることから、それぞれのデータをもとに、それらの類似性を考察してみる。

6.3.1.　各パターンのまとめ

本節では、6.1.と 6.2.で記述したパターンをまとめ、［表 3］と［表 4］のように示す。また、［表 3］と［表 4］に基づいて、後文の初頭行動と前文の末尾行動との関係を考察する。

まず、次に［表 3］を挙げる。

［表 3］話し手と聞き手とが交替する場合

交替する場合	前文の末尾行動			後文の初頭行動		
パターン	③発話あるいは話題を継続する言語行動	④既出命題を焦点化する言語行動	⑤発話あるいは話題を共有する言語行動	①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動	②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動	③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動
I - a	×	×	×	○	×	×
I - b	×	×	×	○	○	×
I - c	×	×	×	○	×	○
I - d	×	×	×	○	○	○
I - e	×	×	×	×	○	×
I - f	×	×	×	×	○	○
I - g	×	×	×	×	×	○
II - a	×	×	○	×	×	×
III - a	×	×	○	○	×	×
III - b	×	×	○	○	○	×
III - c	×	×	○	○	×	○
III - d	×	×	○	○	○	○
III - e	×	×	○	×	○	×
III - f	×	×	○	×	×	○
III - g	○	×	×	○	×	×
III - h	○	×	×	○	○	×
III - i	○	×	×	○	×	○
III - j	○	×	×	○	○	○
III - k	○	×	×	×	○	×
III - l	○	×	×	×	○	○
III - m	○	×	×	×	×	○

［表 3］に示すように、話し手と聞き手とが交替する場合では、まず、前後文のつながりに関わる言語行動の出現する類型を大きく 3 つに分ける。

(270)　I 類　前文の末尾行動が出現せず、後文の初頭行動が出現する。
II 類　前文の末尾行動が出現するが、後文の初頭行動が出現しない。
III 類　前文の末尾行動と後文の初頭行動が、両方出現する。

3 種類の中で、I 類は、I - a ～I - g のように 7 つのパターンに下位分類できる。II 類には、II - a のように 1 つのパターンしかない。III 類は、III - a～III - m のように 13 のパターンに下位分類できる。従って、合わせて 21 のパターンがある。
また、前後文のつながりに関わる言語行動には、末尾行動の「④既出命題を焦点化する言語行動」が出現しない。それは、前文の末尾行動の「④既出命題を焦点化する言語行動」が、「③発話あるいは話題を継続する言語行動」と「⑤発話あるいは話題を共有する言語行動」ほど、後文の初頭行動とつながりにくいからであると考えられる。言い換えれば、後文の発話者である聞き手は、前文の発話者である話し手が「④既出命題を焦点化する言語行動」を行うときに、割り込みにくいと思われる。

さらに、前文の末尾行動が出現する場合（II 類，III 類）は、1 種類の言語行動だけが出現する。その際に、後文の初頭行動は全ての組み合わせで出現する。一方、前文の末尾行動が出現しない場合（I 類）は、後文の初頭行動が全ての組み合わせで出現する。

ところが、表に示していない前文の末尾行動「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」は、既出命題に関わる言語行動である。一方、表にも示していない後文の初頭行動「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、後続命題に関わる言語行動である。

次に、［表 4］を挙げる。

［表 4］話し手と聞き手とが交替しない場合

交替しない場合	前文の末尾行動			後文の初頭行動		
パターン	③発話あるいは話題を継続する言語行動	④既出命題を例示する言語行動	⑤発話あるいは話題を共有する言語行動	①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動	②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動	③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動
I - a	×	×	×	×	○	×
I - b	×	×	×	×	×	○
I - c	×	×	×	×	○	○
II - a	×	○	×	×	×	×
II - b	○	×	×	×	×	×
III - a	○	×	×	×	○	×
III - b	○	×	×	×	×	○
III - c	○	×	×	×	○	○
III - d	×	○	×	×	○	×
III - e	×	○	×	×	×	○
III - f	×	○	×	×	○	○

［表 4］に示すように、話し手と聞き手とが交替しない場合では、まず、前後文のつながりに関わる言語行動の出現する類型を大きく３つに分ける。

(271)　I 類　前文の末尾行動が出現せず、後文の初頭行動が出現する。
　　II 類　前文の末尾行動が出現するが、後文の初頭行動が出現しない。
　　III 類　前文の末尾行動と後文の初頭行動が、両方出現する。

3 類の中で、I 類は、I - a ～I - c のように 3 つのパターンを下位分類できる。II 類は、II - a,II - b のように 2 つのパターンを下位分類できる。III 類は、III - a～III - f のように 6 つのパターンを下位分類できる。従って、合わせて 11 のパターンがある。

また、前後文のつながりに関わる言語行動には、末尾行動の「⑤発話あるいは話題を共有する言語行動」と初頭行動の「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」が出現

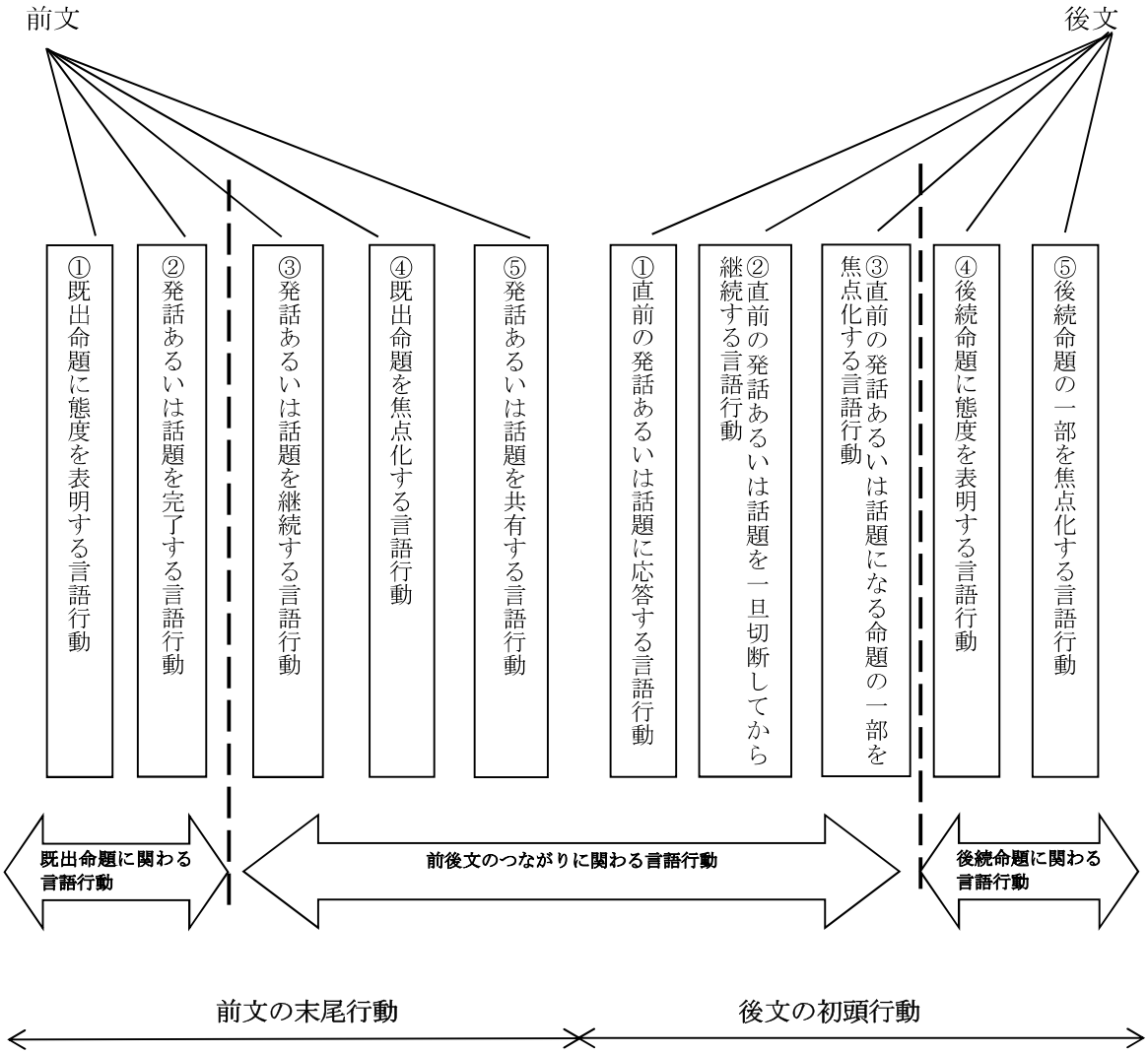
しない。それは、聞き手が参与していないからであると考えられる。

さらに、前文の末尾行動が出現する場合（II 類，III 類）は、1 種類の言語行動だけが出現する。その際に、後文の初頭行動は、「⑤発話あるいは話題を共有する言語行動」以外に、全ての組み合わせで出現する。一方、前文の末尾行動が出現しない場合（I 類）は、後文の初頭行動は、「⑤発話あるいは話題を共有する言語行動」以外の、全ての組み合わせで出現する。

ところが、表に示さない前文の末尾行動「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」は、既出命題に関わる言語行動である。一方、表にも示さない後文の初頭行動「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、後続命題に関わる言語行動である。

以上、［表 3］と［表 4］をもとに、後文の初頭行動と前文の末尾行動との関係を考察した。基本的に、話し手と聞き手とが交替する場合あるいは交替しない場合のいずれにおいても、2 つの文がつながる際は、前後文のつながりに関わる言語行動が出現する。また、前文の末尾行動には、つながりに関わる言語行動が既出命題に関わる言語行動の後ろに出現する。一方、後文の末尾行動には、つながりに関わる言語行動が後続命題に関わる言語行動の前に出現する。これらの関係を図示すれば、下のようになる。

［図 15］前文の末尾行動と後文の初頭行動の関係



［図 15］から分かるように、まず前文の末尾行動には、「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」「③発話あるいは話題を継続する言語行動」「④既出命題を焦点化する言語行動」「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」が現れる。このうち、①，②は既出命題に関わる言語行動であり、③，④，⑤は前後文のつながりに関わる言語行動である。一方、後文の初頭行動には、「①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」が現れる。このうち、①，②，③は前後文のつながりに関わる言語行動である。また、④，⑤は後続命題に関わる言

語行動である。

［図 15］に示したのは、2 つの文がつながるとき、初頭行動及び末尾行動はどのように構成されるかということである。ここでは、前後文のつながりに関わる言語行動を中心として、前文の既出命題に関わる言語行動あるいは後文の継続命題に関わる言語行動が、それぞれ相対的に外側に位置している。つまり、2 つの文がつながる際に、前後文のつながりに関わる言語行動を中心として、前文の末尾行動の下位分類した言語行動と後文の初頭行動の下位分類した言語行動とは、鏡像関係にあるといえるだろう。

6.3.2. 類似するパターンについて

6.3.1.でまとめた［表 3］と［表 4］に示された I 類と III 類または、II 類と III 類の間に類似したものが見られる。例えば、［表 3］に太い囲み線で囲んだ I - a～I - g、と III - a～III - f とは、後文の初頭行動がほぼ同様に、全ての組み合わせで出現する。ただ、異なるところは、I - a～I - g には、前文の初頭行動が出現せず、III - a～III - f には、「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」しか出現しないのである。また、II - a と III - a～III - f と、前文の初頭行動が同様に、「⑤発話或いは話題を共有する言語行動」が出現するが、II - a には、後文の初頭行動が出現せず、III - a～III - f には、後文の初頭行動が出現する。

一方、［表 4］にも、太い線で囲んだ I - a～I - c、と II - a～II - c との間、また、II - a と III - d～III - f との間などは、類似するところが見られる。

以上のように、話し手と聞き手とが交替する場合あるいは交替しない場合においては、いずれも I 類と III 類または、II 類と III 類の間に類似したものが見られることから、それぞれのデータをもとに、それらの相違点を観察してみる。

6.3.2.1. I 類と III 類との比較

本節では、I 類と III 類のパターンを比較する。まず、話し手と聞き手とが交替する場合の I - a と III - g を取り上げて観察する。次のデータが挙げられる。

(272) 030181D: 【{笑い}そうやね、とりあえず勉強しよう（{笑い}）。】

030182E: 【そして、早く結婚したい。】
【ああ、いくつで結婚したい？】
【いくつまで結婚したい？】

(273) 050203H: 【{笑い}日傘に意識がありすぎたんです。】

050204I: 【そうそう、日傘こそ私の一部になったけどね（{笑い}）、】

【あれ、ちょっとね、自分でやばいなあと思ったけどね（うん）、】
【ちょっと、限界感じるなあと。】

(274) 040471F: 【その中に、マリオたちが、5 秒間の間に、どれか選んで入って、】
【クッパさまが来て、】
040472G: 【ああ、あったかも。】

(275) 060181I: 【そのう、あのう、ちょっと、昭和とか以前の話、（はい）】
【最後の江戸時代の人とか、（はい）朝寒いから、】
060182J: 【はい、体を動かしてね。】
060183I: 【そう、動かせば寒くなくなるというのがあったんだと聞いて、（ああ）】
【あ、なんか、すごく理にかなっているなあと思いますね。】

(272), (273)は、I - a のパターンのデータである。(272)の 030182E の観察対象となる文では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。2 つの文においては、これは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(273)も同様に、050204I の初頭に来る「そうそう、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それも前後文のつながりに関わる言語行動である。

(274), (275)は、III - g のパターンのデータである。(274)の 040471F の観察対象となる文では、末尾に来る「て、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。040472G では、初頭に来る「ああ、」は、「あいづち」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。2 つの文においては、それらは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(275)も同様に、060181I の観察対象となる文の末尾に来る「から、」に、相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。060182J 初頭に来る「はい、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。それらも前後文のつながりに関わる言語行動である。

以上のように、I 類のパターンでは、後文の初頭行動によって、つながりの働きをする。III 類のパターンでは、話し手が前文の末尾行動を通じて、自分の次の発話につなげようとするが、その言語行動が無効になったと考えられる。実質は、I 類と同様に、聞き手(後文)の初頭行動がつながりの働きをするのである。

次は、話し手と聞き手とが交替しない場合のⅠ-a とⅢ-a を取り上げて観察する。次のデータが挙げられる。

(276) 030105E: 【どうするかね（ねえ）あれよね、ならんにしてもさあ、】
【動き始めるのは結局 3 年から。】
030106D: 【うん、そうなんよ、やあ、どうしよう迷ってる。】
【なんか、前も言ったと思うけどさあ、（うん）】

(277) 050176I: 【そうだよ、許されるよね。】
050177H: 【うん】
050178I: 【春のよそおいをいちぶくに行ってみようかと思う、】
【でも焼けるけどね。】

(278) 050323I: 【そこで、キャンセルが発生して言ってるということは、】
【時間が思い切りバッティングしてたんやね。】
050324H: 【うん、なんか、車送ってくれるのはありがたいけど（うん）、】
【なんか、私が行くみたいな（うんうん）、】
【私が私がみたいな。】

(279) 060302I: (前略)
【今、何件ですか、200 件とか、もっとできるのかな、】
【はい、（あ）そんなできる、できるわけなんですけど、】
【だから、50 件で、（はい）50 件いっぱいなっちゃうと、（はい）】
【もっとも使わないだろうなあというを、】

(276), (277)は、Ⅰ-a のパターンのデータである。(276)の 030106D の観察対象となる後文では、初頭に来る「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。2 つの文においては、それは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(277)も同様に、050178I の後文の初頭に来る「でも、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それも前後文のつながりに関わる言語行動である。

(278), (279)は、Ⅲ-a のパターンのデータである。(278)の 050324H の観察対象とな

る前文では、末尾に来る「けど、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「なんか、」は、「言いよどみ」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。2 つの文においては、それらは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(279)も同様に、060302I の観察対象となる前文の末尾に来る「けど、」に、相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文の初頭に来る「だから、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それらも前後文のつながりに関わる言語行動である。

以上のように、I 類のパターンでは、後文の初頭行動によって、つながりの働きをする。III 類のパターンでは、話し手が前文の末尾行動を通じて、自分の次の発話につなげようとするが、(278), (279)を見ると、「けど」の確定の逆接条件という意味が消えてしまう。従って、言語行動としては、前後文のつながりに関わる言語行動が無効になったと考えられる。実質は、I 類と同様に、後文の初頭行動がつながりの働きをするのである。

6.3.2.2. II 類と III 類との比較

本節では、II 類と III 類のパターンを比較する。まず、話し手と聞き手とが交替する場合の II - a と III - a を取り上げて観察する。次のデータが挙げられる。

(280) 040052G: 【なんかね、普通の同じくない？】
040053F: 【どれぐらいかかった？】
【私、1 ヶ月、2 ヶ月かかってない。】
040054G: 【ああ、でも、目方けっこう冷たっけんなあ。】

(281) 050004I: 【えっ、マッサン見た？】
050005H: 【マッサン今日で終わりですか？】
050006I: 【明日、明日で終わり。】
050007H: 【ああ、{笑い}エリーが倒れてて(うんうん)、】

(282) 010020B: 【えとね、なんか、あの、週土曜日に集まって、】
【運動しようぜーという。】
010021A: 【で、ケイドロ？】
010022B: 【うん、バレーもバスケットも普通にするよ。】

(283) 060124J: 【そして、災害もあるし、】

060125I: 【うんうん、そうですよね、地震もまた来るって確実に来るとか言ってるじゃないですか？】

060126J: 【そうね、歴史的に見ればですね。（うん）】

【で、また、安倍さんはね、変なこと言ってるし、】

(280), (281)は、II - a のパターンのデータである。(280)の 040052G の観察対象となる前文では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。2 つの文においては、それは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(281)も同様に、050005H の末尾に来る「か」「？」に、相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。2 つの文においては、それも前後文のつながりに関わる言語行動である。

(282), (283)は、III - a のパターンのデータである。(282)の 010021A の観察対象となる前文では、末尾に来る「？」は、「終助詞及びイントネーションによる共有」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。010022B の初頭に来る「うん、」は、「疑問に対する応答」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。2 つの文においては、それらは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(283)も同様に、060125I の末尾に来る「じゃないですか」「？」に、相当する末尾行動は、「発話或いは話題を共有する言語行動」である。060126J の初頭に来る「そうね、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題に応答する言語行動」である。2 つの文においては、それらも前後文のつながりに関わる言語行動である。

以上のように、II 類のパターンでは、前文の末尾行動によって、つながりの働きをする。III 類のパターンでは、後文(聞き手)の初頭行動は、前文(話し手)の末尾行動に応じる言語行動として、つながりの働きをする。要するに、後文の初頭行動は、前文の末尾行動とは依存的な関係である。従って、後文の初頭行動は、前後文のつながりの働きが無効になると考えられる。実質は、II 類と同様に、前文の末尾行動がつながりの働きをするのである。

次は、話し手と聞き手とが交替しない場合の II - b と III - a を取り上げて観察する。次のデータが挙げられる。

(284) 050033H: 【{笑い}マイクが、なんかへんですよね。】

050034I: 【{笑い}どう、なんかね、なんか、何っつったけぇなあ、】
【なんか、マッサンが、なんか、言ったのに(うん)、】

【お母さんの料理とてもおいしいですみたい。({笑い})】

(285) 050163H: 【じわじわと来る。】

050164I: 【そうそうそう、こんなことなってて、】
【ちょっとびっくりした。】

050165H: 【けっこう痛そう。】

(286) 040206G: 【うん】

040207F: 【ていう分かってるのに、】
【でも、やっちゃう、やっちゃう、】

【進み進みにいけんから、進み進みにいけんから。】

(287) 030206E: (前略)

【けっこう、習い事、遅くによりよったけど（うん)、】

【もう、4 歳とか 3 歳ぐらいからやり始めて、】
【で、たぶん私を無意識で、まあ、見てはいるんじゃないっていうのは、】

(後略)

(284), (285)は、II - b のパターンのデータである。(284)の 050034I の観察対象となる前文では、末尾に来る「のに、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。2 つの文においては、それは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(285)も同様に、050164I の観察対象となる前文の末尾に来る「(な）ってて、」に、相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。それも前後文のつながりに関わる言語行動である。

(286), (287)は、III - a のパターンのデータである。(286)の 040207F の観察対象となる前文では、末尾に来る「のに、」は、「接続表現」という末尾形式で、それに相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文では、初頭に来る「でも、」は、「接続表現」という初頭形式で、それに相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。2 つの文においては、それらは、前後文のつながりに関わる言語行動である。(287)も同様に、030206E の観察対象となる前文

の末尾に来る「(始め) て、」に、相当する末尾行動は、「発話あるいは話題を継続する言語行動」である。後文の初頭に来る「で、」に、相当する初頭行動は、「直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」である。それらも前後文のつながりに関わる言語行動である。

以上のように、II 類のパターンでは、前文の末尾行動によって、つながりの働きをする。III 類のパターンでは、(286)を見ると、後文の初頭形式「でも、」と前文の末尾形式「のに、」とは、同様に、確定の逆接条件という意を表す。また、(287)を見ると、後文の初頭形式「で」と前文の末尾形式「(初め)て」とは、同様に、確定の順接条件の意を表す。言語行動としては、後文の初頭行動が前文の末尾行動と重なって、強調あるいは維持する働きが見られる一方、つながりの働きが弱くなると考えられる。実質は、II 類と同様に、前文の末尾行動がつながりの働きをするのである。

7. まとめ

文の初頭及び末尾はどうなっているか、互いにどのように関連するかについては、従来のモダリティ論では、おもに末尾の言語形式・機能にしか焦点が当たっておらず、初頭要素は末尾要素と依存関係があるものとしてしか捉えられていなかった。本論文では、自然談話のデータを利用し、モダリティ論と異なる観点、即ち言語行動の観点から、文の初頭および末尾に現れる性質を分析した。

本論文では、まず、文の初頭形式及び末尾形式に現れるものを記述し、それらの言語形式に相当する言語行動を設定した。即ち、1 つの文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動と末尾行動の関係を観察してみた。また、この関係を前提として、比較的ミクロな観点から、2 つの文がつながっていくときに、前文の末尾行動及び後文の初頭行動の間の関係、すなわち横の関係を分析した。以下では文の初頭行動と末尾行動との関係を分析した結果について、まとめて示す。

7.1. 2 つの鏡像関係

本節では、文の初頭行動と末尾行動との関係を、「文内部レベル」と「文を超えたレベル」といった 2 つのレベルからまとめる。

7.1.1. 文内部レベル

4.では、まず、文の初頭形式及び末尾形式に現れるものを記述し、それらの言語形式に相当する言語行動を設定した。

文の初頭行動は、5 つの言語行動に下位分類でき、11 種類の言語形式が見られた。末尾行動も、5 つの言語行動に分類でき、11 種類の言語形式が見られた。

また、5.では、初頭行動と末尾行動の間に類似したものが見られることから、文の初頭形式及び末尾形式をもとに、初頭行動及び末尾行動の下位分類した言語行動の統語的配列について分析した。

下位分類できた初頭行動及びその配列は、下記の通りである。

①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動
②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動
③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動
④後続命題に態度を表明する言語行動
⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動

これらの初頭行動のうち、①，②は聞き手に関わる言語行動である。また、③，④，⑤は命題に関わる言語行動である。

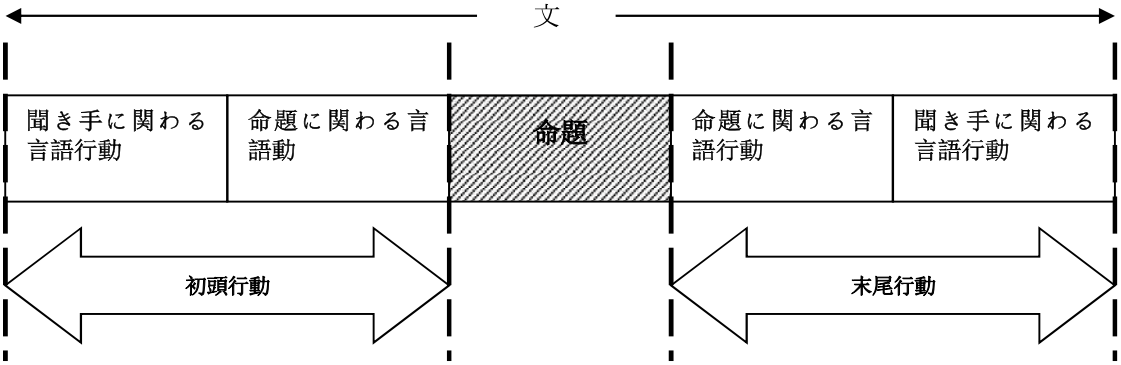
また、下位分類できた末尾行動及びその配列は、下記の通りである。

①既出命題に態度を表明する言語行動
②発話あるいは話題を完了する言語行動
③発話あるいは話題を継続する言語行動
④既出命題を焦点化する言語行動
⑤発話あるいは話題を共有する言語行動

これらの末尾行動のうち、①，②，③，④は命題に関わる言語行動であり、⑤は聞き手に関わる言語行動である。

また、その上で、初頭行動と末尾行動の鏡像関係を論じた。この鏡像関係を図示すれば、［図 16］のようにまとめられる。

［図 16］初頭行動と末尾行動との鏡像関係



［図 16］に示したのは、文が発話されるとき、初頭行動及び末尾行動がどのように構成されるかということである。ここでは、文の命題を中心として、命題から相対的に外側には聞き手に関わる言語行動が、相対的に内側には命題に関わる言語行動がそれぞれ位置している。

その結果、初頭行動と末尾行動とは同じ性質をもち、命題を中心として鏡像関係にあることが判明した。

7.1.2.　文を超えたレベル

6.では、文と文とがつながる際、初頭行動及び末尾行動どうしの横の関係について、考察するとともに、前後文のつながりに関わる言語行動を設定した。

前後文のつながりに関わる初頭行動は以下の①～③である。

①直前の発話あるいは話題に応答する言語行動
②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動
③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動

初頭行動の「④後続命題に態度を表明する言語行動」「⑤後続命題の一部を焦点化する言語行動」は、いずれも前後文のつながりを示さず、後続命題に関わる言語行動である。

一方、前後文のつながりに関わる末尾行動は以下の③～⑤である。

③発話あるいは話題を継続する言語行動
④既出命題を焦点化する言語行動
⑤発話あるいは話題を共有する言語行動

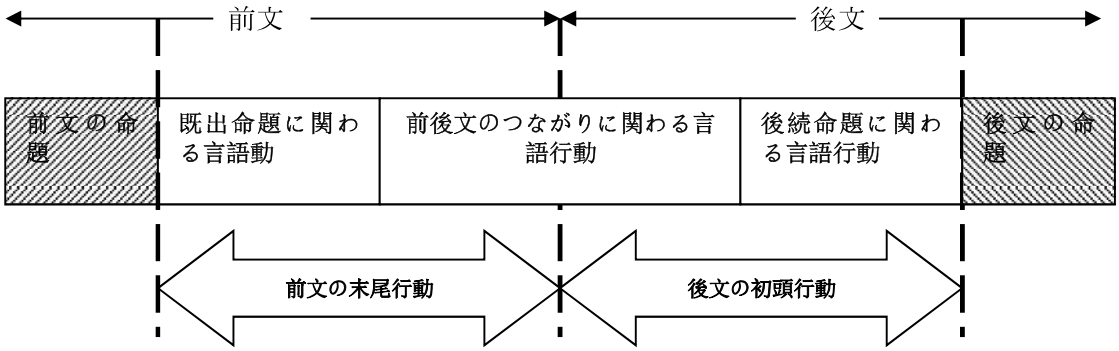
末尾行動の「①既出命題に態度を表明する言語行動」「②発話あるいは話題を完了する言語行動」は、いずれも前後文のつながりを示さず、既出命題に関わる言語行動である。

そこで、話し手と聞き手と交替する場合と交替しない場合に分けて、つながりに関わる言語行動はどのように組み合わさるかについて考察した。話し手と聞き手とが交替する場合と交替しない場合は、いずれも前後文のつながりに関わる言語行動の出現する類型は、以下のように、大きく 3 つに分けられる。

I 類　前文の末尾行動が出現せず、後文の初頭行動が出現する。
II 類　前文の末尾行動が出現するが、後文の初頭行動が出現しない。
III 類　前文の末尾行動と後文の初頭行動が、両方出現する。

また、その上で、2 つの文がつながる際に、前文の末尾行動と後文の初頭行動の統合関係を論じた。この関係を図示すれば、［図 17］のようにまとめられる。

［図 17］前文の末尾行動と後文の初頭行動の統合関係

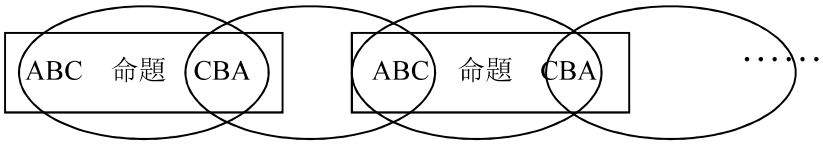


［図 17］に示したように、2 つの文がつながる際、言語行動が前後文の命題に囲まれている。言語行動の中には、前後文のつながりに関わる言語行動を中心として、前文の既出命題に関わる言語行動あるいは後文の継続命題に関わる言語行動が、それぞれ相対的に外側に位置している。すなわち、前文の末尾行動と後文の初頭行動とは、単なる統合関係ではなく、鏡像関係にあるといえる。

7.2.　2 つの鏡像関係が意味すること

本論文では、言語行動に焦点を当てることによって、言語行動の 2 つの鏡像関係を発見することができた。7.1.1.では、初頭行動と末尾行動とは同じ性質をもつことが分かった。文の中では、初頭行動と末尾行動は、鏡像的に同じ種類の言語行動が現れている。このような関係は、文の中で完結するのではなく、文を超える文どうしの相互関係も考えるべきである。これは、7.1.2.にまとめた。そこでは、文と文とがつながる際、前文の末尾行動と後文の初頭行動にも鏡像的に同じ種類の言語行動が現れる。そこで、談話の展開を、下記のような簡略したモデルとしてまとめてみる。

［図 18］談話展開のモデル



［図 18］では、四角形は文を、A・B・C は下位分類した言語行動をそれぞれ表す。楕円は鏡像関係を指す。例えば、最初の楕円では、文の初頭行動である ABC という連続が、

末尾行動では鏡像関係となり、CBA という連続で現れている、ということを示している。同様に、左から 2 番目の楕円では、最初の文の末尾行動である CBA という連続と、次の文の初頭行動である ABC という連続が、文を超えたレベルで鏡像関係にある、ということを示している。

［図 18］の簡略化したモデルからわかることは、一つ一つの鏡像関係がチェーンのようにつながっていることである。さらにこのつながりは、話者が交替しても交替しなくても存在し、また「喧嘩」のように談話の流れが一見破綻しているような場合にも存在しているのではないかと予測できる。

従来の談話研究では、「話し手と聞き手が協力して談話（会話）をスムーズに進行している」といったことが談話進行・展開の大前提として謳われることが多々あるが、そこでは「「スムーズ」とはどういうことか」という問いに答えることは一切していない。本論文で提示した「鏡像関係のチェーンが談話（会話）を連結している」という考え方（ルール）は、談話（会話）がスムーズであるかどうかは無関係である。どのようなタイプの談話であっても、談話参与者が何人いたとしても、それが談話である限りは、同じ考え方（ルール）に支配されていると主張したい。

8. 問題点と今後の課題

本論文では、言語行動に焦点を当てることによって、文という言語単位を対象として、共通する性質を持つ言語行動が文の初頭及び末尾の鏡像関係及び統合関係にあることを発見した。分析の結果によると、それらの関係は、自然談話のまとまりの中で、話し手及び聞き手が、如何に談話を展開させるか、談話をスムーズに進行させるか、といった問題に、より客観的な証拠になると考えられる。しかし、問題点や今後の課題も数多く残っている。

まず、本論文の 4.2.1.4.では、「既出命題に態度を表明する言語行動」を設定するために、「肯定・否定の態度」という対応する言語形式を取り上げて観察した。否定には、「ない」など否定形が含まれるものを否定の態度として捉え、それが含まれていないものをすべて肯定の態度として、単純に分類している。しかし、例えば、話し手に「出席するか」と言われた際、聞き手の返答になる文の末尾形式に、「出席しない」のようなものあるいは、「欠席する」のようなものが出現する可能性がある。前者が文法的否定形式、後者が語彙的否定形式と考えられるが、本論文の判断基準では、前者が否定の態度、後者が肯定の態度という言語行動を判断してしまう。そこで、肯定・否定の態度を判断する際、形式と意味・機能との両方を考える必要が出てくる。肯定・否定という言語行動にどのような言語形式を対応するかについて、今後は、厳密に分析していきたい。

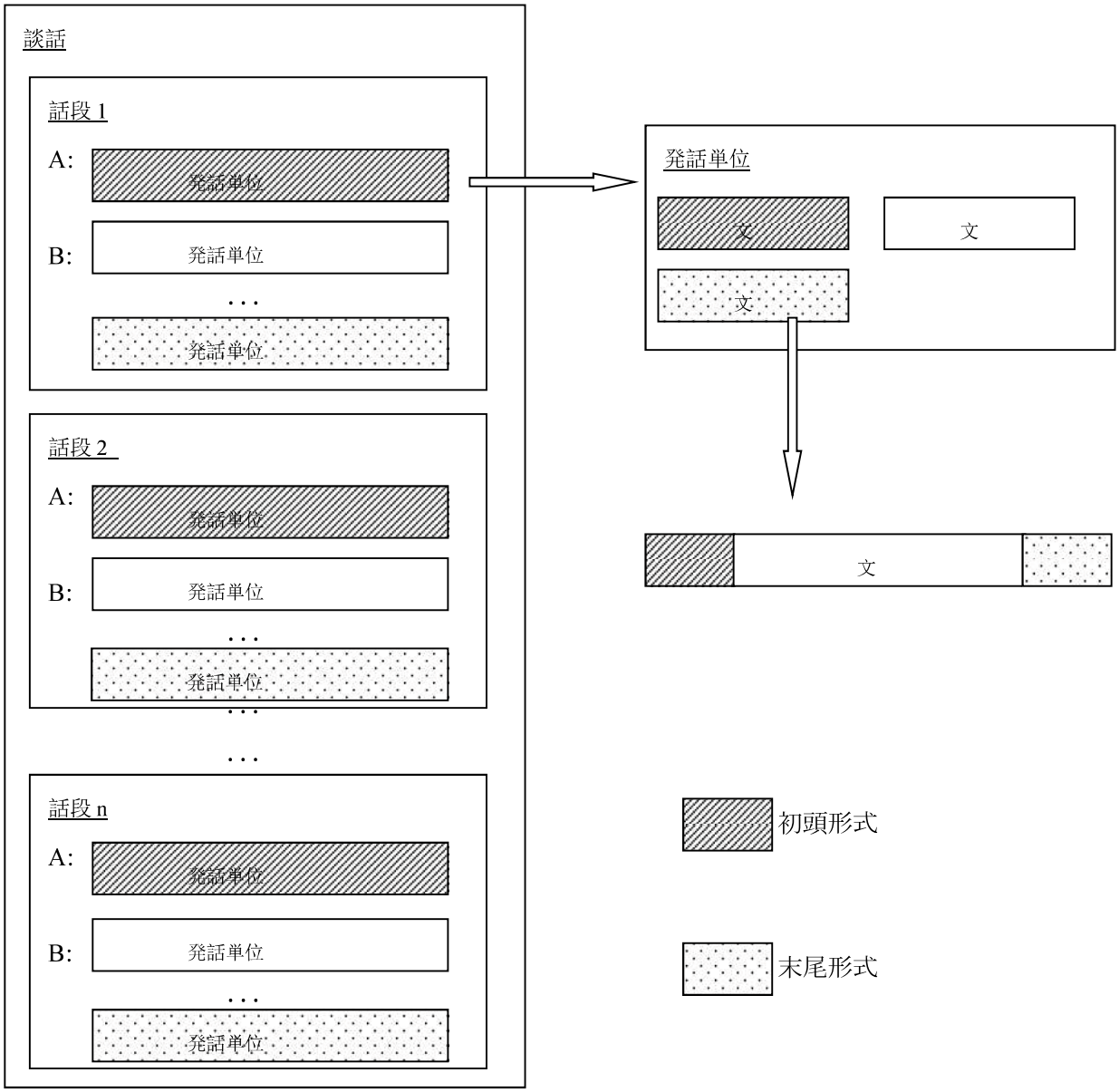
また、本論文では、前後文のつながりに関わる言語行動の出現するパターンを、話し手と聞き手とが交替する場合と交替しない場合を分けて分析した。前文の末尾行動が出現する場合は、一つの言語行動だけが出現する。その際に、後文の初頭行動が全ての組み合わせで出現する。一方、前文の末尾行動が出現しない場合は、後文の初頭行動が全ての組み合わせで出現する、という結果をまとめた。しかし、話し手と聞き手とが交替する場合では、前文の末尾行動「⑤発話あるいは話題を共有する言語行動」が出現する際に、後文の初頭行動「②直前の発話あるいは話題を一旦切断してから継続する言語行動」「③直前の発話あるいは話題になる命題の一部を焦点化する言語行動」という組み合わせで出現するパターンは、今回のデータからは見られない。今後は、談話調査のデータを増やして、さらに本論文の結果を検証する必要がある。

次に、本論文の 6.の最後に、話し手と聞き手と交替する場合あるいは交替しない場合においては、「Ⅰ－aとⅢ－g」、「Ⅰ－aとⅢ－a」、「Ⅱ－aとⅢ－a」、「Ⅱ－bとⅢ－a」を取り上げて観察して、前文の末尾行動あるいは後文の初頭行動は、前後文のつながりの働きが無効になる、という問題を記述した。しかし、言語行動が無効になる観点を提出する際、

その対立に、言語行動が有効になる考え方が言い出されると思われる。言語行動の有効か無効かという問題は、本論文の主旨と異なるので深く触れてなかった。ところで、考えてみれば、前文の末尾行動が無効になるのは、話し手が発話の隙間を聞き手に与えるのか、あるいは、聞き手が発話に挿入しようとする機会を作るのか、と筆者は考えている。要するに、この考え方は、言語行動の視点で談話分析の割り込みという現象を分析できると予測される。これは、今後すべてのパターンを取り上げて検証する必要がある。一つの課題として研究していきたい。

最後に、文という言語単位を超えたレベルでの鏡像関係も想定される。談話活動の過程に独立する採用の単位的存在は文である。本論文では文を対象としているが、文という言語単位を超えたレベルでは、「発話単位」「話段」を仮定することができる。これらの言語単位の概念図は［図 19］のように示す。

［図 19］言語単位の概念図



［図 19］のように、談話においては、文が最小な言語単位として存在する。また、談話の参加者の交替によって、1 つあるいは複数の文を含む発話のまとまりが「発話単位」となる。さらに、「発話単位」が複数連続してまとまった表現内容を表わす場合は「話段」となる。「発話単位」「話段」といった言語単位にも、文と同様に、初頭形式と末尾形式が見だせること、初頭行動と末尾行動も捉えられると予測できる。要するに、このことは言語単位レベルを超えて同様の関係性が保持されるということを意味しているが、これは音韻論や統語論で提唱されている「継承(percolation)」という概念を彷彿とさせるものである。

文における言語行動の鏡像関係と統合関係は、上位のレベルへと継承されている可能性が推測される。言語単位レベルどうしの相互関係は、今の段階では、解明できていないが、今後の課題として進んでいきたいと思う。

9. おわりに

日本語は、膠着的な言語であるため、文の末尾におけるモダリティあるいは陳述などの表現が重要な意味を持つと考えられる。特に、文の末尾については日本語研究の領域で重視されてきた。本論文では、文に着目し、文の言語形式と言語行動とを対応させ、言語行動の鏡像関係及び統合関係を有していることを発見することができた。それらの関係を文内部レベルと文を超えたレベルといった2つのレベルから、2つの鏡像関係が仮定できた。この論文を通して、日本語における文の初頭は、末尾と同様に、重要であると認識するに至った。

また、日本語はモダリティが相対的に発達している言語と考えられるので、モダリティの研究が盛んである。しかし、モダリティの体系を完全に解明したとは言えないだろう。従って、本論文の 1.では、日本語の文を対象として、モダリティ論の観点では解説できないところを指摘した。それを研究動機として、この論文を展開した。そして、結論を得た今、筆者は中国語母語話者として、中国語のモダリティ論にも同じような問題を指摘できるかどうか、ということが頭に浮かんできた。さらに、本論文で論じた文の初頭性及び末尾性は、中国語を含め、日本語以外の言語にも同じように認められるかどうか、人間の言語に一般化できるのかどうか、という大きな課題が見えてきた。これらは、筆者の今後の研究の中で解明していきたいと考えている。

【参考文献】

アンドレイ・ベケシュ（2015)「文脈から見た文末表現と主題の持続ー社説に潜む対話ー」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版 pp.243-264.

井島正博（2012)「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』第 8 号 pp.95-145.

伊豆原英子（2003)「終助詞 「よ」「よね」「ね」 再考」『愛知学院大学教養部紀要』第 51 巻 2 号 pp.1-15.

庵功雄（1994)「結束性の観点から見た文脈指示―文脈指示に対する一つの接近法―」『日本語学報 13 大阪大学 pp.31-42.

庵功雄（1999)「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』36 pp.3-19.

井島正博（2012)「モノだ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』第 8 号 pp. 95-145.

石黒圭ほか（2009)「接続表現のジャンル別出出現頻度について」『一橋大学国際教育センター紀要』12 pp.73-85.

石黒圭（2011)「文章理解における一貫性の把握について」『一橋大学国際教育センター紀要』2 pp.3-11.

石田潤（1987)「連接文の理解に関する研究の展望」『広島大学教育学部紀要』第 1 部 第 36 号 pp.161-170.

石田潤（1988)「連接文の理解に関する研究の展望Ⅱ―連接文の理解の認知的メカニズムー」『広島大学教育学部紀要』第 1 部 第 37 号 pp.125-133.

糸井通浩（2003)「文章・談話研究の歴史と展望」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp.275-298.

伊東昌子・永田良太（2007)「談話場における相互行為の構築に関わる文末詞の修辞機能」『認知科学』14.3 pp.282-291.

今田水穂（2011)「「だ」のモダリティ性についてー事実確認的発話と行為遂行的発話の対立からー」『筑波応用言語学研究 』18 号 pp.19-32.

岩崎勝一・大野剛（2007)「「即時文」・「非即時文」―言語学の方法論と既成概念」串田秀也・定延利之・伝康晴編『時間の中の文と発話』 ひつじ書房 pp.135-158.

上原聡・福島悦子（2004)「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」『世界の日本語教育』14

宇佐美まゆみ (2007)「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007 年 3 月 31 日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』 平成 15－18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)研究成果報告書(課題番号 15320064)

梅林博人 (1996)「感動詞の位置」『国文学　解釈と鑑賞』第 61 巻 2 号 pp.95-103

榎本美香 (2007a)「日本語におけるターン構成単位の認知メカニズム」『社会言語科学 9』pp.17-29.

榎本美香 (2007b)「発話末要素」の認知と相互作用上の位置づけ」串田秀也・定延利之・伝康晴編『時間の中の文と発話』ひつじ書房 pp.203-230.

大鹿薫久 (2004)「モダリティを文法史的に見る」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店 pp.193-214.

大島デイヴィッド義和 (2013)「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』 第 43 号 pp.47-63.

大島資生 (2004)「連体修飾の構造」北原保雄編『朝倉日本語講座 5 文法Ⅰ』朝倉書店 pp.90-108.

岡部嘉幸 (2013)「モダリティに関する覚え書き」『語文論叢』28　pp.96-75.

奥田靖雄 (1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房

影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎・由元陽子 (1997)『語形成と概念構造』研究社

加藤重広 (2001)「文末助詞「ね」「よ」の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』第 35 巻 pp.31-48.

加藤陽子 (1994)「接続助詞と接続詞に関する一考察」 *The language programs of the International University of Japan: working papers 5*　pp.15-26.

河内彩香 (2003)「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』 pp.41-55.

菊地康人 (2010)「日本語の 2 種類の「文構成原理」と、「が」の「文構成上の機能」」　上野善道監修『日本語研究の 12 章』明治書院 pp.117-133.

岸本秀樹 (2013)「日本語の統語構造:相関等位節から見た階層」遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』開拓社 pp.15-43.

北野浩章 (2005)「自然談話に見られる逸脱的な文の構築 試行的提示のための形式「･･･というか」「･･･ですか」など」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房 pp.91-121.

北原保雄（1981)『日本語の文法（日本語の世界 6)』中央公論社
北原保雄（2004)「文法について」北原保雄編『朝倉日本語講座 5 文法Ⅰ』朝倉書店 pp.1-10
北原保雄・北原博雄（2004)「文の構造」北原保雄編『朝倉日本語講座 5 文法Ⅰ』朝倉書店 pp.11-51.
金珍娥（2013)『談話論と文法論 日本語と韓国語を照らす』くろしろ出版
串田秀也（1997)「会話のトピックはいかにつくられていくか」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 pp.173-212.
串田秀也（2005)「参加の道具としての文ーオーバァーラップ発話の再生と継続ー」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房 pp.27-62.
串田秀也（2005)「「いや」のコミュニケーション学――会話分析の立場から」『言語』vol.34 No.11 pp.44-51.
久野暲（1973)『日本文法研究』大修館書店
久野暲（1978)『談話の文法』大修館書店
久野暲（1983)『新日本文法の研究』大修館書店
窪薗晴夫・伊藤順子・Armin Mester（1997)「音韻構造から見た語と句の境界:複合名詞アクセントの分析」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版 pp.147-165.
河野武（2011)『関連性モダリティの事象 イントネーションと構文』開拓社
郡史郎（1997)「日本語のイントネーション- 型と機能-」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 三省堂 pp.169-202.
佐久間まゆみ（1987)「「文段」認定の一基準(Ⅰ)ー提題表現の統括ー」『文藝言語研究 言語篇』11 筑波大学文芸・言語学系 pp.89-135.
佐久間まゆみ（1990)「文段認定の一基準(Ⅱ)ー接続表現の統括ー」『文藝言語研究 言語篇』11 筑波大学文芸・言語学系 pp.35-66.
佐久間まゆみ（1993)「日本語の文章構造 I. II. III.」『日本語の表現と理解』放送大学教育振興会 pp.90-123.
佐久間まゆみ（1996)「文の文法と文連続の文法―文章の文法への志向―」『日本語学』15 - 9.
佐久間まゆみ･杉戸清樹･半澤幹一（1997)『文章・談話のしくみ』おうふう
佐久間まゆみ（2003)「文章･談話における「段」の統括機能」北原保雄監修・佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp.91-119.
佐久間まゆみ（2006/2012)「文章・談話の分析単位」月刊『言語』編集部編『『言語』セレクション第 1 巻』大修館書店 pp.93-100.
佐伯哲夫（1975)『現代日本語の語順』笠間書院

佐伯哲夫（1998)『要説 日本文の語順』くろしお出版
定延利之・田窪行則（1995)「談話における心的操作モニター機構: 心的操作標識「ええと」と「あの（一)」」『言語研究』第 108 号 pp.74-93.
定延利之（2005)「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」『言語』vol.34 NO.11 pp.33-39.
ジノ・ソング（1990)「文の構造」『言語学の招待』南雲堂 pp.244-289.
柴谷方良・影山太郎・田守育啓（1982)『言語の構造－理論と分析－意味・統語篇』くろしお出版
渋谷勝己（2003)「言語行動の研究史」北原保雄監修・荻野綱男編『朝倉日本語講座 9 言語行動』朝倉書店 pp.241-262.
白川博之（1996)「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第 6 号 pp.9-17.
杉戸清樹（1992)「言語行動」真田信治ほか『社会言語学』おうふう pp.29-47.
杉戸清樹（2006)「「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版 pp.1-10.
杉村泰（2004)「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」『 名古屋大学言語文化論集』第 25 号 pp.99-111.
田窪行則（1995)「音声言語学の言語学的モデルをめざして－音声対話管理標識を中心に－」『情報処理』vol.36 NO.11 pp.1020-1026.
田窪行則（2005)「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』vol.34 NO.11 pp.14-21.
田窪行則（2010)『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版
田窪行則・金水敏（1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会（編)『文法と音声』くろしお出版 pp.257-279.
俵山雄司（2015)「談話終結部における文のタイプ」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版 pp.265-283.
寺村秀夫（1981)「『もの』と「こと」」『馬淵和夫博士退官記念国語学論文集』大修館書店, pp.743-763.
寺村秀夫（1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
寺村秀夫（1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ― 日本語文法集』くろしお出版
伝康晴（2007)「発話冒頭付近での語句の繰り返しの機能」串田秀也・定延利之・伝康晴編『時間の中の文と発話』ひつじ書房 pp.103-134.
冨樫純一（2002)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』第 7 号 pp.15-31.
冨樫純一（2005)「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」『言語』vol.34 No.11 pp.22-29.
友定賢治（2005)「感動詞への方言学的アプローチ―「立ち上げ詞」の提唱―」『月刊言語』34-11 大修館書店 pp.56-63.

友定賢治編（2015）『感動詞の言語学』ひつじ書房
中井陽子（2003a）「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16　pp.71-95.
中井陽子（2003b）「話題開始部で用いられる質問表現:日本語母語話者同士及び母語話者/非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語研究』2　pp.37-53.
中島平三・瀬田幸人監訳（2009）『オックスフォード言語学辞典』朝倉書店
中村明ほか編（2011）『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
長田久男（2003）「文章・談話における連文の成立」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7　文章・談話』朝倉書店　pp.66-90.
永田良太（2010）「接続助詞ケドの発話解釈過程と聞き手の言語的反応との関わり」『鳴門教育大学研究紀要 25』pp.251-260.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説―日本語の記述文法を目指して―』 くろしお出版
仁田義雄ほか（2000）『文の骨格　日本語の文法 1』岩波書店
仁田義雄（2010）『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書店
仁田義雄・宮島達夫編（1995）『日本語類義表現の文法　複文・連文編』くろしお出版
西坂仰（2005）「複数の発話順番にまたがる文の構築ープラクティスとしての文法Ⅱー」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』ひつじ書房 pp.63-90.
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版
日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
J.V.ネウストプニー（1979）「言語行動のモデル」南不二男編『講座言語第 3 巻 言語と行動』大修館書店 pp.33-68.
J.V.ネウストプニー（2003）「日本の言語行動の過去と未来」北原保雄監修・荻野綱男編『朝倉日本語講座 9 言語行動』朝倉書店 pp.1-28.
野田尚史（2002）『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店
野田尚史（2007）「時間の経過から生まれる破格文」串田秀也・定延利之・伝康晴編『時間の中の文と発話』ひつじ書房 pp.1-33.
野田尚史（2013）「日本語の副詞・副詞節の階層構造と語順」遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』開拓社 pp.69-101.
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
花井善朗（2003）「モダリティを表す副詞の類義性と多義性ー「やはり」、「さすが」、「しょせん」を中心にー」『ジャーナル CAJLE』5　pp.167-180.

林四郎（1960a/2013)『文の姿勢の研究』ひつじ書房
林四郎（1960b)『基本文型の研究』 明治図書出版
林四郎（1979)「言語行動の概観」南不二男編『講座言語第 3 巻 言語と行動』大修館書店 pp.69-100.
飛田良文ほか編（2007)『日本語学研究事典』明治書院
堀口純子（1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
前田直子（2010)「形式名詞」上野善道監修『日本語研究の 12 章』明治書院 pp.165-177.
益岡隆志（1991)『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志（1997)『複文(新日本語文法選書(2))』くろしお出版
益岡隆志（2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
益岡隆志（2007)『日本語モダリティ探究』くろしお出版
益岡隆志（2013)「名詞修飾節と文の意味階層構造」遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』開拓社 pp.185-199.
南不二男（1974)『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1979)「言語行動研究の問題点」南不二男編『講座言語第 3 巻 言語と行動』大修館書店 pp.5-32.
南不二男（1981)「日常会話の話題の推移ー松江テクストの資料としてー」『藤原与一先生古希記念論集「方言学論叢」Ⅰ』三省堂 pp.87-112.
南不二男（1983)「談話の単位」国立国語研究所『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育Ⅰ』大蔵省印刷局 pp.91-112.
南不二男（1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
南不二男（1997)『現代日本語研究』三省堂
南不二男（2003)「文章・談話の全体的構造」佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp.120-150.
三木悦三（2000)「サールと「遂行性」」『熊本県立大学文学部紀要 第 7 巻第 1 号』pp.33-57.
宮崎和人ほか（2002)『モダリティ』くろしお出版
泉子･K･メイナード（1993a)『日英語対照研究シリーズ 2 会話分析』くろしお出版
泉子･K･メイナード（1993b)『談話分析の可能性: 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
泉子･K･メイナード（2004)『談話言語学：日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
泉子･K･メイナード（2005)『談話表現ハンドブック』くろしお出版

森山卓郎（2001)「終助詞『ね』のイントネーション– 修正イントネーション制約の試み–」
音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版 pp.31-54.
森山卓郎・工藤浩（2000)『モダリティ』岩波書店
山田敏弘（2004)『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
熊磊（2016)「日本語談話における文の初頭行動・末尾行動の鏡像関係」『東アジア研究』
14 山口大学大学院東アジア研究科 pp.161-178.

謝辞

本論文の完成にあたり、最初のテーマの決定から、結論のまとめまで全てにおいて、長期にわたって厳しくも熱意のあるご指導、ご鞭撻をくださいました、指導教員の有元光彦先生に厚く御礼申し上げます。有元先生は、私の論文を何度も読んで、細かいところまで、貴重なコメントを頂きまして、大変ご苦労をかけてしまいましたことに心よりお詫びを申し上げたいと思います。

私は 2009 年に日本に来て、研究生から修士、博士課程まで、ずっと有元先生のもとで勉強と研究をしてきました。先生にご指導いただいた数多くの時間は、私の生涯の宝ものとなりました。この 7 年半を糧として、これからの研究生活においても、努力を重ねていきたいと思います。

また、副指導教員である村上林造先生、吉村誠先生にも、本論文の執筆にあたり、ご指導、ご助言、ご協力を頂きました。お二人の先生にも、私が研究生の時からずっとお世話になってきました。ここに感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、談話調査にご協力いただいた山口大学教育学部の学生たち、教育学研究科の院生たち、日本人の友人に心から感謝申し上げます。また、本論文の日本語のチェックをしてくださった日本人の友人に感謝したいと思います。個人情報に関わるため、ここでは皆様のお名前を割愛させて頂くことを、お許してください。

最後に、ここに至るまでの間、私を見守り、支え続けてくれた妻と、精神的にも経済的にも支えてくれた中国に居る家族に感謝の意を伝えたいです。本当にありがとうございました。

【付録】

談話調査のデータ

- 本データは、発話データだけではなく、言語行動を分析したものも付き加えている。
- 表の一番上の行に、左から「通し番号」「発話者」「発話」「言語行動」といった順で項目を配置している。
- 「通し番号」「発話者」に関しては、本論文の「3. 調査要領」p.9.に記載している。
- 「発話」に使用された表記に関しては、本論文の「3. 調査要領」p.9. に記載している。なお、下線された部分については、初頭形式が一重下線で、末尾形式は二重下線で示す。
- 「言語行動」に記入された番号は、言語形式に対応する下位分類した初頭行動及び末尾行動を指す。具体的に、本論文の「5.1.言語行動の配列」p.69.に記載している。